

元魔王ククルさん大復活！

香りひろがるお茶

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

色々あって元魔王ククルククルが大復活！ 打倒ルドラサウムと愛するケイブリスに会うため、ランス世界を駆け巡る!!

※ 最初はギャグ成分濃い目で、編と付く話はシリアスが入ります。

2014/05/01 20:22 誤って作品を削除してしまいました。今まで読んでくださった方、お気に入り登録・感想・評価などをしてくださった方々、本当に申し訳ございません。

目次

プロローグ	なんかしらんけど、わ	第六話	なんかしらんけど、わ
し復活	1	し策士	34
第一話	なんかしらんけど、わ	第七話	なんかしらんけど、わ
し博識	5	し焼失	41
第二話	なんかしらんけど、わ	第八話	リーザス奪還編 幕開
し大変	10	第九話	リーザス奪還編 第一
第三話	なんかしらんけど、わ	幕	53
し不運	15	第十話	リーザス奪還編 第二
第四話	なんかしらんけど、わ	幕	59
し幸運	24	第十一話	リーザス奪還編 第三
第五話	なんかしらんけど、わ	幕	65
わし失敗	28	第十二話	リーザス奪還編 第三

幕	第十四話	幕	第十九話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	閑話	幕	第十
——	87	——	——
幕	第十五話	幕	第二十話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第六	幕	第十
——	95	——	——
幕	第十六話	幕	第二十一話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第七	幕	第十
——	102	——	——
幕	第十七話	幕	第二十二話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第八	幕	第十
——	108	——	——
幕	第十八話	幕	第二十三話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第九	幕	第十
——	114	——	——
幕	第十九話	幕	第二十四話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第十	幕	第十
——	72	——	——
幕	第二十話	幕	第二十五話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第十	幕	第十
——	80	——	——
幕	第二十一話	幕	第二十六話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第十	幕	第十
——	129	——	——
幕	第二十二話	幕	第二十七話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第十	幕	第十
——	136	——	——
幕	第二十三話	幕	第二十八話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第十	幕	第十
——	144	——	——
幕	第二十四話	幕	第二十九話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第十	幕	第十
——	152	——	——
幕	第二十五話	幕	第三十話
——	——	——	——
——	リーザス奪還編	——	リーザス奪還編
——	第十	幕	第十
——	160	——	——

十六幕	——	第三十二話	ククルさん	i n	魔	171
第二十六話	リーザス奪還編	人領 その2	ククルさん	i n	魔	241
七幕	——	第三十三話	ククルさん	i n	魔	253
第二十七話	リーザス奪還編	人領 その3	ククルさん	i n	魔	262
八幕	——	第三十四話	ククルさん	i n	魔	262
第二十八話	リーザス奪還編	人領 その4	ククルさん	i n	魔	262
九幕	——					194
第二十九話	リーザス奪還編	終幕				206
第三十話	リーザス奪還編	幕裏				222
第三十一話	ククルさん					234
人領 その1	i n					234

プロローグ

なんかしらんけど、わし復活

あるところにルドラサウムという創造主が創りだした世界があった。そこは剣と魔法と暴力が支配する世界。ルドラサウムをただ楽しませるだけに存在する人々やモンスター達。彼らはお互いの平和を作り出すために戦争を繰り返し、影にいるルドラサウムに気づかず彼を楽しませていた。

ルドラサウムは長きに渡り世界を眺め、メインプレイヤーと呼称する観察対象を、彼が創りだした超神*の一人ローベン・パーンに何度も創らせていた。

※ ルドラサウムが世界を想像する際、最初に創りだした三神

最初のメインプレイヤーは丸い物、魂の形をそのままに肉体を与えた丸くて目がついた不思議な生命体であった。戦争をするには余りにも知能が未熟であったため、ルドラサウムに4000年程で飽きられてしまった。

前回の反省を活かし、今度は異様に知能が高く、肉体的にも優れているドラゴンが生まみ出された。これで大規模な戦争が見れると思ったのもつかの間、なんとドラゴンは戦

争を終結。すぐにルドラサウムは完璧すぎてもダメだな、と己の考えを改めさせられた。

そして現在。三代目のメインプレイヤーは人間である。程よい知能と肉体、なにより潜在的な暴力性がルドラサウムの趣味にぴったりハマった。作成から3500年ほど経ったが、彼らは未だに戦争と暴力を愛している。それには彼らがそのなるよう想定して創られたというのもあるが、とある存在が戦争と暴力の継続に一役買っていた。

この世界には魔王が実在する。魔王は世界の創造主ルドラサウムをより楽しませるためだけに、世界の敵役として作られた存在である。魔王はメインプレイヤーと必ず敵対するように仕組みられ、魔王を倒す手段は基本的にメインプレイヤー側には殆ど存在しなく、次代の魔王に力が継承されるまでは延々と戦いが続くのである。

その現在まで七代続く魔王制度の中で、最も長い任期を全うした歴代最強と呼ばれたものがいた。

初代魔王クククルククル。歴史から消えつつあるその名前にある時、光明が差す。その灯りが差した場所は、ルドラサウム大陸自由都市群が一つ、カスタムの街近くの草原であった。

「がはは、グットだー！」

男は女を強引に地面に押し付け、それはそれは楽しそうに腰を降っていた。街近くの草原で一組の男女が情事を行っているのである。女は息も絶え絶え、嗚咽を漏らしひたすらその行為を耐えていた。誰がどうみても同意なしの犯罪行為である。この一般の見解からしてみれば、最低最悪な鬼畜男こそが後に世界を創造主ルドラサウムの支配から救い出す大英雄ランスであった。しかしながらこの物語の主人公は彼ではない。

「それぞれ、いくぞー！ とーっ！」

ランスが景気良く声を揚げ、その行為は終わった。女は完全に脱力し、気絶してしまつたようだ。ランスは満足したようであり、その身支度を済ませると、女を残してその場を去つてしまった。鬼畜である。敢えてランスを庇うとすれば、この女は一見だらしなく隙だらけなランスの金錢をくすねようとしたのだつた。勿論失敗したためにこゝなつてしまつたのだが。

と、ここで奇妙な運命のいたずらが起きる。ランスが吐き出した皇帝液が草原の土に

染みこんでいくと、地面から白い塊がもももつと膨らみ溢れてきたのだ。白い塊はどんどんとその大きさを増し、更には小さな人間のような形にぶくぶくと変形しだした。ものの数分で白い塊は髪から目玉さえも、全身真っ白の女の姿になったのだ。

パチリ、と彼女の目がついに開く。体をゆっくりと持ち上げると、まずは己の体をじいつと見つめ、次に周囲をぐるりと見回し、すうと大きく深呼吸してから、最後にぐつと両手を空に掲げた。

「なんかしらんけど！ わし生き返ったー!!」

この少女こそがこの物語の主人公。初代魔王にして丸い者の王、ククルククルである。

第一話

なんかしらんけど、わし博識

魔王。それは大陸最強の生物。上辺でも肩書でもない。真実敵に値するものがないものが魔王というシステムである。

魔王には特徴がいくつかある。

まずは強靱すぎる肉体と無敵結界*。魔王を傷つけることが出来るのは、この世に二本しか無い伝説の剣2つだけ。

※ 言葉通り無敵の結界 十二話にて詳しく後述

次に不死。絶対に死なない。消滅もしない。これと無敵結界は三代目魔王によって手に入れた能力である。しかしながら三代目以降寿命は存在する。きっかり1000年。肉体が不死の力に耐えられなくなる。

最後に破壊衝動である。魔王となったものはメインプレイヤーと確実に敵対することを義務付けられているのだ。

初代魔王として君臨し、そして魔王の力を奪われたククルは不死ではなかった。ゆうに6000年近く生きたククルが死んだ時、体長4.7kmにもなる巨体は丸い者本来の魂の形である小さな球体へと戻り、野へと捨て去られた。しかし最強の魔王たるその肉体は、死後何千もの間その形を保ち続けていたのである。それが偶然ランスの皇帝液を浴びる機会を得てしまったのだ。ここにククルククルは目覚めた。肉体が丸い物ではなく、生前の自慢だった触手の一本の形をとっているが、恐らくランスの影響だろう。そう考えてしまうほどランスという男は特別であった。

「なんじゃ？わしの知らぬ間に妙な記憶がいつぱいあるのお。アリスソフト…ランス…ふむう。」

何故かはルドラサウムすら知らないだろう。彼女には1人の男の記憶が張り付いていた。その男は日夜ランスシリーズというPCゲームを行い、つい先日最新作のランスクエスト・マグナムをクリアした、という記憶までがククルが持っていたものだった。

ククルにとってその知識は驚くべき内容ばかりだった。今が何暦何年かは分からないが、最も衝撃的だったのはなんと全世界を支配していた丸い者が殆ど滅んでしまったということだった。超神によって魔王に選ばれたとはいえ、ククルは丸い物の王であ

る。ドラゴンに敗れたことは頭で理解しつつも、当然この事実にくくるは嘆いた。長きに渡る貝、そしてドラゴンとの戦争で得たものが結局のところ種の退廃だったとは。因みに彼女はゲームというものを知らなかったために、その男を未来視が出来るルドラサウム関係者と考えたとか。

「ぶぐ…。わしはここに丸い物復興を掲げんとするのじゃー！」

すっかり日も落ちた草原で、天に向かって半泣きでガッツポーズをする全裸の少女がここにいた。

「ねーねーあそこに変な女の子がいるよ。」

「これは新しい萌えだね！きつとアホの子全裸萌えだよ！」

「あいやー。僕たちは新たな時代の幕開けを見てしまったのかもしれない。」

いつの間にかククルの周りを囲むように三体のハニーが現れた。ククルにとっては初めて見るハニーである。このハニーという生き物は、見た目もその肉体も土製のハニワ。それじゃ生物じゃあないじゃないか、と憤慨してしまう気持ちもわかるが生命体である。割れると死ぬ。

「おお…。本当に時代が変わってしまったのじゃな…。それにしても陶器の生命体と

は末恐ろしいものじゃ。」

丸い者も人間からしてみれば訳の分からない不可思議生命体である。なにせ、30cm程の丸い物体が中を浮き、更には人間と同じように恋愛や社会生活を送っていたのだから。といっても彼女が生きた時代はそれこそドラゴンと丸い物と貝しか存在しなかったのだから彼女からしてみれば人間の方が余程不思議だろう。

「どれ。絶対魔法防御とは如何様なものか見てやろう。ゼットン！……あれ？」

両手を前に突き出し唱えるは最強の火炎呪文。しかしながら何も起こらない様子である。どうしてじゃどうしてじゃと慌てふためくククル。残念ながら、ククルのレベルは長い年月を経て、L V 1 * になつてしまつていたのであつた。ついでに完全に継承されてしまったために魔王の力すらなかつた。今の彼女は肉体的に只の丸い物である。その間にもはにはにとハニー達はどんどんと集まつてくる。

※ この世界にはレベルという概念が存在する

勝てない。知識の中では雑魚モンスターである筈のハニーに追い込まれている事実。ククルは大層傷ついたようであつた。

「う……お……。覚えとれー！」

捨て台詞と共に走り去る赤面した少女ククルはハニー達からしても、とても初代最強の魔王には見えなかったそうなの。

第二話

なんかしらんけど、わし大変

ここは自由都市群*の一つ、独立国家カスタムの街。この大陸においても比較的治安の良い場所である。町の人は各々の生活に幸福を感じ、充実した日々を送っている。が、なんとこの街現在進行形で地下にあつたりする。特異な文化かと思いかもしれないが、これはとある魔女達が最近起こした所業であつた。

※ 大小様々な独立した街からなる国家 商業が盛ん

「ちやららく♪ちやちやちやくん♪だらだらだららく♪」

どこからか不可思議な鼻声が聞こえてくる。その鼻声の正体はうら若きアイテム屋店主、トマト・ピューレ。宝箱に好かれる不思議属性を持つ少々電波な彼女は今日も楽しく掃除を行っていた。地下は湿度も高く、革などの素材を使った武器が段々と悪くなってしまう。アイテム屋店主としてこれはいただけない。取り敢えず中よりも外に陳列させればまだましかなと考えていた彼女に、思いもよらない出会いが待っていた。よいしよよいしよと盾を運んでみれば、なんとそこには全裸の女の子が倒れていたのがある。

「ひつ、死体いいいいいい。」

「まだ死んどらんわっ!! うっ、腹が…。バタン。」

「きやああああ死んだああああああああ!」

かくしてククルは人間との初めての出会いを果たした。残念ながら第一印象は余りよろしくなかったようだ。

「うん? ーこは…。どうやら助けられてしまったようじやの。つてな…!」

ククルが目を覚ますとそこは見慣れない部屋であった。どうやらわざわざベッドを貸してくれたらしい。得体のしれない少女を泊めてくれるとはなんとも人の良い…。

ふと体に違和感を感じて視線を横にすれば、なんと同じベットに先ほどの少女トマトが添い寝をしているではないか。これにはククルの目も点になった。ククルにとつて幸いなことに、トマトの寝間着はビキニアーマーのような刺激的なものではなく、普通のゆつたりとした服だった。

「落ち着くのじゃ…。くっ、なんとハレンチな…。」

トマトを起こさせないようにソロリソロリと毛布から逃げ出すククル。どうにも元魔王らしくない。

「それにしても、腹が減って気絶するとは。む、うまいうまい。」

ご丁寧にすぐ側の机には切ったりリンゴが丁寧に皿に盛られていた。意外にも気配りの出来る女だなとククルは関心してしまった。こういう女はいいものである。丸い物の王であった頃はどれだけこのような身辺管理者が必要であったことか。わしは絶対出来ないけど。一介の人間でこれならぜひ知識にあるメイドとやらに会ってみたいものだ。ククルは思った。特に至高のメイド隊を持つという魔人*ケツセルリンクには是非会ってみたい。元魔王特権で1人くれんじやろうか。魔人の使徒の中には執事Lv3もいるとかなんとか。

※ 魔王の眷属 よくある吸血鬼システムなどと同じようなもの

「いやしかしそんなことより…。まさかわしがLv1になってしまおうとは…。うぐぐこれでは只の丸い物じゃな…。」

ククルは考えた。取り敢えずこの目の前にいる少女は間違いなく知識にあるトマト・ピューレだろう。ここがカスタムの街であることは行き倒れる前に確認済みである。何せ洞窟の中だったのだ。洞窟の中のアイテム屋で髪が緑でビキニアーマー。まず間違いない。とすれば今はLP暦*の何年かあたり、やはりこの知識は現代ものであるようだ。つまり現魔王はアホな小娘。現魔王を殺して魔王の力を奪うこともできるが、魔王になればまた破壊衝動に悩まされ、丸い物復興どころではない。ククルさんはそこまです愚かではないのだ。

※ ルドラサウム大陸での暦は在任する魔王名で呼称される 現在の魔王はリトルプリンセス

「うむうむ。」

ククルは迷った。何をすべきか。ククルは三超神の1人プランナーに魔王となることを義務付けられた存在であった。魔王になる前は4000年程もの間自由に仲間と暮らしていたのだが、2000年以上も魔王としてドラゴンと戦うことを余儀なくされたククルにとって、今回獲得した自由はあまりにも想定外過ぎたために手にあまるものであった。今しがた丸い物復興を目指そうとしたが、丸い物は別に虐げられているわけでもなく、この世界の創造者ルドラサウムに飽きられただけである。飽きられてしまったために衰退したのだ。うむむ。段々と神々にイライラとしてきたが、とてもじゃないが今のククルにどうこう出来る相手ではない。しかし丸い物を復興するには無視できない存在であることは確かである。

「むぎむぎ。」

ククルは悩んだ。知識によるとルドラサウムを倒すのはどうやら殆ど不可能に近いとのことである。頭ではわかっていたが、実際に倒せないのと倒せないだろうという推測では天地も差があった。が、例外は常に存在するものである。ランス。どうやらその男が最終的にルドラサウムを倒すことが出来そうである。ならば今自分がすべきこと

はランスを支援することだろうか。

「いやんいやん。」

ククルは悶えた。驚くべきことであつたが、ククルには性知識が無かつた。絶対王政の丸い物社会で王であり丸い物最強の力を持った彼女に求愛するものがいなくなつたという不幸がもたらした結果であつた。正しく色狂いであるランスは、ククルにとつて余りにも刺激的すぎる存在である。ついでに彼女はランスの性格そのものが好きになれなかつた。いくら神を倒すためとはいえランスと行動を共にすることは不可能だろうし、絶対嫌である。クルツク・モフスが持つという男避けの指輪が手に入るまではなんとしても避けたいところである。

「結果、取り敢えずククルは自分のやりたいことをして楽しく自由に過ごし、妥当ルドラサウムはランスに任せることにしたのであつたのじゃ。ま、ピンチの時くらいは助けてやるとしようかの。」

とのことである。アホの子ククルさんに予定は立てられない。ちよつとだけ、ランスが負けそうになつた時に颯爽と登場し助けてあげること、人間の王ランスをひれ伏かせてみたいなんて考えているククルさんであつた。しかしそれを実行しようとすれば、間違ひなくランスの毒牙にかかるであろう。心配である。

第三話

なんかしらんけど、わし不運

自由に生きると決めたククルだが、生きるには何か目標が必要なものだ。取り敢えずククルは一つ決心する。

「リスに会いに行くのじゃ。」

ククルの言うリスとは魔人ケイブリスのことである。ククルが魔王であった時にその眷属として魔人化させた数少ない存在であり、驚くべきことに4000年以上たった今も存命。ククルにとってはLP暦現在、数少ない知り合いであり愛すべき馬鹿息子である。知人といえ、彼女と2000年近く戦い合ったドラゴンの王マギーホアとドラゴン唯一の雌個体カミーラも存命だが、流石に彼らと会うのはLv1のククルには色々酷だろう。そう、ククルはLv1。ケイブリスに会うにしても何をするにしてもレベルアップは急務である。魔人領を安全に渡るためにも最低でもLv50強は欲しいところだ。

「そうと決まれば早速レベル上げじゃ。こやつに恩も返さねばならんしおう。」
ぴよんと腰掛けていたベットから跳ね起き、柔軟体操。丁度都合よく机にあった羽ペ

ンで、トマト宛にダンジョンで宝探し兼レベルアップをしてくる旨を伝える文を書いておくのも忘れない。因みにインクはイカマンの墨である。

「ふっ。このわしの実力を現代の腑抜けどもの見せ付けてくれようではないか。」

戸に手を当て決め台詞も忘れない。ククルはハニー達との初試合の方はどうやら忘れてしまったようだった。丸い物らしく、知能は少々残念と言わざるをえないかもしれない。

「きやああトマトちゃんの家から全裸の女の子が！」

「な、なんなのじゃ!？」

ククル は トマト の 隣家 の おばあちゃん に ロープ を もらった

!

「ほれほれほれほれ。」

「いやっ、やめっ、ひいいひっひっひひひいいいい。」

女の悲痛な笑い声がダンジョンに何度も響きわたっていた。ククルのものではない。ククルはカスタムの街から離れ、近くの適当なダンジョンに入るとひたすら女の子モンスターきやんきやんを虐めたのだ。それはもう悪質な虐めだった。ダンジョンのあちらこちらには笑いすぎて横隔膜が痙攣して動けなくなったり、顎が外れて気絶したきや

んきやんが所狭しと倒れていた。ピラミッドのように積もれたきやんきやんマウンテンに、最弱モンスターであるきやんきやんだけを狙う狡い元魔王が鎮座していた。

「よしよし。これでLv10くらいじゃな。この体にも幾分慣れたしそろそろ適当に宝でも探すとするかの。」

因みにメインプレイヤーがレベルアップをするためにはレベル神かそれに準じる者の力が必要だったりするが、現大陸のメインプレイヤー扱いではない丸い物にレベル神は必要ではない。

「うわっ、なにこれどうなってるの。」

と、どうやら他の冒険者がやってきたようだ。その女は非常に既視感漂わせるビキニアーマーであった。なんじゃ最近の流行りはこいつなのかの。わしも着てみたいのう。残念なことに、起伏に乏しい彼女の体ではビキニアーマーはあまり似合わないかもしれない。本人の前では決して言えないが。

「ふふふ。こやつらはな、わしを直視しただけだ。あまりにも我が力が凄まじい為に意識を保つてられなかったのだらうな。ふ、ふふ。」

「いやそれは流石に無いと思うけど…。」

ああ、何この子どうしようかしらとビキニアーマーの女はけつたいなククルの姿に戸惑いを禁じ得ない。しかしこの女、ユラン・ミラージュが強い（強そうな）相手と出会っ

たらずは勝負。話はそれからである。

ユランは大国リーザス*に置いて、闘技場チャンピオンであり最強の剣士と呼ばれるほどの腕前だった。しかしながら半年ほど前にランスによって敗退、ランスに初めてを奪われるのもその後女としても興味を失われ長い間不貞腐っていたが、現在傷心兼修行の旅の途中である。又、闘技場では剣戦闘Lv2の彼女だからこそ使える必殺技「幻夢剣」に頼りきりであったため、封印中だそうだ。因みに、技能とは人間が持つ才能を数値化したようなものであり、どの技能も最大はLv3である。

※ 三大国の一つ 詳細は後述する

背中の大剣をぬらりと片手で構え、ククルに刃を向けるとこれ見よがしに剣先を揺らし威圧する。薄暗いダンジョンの中で動きとともにギラギラと光る大剣は明らかな挑発の体をククルに見せていた。

「取り敢えずあんた、強いのかい?」

「ふふ、ふむ? なんじや喧嘩でもふつかけている気なのかの? 遊技場でぬくぬくと育った腑抜けに負けるわしじゃないわい。それにわしは今忙しいのじゃ。しっし。」

挑発には挑発。ククルは女がユランであることをその見た目と言動で見抜き、彼女が気に障るであろう言葉を敢えて選んだ。なにより、彼女はこの時代の人間の力量を知識ではなく、実際に見てみたかったのだ。ユラン・ミラーシユは大国リーザスNo.1戦

士と賞賛される存在。正しく適役であろう。多分。

「へえ、私を誰か知っていてるみたいね……。確かに私はもうチャンピオンじゃないけど。だからといってあんたみたいな小娘に舐められるとは思ってなかったわ。後悔なさい。」

「ほつ、ではその小娘が直々に世界の広さを教えてあげようぞ。」

ユランは両手でしっかりと剣を構えると、ジリジリと距離を詰める。対人戦に優れた彼女は定石通り、相手の出方をゆつくり見つつ間合いを見極めんとする。対するククルは上半身をゆらゆら揺らしながらユランの重心を揺さぶり隙を見つけようとする。先に動いたのはククル。低レベルのククルにとつて長期戦は愚の骨頂である。

「炎の矢！」

予想外の魔法発動に一瞬隙を見せるユラン。ククルによって倒されたきやんきやん達に火傷や魔法痕はなかったために予想外の初手であった。炎の矢はユランの半歩前で爆発すると、ククルはその炎と粉塵に身を隠しつつ、一気に間合いを詰める。素手による格闘技と大剣による攻撃では、速度という点において圧倒的に格闘に分がある。瞬時に懐に入り込み、右手でアッパーをかける。とてもLv10とは思えない戦闘力を発揮するククル。が、レベル以上のものを持っているのはユランも同じである。大剣に力を掛け押し、瞬時に重心を移動させ、上半身を右に逸らすことでアッパーを避ける。更

に、同時にそのまま大剣を横一線。ククルに振り抜ける。剣戦闘Lv2のユランだからこそ出来る達人的技能である。だが対するククルはアツパーの勢いそのままに下半身を捻り上げる。剣を振りぬけようとするユランの腕を、右足で蹴ることによって、軌道をずらし難く避けた。手痛い反撃にユランは再び間合いを遠ざける。

「いやはやなんとも面白い動きをするもんじゃ。成る程人間は四肢と武器とを合わせることでもそんなことも出来るのじゃな。」

ククルはユランが見せた動きに対して、驚くこともなくただ単純に感心しているようであった。ユランは体勢を正しつつ、軽く右腕を擦る。骨は折れてはいないが、かなり重い蹴りだった。剣を落とすような不体裁は曝さなかつたものの、あの華奢な体からは少々想定外の一撃だ。純粋な決闘ならば、一本取られたというところか。

「あんた、なかなかやるね。どうにも人間じゃないかもしれないようだけど、口だけじゃない。賞賛に値するよ。人間だろうが女の子モンスターだろうが関係なくね。」

「ふん。褒めるでない照れるわい。さてさて少しは世界の広さを伝えることが出来たかの？」

「取り敢えず、私の世界は狭かつたつてのはね…。」

油断なくしていたつもりだったが、どうやら見くびっていたようだ。本気でこの女に勝つには必殺技幻夢剣が必要かもしれない…。とはいえ、あの技に頼ることは…。

「まあ別段闘技場だけが生きる道ではないわ。望みある時期にわしに会えたのは幸運じゃったな。」

ククルは息も乱れず、自然体のままだ。なんだかどうにもこの女には色々勝てそうにないな、とユランは感じ取ってしまった。

「ああ、ほんと。世の中わかんないものね。まさかこうも旅に出てすぐに自分以上の実力者と会うなんて思ってたわ。」

剣を下ろした彼女の表情はどちらかと言えば晴れやかであった。闘技場という環境が彼女を意固地にさせていたのかもしれない。

「かつ、必殺技*も使っていないくせによう言うわい。選別じゃ、ちよつとしたサービスをくれてやろう。わしとしてもこの戦いには価値があった。遠慮せず受け取るわい。」

※ 一定の技能以上が持つことの出来る技

軽く自身の髪を手ですくと、両手をパンと合わせる。すると握られた手の中から光が漏れだし、煙のようにふわりふわりとユランに纏わりついた。

「何、怪しいもんじゃないわい。わしの力を少ーしばかし分けてやっただけじゃ。」

ものの数秒で光が消え、不審がるユランに一言加える。ククルとしては最上級のプレゼントであった。

「別に強くなった気はしないけど、ね。何にしてもあんたのお陰でふつきれたわ。」
ふうと息を漏らし、ユランは自身の体を軽く見回した後、少々ドギマギとした様子を見せる。

「ねえ、もし良かったら…。私と一緒に冒険してみない？ あなたといると退屈しなさそうだし。」

これにはククルもきよとんとした後、心底可笑しそうに笑った。なんとも言えない初々しさが擦った。恐らくユラン自身からこのような話を持ちかけるのは今回が初めてなのではないだろうか。

「面白いのお人間。だがお前はわしにはついてこれん。それにお前が目指すものは単なる強さだけではない筈じゃ。しっかりと己で考えねばな。」

言葉の途中でぐるりと背中を向け、ククルはダンジョンの奥地へ歩き出す。人間体型になってみたかったことその一「背中で語る」である。そして台詞もかなり、くさい。酔ってらっしゃる。目を細くしユランには見せていないが得意げな顔だ。しかしここはダンジョンである。

薄暗い危険地帯では足元注意。

「いつかまた出会うこともあるじやろう。その時を楽しみにいのぎやあああああああああああああ……。」

かくして元魔王ククルはダンジョン奥底へと落ちた。

第四話

なんかしらんけど、わし幸運

「…………… ああああああああああギャブっ!!」

どれほどの高さから落ちたのだろう。突然の落下にパニックになったククルにどうこう出来る筈ものなく、ドギヤンと凄まじい音を立ててククルは頭から落下した。

「フゴッ!? ふぐあっ! ツ……………えう……………う!!」

常人なら確実に死を迎えているであろう衝撃だが、なんとか一命を取り留めたようだ。只では済まなかったのは彼女の様子を見れば一目瞭然である。明らかに顔が一部平らになってしまっている。しかしどうにも、ククルには骨がないようである。流石元全長4.7 kmの軟体生物である。

「く、もう嫌じゃ……………人間の体なんて……………穴に落ちるなんて初めてじゃ……………ヒグ。」

何度も言うが元の体長が4.7 kmなのだ。落ちる穴なんてそりやないだろう。

「あいやー。お客さん、どいてくれませんかねー。」

ハツとして顔を上げれば、そこには何かしらの作業服を着込んだハニーが、これでもかと荷物の積まれた荷馬車を引いていた。ハニーである。彼女のトラウマとして既に

認定された超土偶ハニー。忘れてなかったぞハニー。その窪んだ光の無い目は生命を感じさせず、ククルにとつて恐怖意外の何者でもなかった。

「だがっ！だがっ！！いつまでも女々しいと思わないことじゃ！！打撃に弱いのは知ってる。殴ればいいんじゃないやああ！！」

容赦なく殴りにかかるククル。彼女からしてみれば弱み目に祟り目。少々ヒステリックである。

「ちよつとお客さんやめてくださいよー。仕事なんですよ。」

「なんじゃと？仕事？ハニーが??」

大変失礼な発言である。実はこの大陸の共通通貨を発行しているのはハニー達が務めるハニー造幣局だったりする程、ハニー達は一部を除いてしっかりと社会生活を送っているのである。彼女は一応知っている筈なのだが。

「このダンジョンには少し前からお得意様が住んで居らして、そこへ荷物を届けてる途中なんです。」

「ほう…：ダンジョン…：お得意様…：か。」

「それじゃ私はこれで。お気をつけてー。」

ククルはふむふむと独りでに相槌を打ち、一つ一つの情報を照らし合わせ確証を得ると、ニンマリと笑みを浮かべた。因みに彼女は原作キャラに会えることに喜び笑ってい

るのではない。自分の推察力に得意げになっただけなのだ。

ククルは考えた。これはアテン・ヌーの配達物に違いない。ゼス出身の超引きこもり天才オタク魔法少女アテン・ヌー。時期的にも彼女が引きこもり始めたものと一致する。取り敢えず会ってみよう。剣士の次は魔法使いである。それに彼女はゼス出身の魔法使い。詰まる所金持ちである。今回の目的の一つである金銭を得る機会かもしれない。魔法関係の杖程度は最低でも持つていよう。

「待て。ならばそこなハニーよ。わしをそのお得意様とやらのとこまで案内せい。」

「えー。そういうのは個人情報にいやいや殴らないでください暴力はダメですよわかりました教えます。」

この元魔王。意外とランスに似ているかもしれない。

ピンポーン

「はいはい…。」

声を上げたのは手入れの入ってないぼさぼさな黒髪ロングヘアの少女。ついでにジト目属性付きである。

文明を感じさせることのないダンジョンの中に、電気ガス水道のライフラインが何故かきちんと揃った場所があった。それがアテン・ヌーの新居である。元々は優秀な魔法

使いであった彼女は、このまま周囲に流されてゼス高官になることへの意義を見出せず、ついでに人生の意味を見失ってしまった残念な子だった。更にひきこもりLv1という特殊技能を才能として有していたために、あれよあれよと引きこもり計画が加速。ついにはダンジョン奥地に住居を拵えてしまったのである。

そんな彼女の楽しみは今しがたドアベルを鳴らしたもの。ネット販売がもたらす宝の山。そう、オタク趣味である。彼女は現実から逃避したいという欲求を創作物で解消しているのだ。ひきこもりLv1の名に恥じない清々しいほどのヒツキーである。

「……………何方様?」

どういうことだろうか。何故かそこにはいつもの宅配ハニーではなく、万年の笑みを浮かべて腰に両手を当てふんぞり返る少女がいた。

ここにアテン・ヌーの人生を曲げに折り曲げかき回す、彼女にとって正しく魔王たる存在、ククルククル現る。

第五話

なんかしらんけど、わし失敗

ゼスの天才魔法少女アテン・ヌーは、下着にパーカーだけを羽織り、自堕落な、それでいて充実した引きこもりライフを自らが制作したダンジョン内で楽しみ始めていた。今日は大量の通販購入物が届く日であり、彼女が毎月最も楽しみにしている大切な日である。しかしこのそんな楽しい嬉しい記念日とは一味も二味も違った。

「ほー。立派なもんじゃなあ。わしでもこんな豪勢な居を構えたのは王になってからであつたのじゃがなあ。」

いきなり、わし元魔王という謎の自己紹介と共に訪れたローブの少女は、アテン・ヌーの了承無しに家へずかずかと入り込むと、徐ろにゼス製魔力冷蔵庫を開け始めたのだ。

「なんじゃこれ…。空っぽじゃないか。つまらん。」

引きこもり少女の基本的な食事は菓子類とインスタントであるからして。

「……………あの。」

ククルの旺盛な好奇心の次なる標的はダンス。そこにはびっしりと同じパーカーがかけられていた。様式美である。決して、決してファッションというものが理解出来

ず、どうでもいいと考えていたのではない。

「あー。ほんと残念な奴じゃのー。」

な、ななななな。なんて失礼な女：ビチクソが……。小汚いローブ姿の小娘に言われたくないわ。そう思わずにはいられないアテン・ヌー。突然部屋に押し入りプライベートルを漁りだすなんて何に対してもやる気を出せない彼女でもピクピクものである。

しかし元魔王の進軍は止まらなかつた。今度はベッドに積まれた漫画や小説、雑誌を手当たり次第に漁っていく。しかも、これでもないこれでもないと言いながらポイポイ投げているではないか。

「元ゼスの天才少女だとか何とか言っても所詮は小娘……。か。どれもともに換金出来そうもないわい。部屋だけ立派じゃどうしようもないわ。なんぞ貴金属とかないんかの。」

「……………アッコク。」

流石の無気力少女ヌーもここまでされて黙っているわけにはいかない。得意の黒魔法アッコクをククルに発動しようとする。が、それを察したククルは近くの漫画を手に取り盾のようにヌーに向けた。

「何すんじゃ。危ないじゃろ。お主の大切なものが消えてええのか？ ほれほれ。」

それはこの間買ったばかりの新刊。これではヌーは攻撃できない。最低でも後10

回は読み直したい。思わずうつと息を飲み、魔力を霧散させる。今まで賛辞如何程にもあれど、ここまでコケにされたことはなかった。あまりの悔しさにうつすらと目尻に涙が溜まり始めたが、ククルは全く気にした様子を見せず、漫画を片手にベツトから更なる獲物を探しに移動する。

「お？ なんじゃこれ。不思議な板じゃな。」

ククルが目にかけてしまったのはノートパソコンである。このルドラサウム大陸では非常に珍しい最新機器である。しかもノートパソコンはそれなりに重いが、ククルでも持ち運ぶ事ができる程度のもの。これは結構な金銭的な価値が見受けられるかもしれない。

「ほふん。悪くはないかもしれん。おーいヌーとやら。これくれんかの。」

ククルとしてはこれから長きに渡って引きこもるアテン・ヌーには金銭など必要としていないだろうという思い込みがあった。それに加えさっさと要件を済ませたいがために、こんな脈絡のない一連の行動を取ってしまったているのだが、ヌーからしてみればイカれたアバズレである。

「絶対につ！嫌っ!!」

と怒鳴ってしまったのも仕方ない。何よりひきこもりにとつてパソコンとは叡智の極み、人生の意味そのものである。渡せるわけがないし、渡すつもりもないのである。他

人が触るだけでも絶対に許せない。それなのに、ククルはあろうことかパソコンを持ち上げてしげしげと見ているではないか。魔法を打つわけにもいかず、ヌーは実に数年ぶりの全力疾走でククルの元へ、いやパソコンの元へと駆けた。

「返して!!返してよ!!!」

「おっ!?うお、やめんかこのっ!」

「あっ。」

一瞬の静寂の後、今日この日よりアテン・ヌーを夜な夜な苦しめる破壊音が響き渡った。飛び散った部品がカランカラン、と感情を奏でた。

ヌーは失った。それも色々失った。その場に膝をつき、ジャンクとなった己の分身を無心で見つめる。たくさんの思い出があった。そこには明るい(?) 未来が詰まっていたのだ。

「その…なんじゃ…。……………スマンカッタ。」

尋常ならざるその様子にククルもやり過ぎたかなと反省した。しかし彼女が反省しようがしまいが、壊れたものは戻らない。

「ねえ…。わたし、アテン・ヌーっていうの。」

言葉を発しながらも、彼女の視線は微動だにもせず、ただひたすら一点を見つめていた。

「は？ う、うむ。それは知つと「あなたの名前は？」」

「くつ、ククルククル……じゃ。」

なんじゃ……？ ククルは不思議な感覚に陥っていた。

「そう……。それじゃあ……。」

ゆらりとヌーは立ち上がる。はて目の錯覚か、彼女の周りには黒い瘴気のようなモヤがかかっているようにククルには見えた。

「……………殺す。殺す殺す殺すころすころすころすコロスコロスコロスコロスコロスコロス……！！！！」

「あつ。」

ククルは気づいた。ああそうじゃ、この感覚は……これはまるで超神プランナーと会った時のような……。

ここにククルの生涯の障害たる天敵、アテン・ヌーは誕生する。

第六話

なんかしらんけど、わし策士

「待てやこらああああああああ!!!」

「おっ、おっ、おっ、落ち着かんか！ あんなものまた買い直せばっうひゃい!?」

ダンジョン内をひたすら上へ上へと追いかけてこをする二人の少女がいた。しかし追いかけること悔る事なかれ、片や鬼は一般人が当たれば即死する恐ろしい練度の黒魔法を無尽蔵に打ちまくっているのだ。追いかける側の少女ククルは元魔王ではあるが、現在たったのLv10。確かにLv10もあれば幾つか技も習得出来るし、技量で高レベル相手を上回ることは不可能ではない。実際ユラン戦では相手がLv20に對して持ち前のスピードでうまく攪乱していた。しかしながら魔法国家ゼス有数の天才が満身込めて発動する黒魔法は流石にマズい。そのレベルなんと30超。一撃でも当たれば溶けてしまうかもしれない。近づいて物理で伸そうにも、ヌーは呼吸をしているのか危ぶまれるほど魔法を連発している。これでは近づけない。なんでこうなってしまったのじゃと自問自答する余裕すら無く、ククルは必死に逃げまわっていた。

「事故じゃ事故っ!! 悲しいすれ違いの結果じゃったんじゃあ!!!」

「事故で済むと思ってるのかこのスカタンがあああああああああ!!!」
奇声とともにダンジョンを埋め尽くさんとする広範囲魔法が放たれる。上級黒魔法のデビルビームだ。これまでの様に右に左に避けることは出来ない。つまり、ひたすら出口を目指して駆けるしかない。

「ふっ、元魔王を舐めるでないわい。でかい魔法打てばいいもんじゃないのじゃ!!」
ククルは逃げの一手から打って出る。くるりと振り返り、どどんと仁王立ち。唱えるは得意の火属性魔法。

「ファイアレーザーっ!!」

眩い程の火炎の束が、デビルビームを照らしだす。

「えっ…そんなっ!!? きゃあああああああああ………」

ファイアレーザーはデビルビームを霧散させると、そのままヌーまで巻き込み大爆発を巻き起こしたのだ。

「全く、一時の感情でわしに齒向かうからじゃ。やれやれ。」

すごいぞククル!強いぞククル!かっこいいぞククル!!!

パソコンが壊れたことか、それかプライドを傷つけられたことか、それとも初めて殺人を犯したとか、ヌーは何か堪え切れず高笑いを上げた。心中お察しする。

しかしながら、ククルは骨がない軟体生物であった。人間ではない。蛸のように筋肉で体を支えるやわらか筋肉ダルマである。魔法による激しいダメージは残っていたものの、まだ辛うじて動ける範疇であった。ヌーが目を離れた一瞬について、ガバっ起き上がった。

「隙ありじゃあああああ！」

えっ？ と疑問の表情を上げたのも束の間。今度はヌーが殴り飛ばされ、水平に吹っ飛んだ。背中から壁に激突し、もたれるように崩れる。

「し、死ぬかと思ったのじゃ！ わしが人間じゃったら確実に死んでたのじゃ！」

のじやのじや喚くククル。どうやら彼女としてもヌーの攻撃は危険を孕んでいたようだ。体力のない彼女には十分過ぎる攻撃だったか。なんで…とか細く漏らし、ヌーは意識を失った。一難去った。また一難は御免被りたい。

「ややつ？ これは…。」

先ほどの戦闘から息もつかぬ内に、ククルは戦闘の余波で崩れたダンジョンの岩肌か

ら、何か人工的な影が覗かせているのを見つけた。どっこいしよと幾つか岩を取り除いてみれば、そこには夢にまで見た宝箱があった。ヌーからは何も得るものが無かっただけに、期待に胸が膨らむ。脈絡のない話だがククルは貧乳ではない。宝箱には罠が仕掛けられているの可能性もあるのだが、ククルは躊躇なく開けた。

「私、起動します。」

7 回目の目覚め。

私、起こしたの、ダレ？」

「うお、なんかでたのじゃ。」

宝箱にはなんと頭にボンボンを二つ付けた奇抜な少女が入っていた。彼女はレア女の子モンスター復讐ちゃん。依頼を受けた対象を暗殺するまで追い続ける殺戮モンスターである。

「復讐したい人、いますか？」

「殺したい人、いますか？」

「憎い人、いますか？」

「消したい人、いますか？」

怒涛の質問ラッシュ。これには流石のククルも反応に困った。

「おつ、えつ、つと。ル…ドラサウム……かの。」

思わずルドラサウムの名前を出してしまった。事実ククルが殺したい相手ではあるから間違つてはいないのだが。

「顔写真（六ヶ月以内のもの）、又は所持品（匂いが付いているもの）、ありますか？」
「あー、そうじゃな。」

ククルは適当に落ちている岩を拾うと、描き描き描き描き。ダンジョンの壁面に巨大なクジラが描かれた。

「うむ。流石わしじゃ。完璧じゃな。瓜二つじゃわい。そんなもってこいつは全長2 kmくらいじゃ。」

「対象、ルドラサウム、認証しました。暗殺に移ります。」

復讐ちゃん的には絵でも良かったのだろうか。確かにこのような外観とサイズの存在はルドラサウムしかいないのだから、判断材料としては十分かもしれないが。

復讐ちゃんは暗殺対象を聞くと、少し満足したような表情を見せ、立ち去ろうとする。

「あ、おい待つのじゃ。宝箱に入ってたんじゃ。なんぞ金銭価値のありそうなもの持つとらんか。」

危ない危ない。本来の目的を忘れるところだであつた。

「そうですか……………はい。」

「ひよっ……………!？」

ぼんとククルの手のひらに置かれたのはぶちハニーの死骸。衝撃を加えれば爆発する天然ダイナマイトである。勿論爆薬としての金銭価値は高い。が、只でさえ扱いの難しい爆薬に加え、ハニーである。彼女の弱点ベスト大賞セイブツ部門ランキング堂々一位！であるハニーだ。

「つてか重つ……………」

ぶちハニーの大きさは30cmないくらいなのだが、重さはなんと150kgである。……………グニヤリ。

Out of the frying pan and into the fire. 元魔王受難の日々は続く。

第七話

なんかしらんけど、わし焼失

「ひ…、陽じゃ…。なんと眩しい…。なんと明るい…。なんと温かい。」

陽光降り注ぐ洞穴の入り口で、自身を抱きしめ膝を折る幸薄そうな少女がいた。全く似合っていないその台詞を唱えていたのは勿論元魔王ククルであった。口調で丸わかりである。はて、ヌーとの戦鬪を切り抜けた彼女が何故ここまで弱り切っているのだろうか。

時は災厄の魔女との戦鬪後に戻る。宝箱から出てきた少女、復讐ちゃんからもらったぷちハニー、それこそが今回の元凶であった。

取り敢えずククルはハニーに対する感情を押し殺し、なんとかぷちハニーを持ち帰ろうと試みた。しかし重さ150kgのぷちハニーを運ぶのは流石にしんどい。精魂すり減らして運ぼうにも、どうしても時間が異様に掛かってしまった。更に最悪だったことは、ゆつくりと移動しているためか、頻繁に魔物が襲いかかってきたことである。ただでさえハニー運びで疲れた体に、少しでも衝撃を加えたら爆発するぷちハニー。ぷちハニーを地面に降ろそうにも、魔物に蹴り飛ばされでもしたら大変なことになる。必然

的にククルはぶちハニーを抱きかかえるような体勢で、頭突きと蹴りで魔物を倒すしか無かった。少年漫画の地獄修行か何かだろうか。

兎に角、ククルはこの苦行を乗り越え、ついにダンジョンからの脱出を果たしたのであった。空のないダンジョン内にいたためにククルにはかなりの時間を費やしたとだけしかわからなかったが、その実なんと二週間もかかっていたのであった。まるで救出された悲劇のヒロインかのような乙女台詞も納得である。やはり、全く似合っていないが。

「もうダンジョンなんて懲り懲りじゃ…。」
残念ククル。まだ街までの道のりが残っているぞ。

「けひっ、はっ、干からびてしまうのじゃ…。」
やりきった、ククルはやりきった。見える。カスタムの街の入り口である洞窟が見える。もうすぐだ。ぶちハニーの呪縛から解き放たれるぞ…。

「ふーむ。おいシイルこつちにこい！」

「なんででしょう、ランス様。」

ククルが佳境に入る頃と同じくして、カスタムのアイテム屋には珍しく客が訪れてい

た。このアイテム屋を含む周辺の土地はククルが最初に訪れる少し前にある事件によつて沈下してしまつた。この事件を解決した英雄と彼の奴隷シルがその客であつた。彼らはこの街を出る前にアイテム屋で身支度を整えたく、トマトはアイテム屋引越しの手伝いをさせることを条件に彼らに装備を幾つか見繕うことを約束したのであつた。しかしランスという男は働かない。全て奴隷に仕事を押し付け、何か面白いものはないかと荷荒らしをするだけであつた。酷い。

「どうだ！ エロエロでいいだろ？」

「そ…そうです…。」

ランスが手に持っていたのは一見、JAPAN*の民族衣装に見えなくもない服だつた。しかしながら、正しく魔改造和服であつた。肝心の所が全く隠せていない。更には和服ということもあり、下着なしで着ることを考えると…。

※ 東の果ての島国

「何をばさつとしてる。早く着てみる。」

猿と、形容すべきか。むふふとイヤラシイ目つきで笑うその顔は、確実に英雄と呼称されるものがするような表情ではないと思うのだが。

「はい、ランス様。…えっ…これ…ですか？」

ほかり。げんこつである。何故かランスがシルを殴る時、ほかりと優しい擬音が流

れるが、確実に、痛い。ひんひん…。

アイテム屋の仕事もそっちのけでシイルはあんなことやこんなことに…。

「なんだか私、お邪魔ですかね。」

この場にはアイテム屋の店主たるトマトもいるのだが完全に蚊帳の外である。性的なものに興味関心も何もないが、少し寂しい。

「ん？　なんだ、トマトも仲間に入りたいのか？」

「やっぱり蚊帳の外にいさせてもらいますー。」

相手が街を救った英雄とはいえ、性行為となるとあまりいい感情が思い浮かばないトマトである。仕方ない、シイルちゃんの為にも、ここでトマトは身を引きます、おおよよよ。

「コヒュー…フヒュー…。着いた…かの…。」

ククルは朦朧としていた。骨がないために、力の抜けたその体は少しずつ人間の形を失っていた。あまりの異様さに、隣のおばあちゃんも言葉を失う。ガチャリ。

「わっ、びつくりしました。お客さんですかね？」

戸口を開けると都合よくトマトが目の前にいた。

「と…トマト…。わしじゃ…帰ってきたのじゃ……。ほれ…宝も……。」

報われた。ククルは約束を違えなかった。己の誇りと丸い物の全てを背負い、決して約束は裏切らなかつた。

「えーと、どちらさんです？」

彼女はその瞬間、雪原の銀世界のように、静かに息を引き取つた。悲しいかな、世界は彼女を裏切つた。

つていかんいかん。トマトに会つたのは幾分前の事だし、言葉も殆ど交わしていない。一方的に恩を感じているだけだ。彼女が忘れてしまつているのも無理はない。

「…………ツツハーツ…、ハツ…ハツ…ワ、忘れてしまうのも…仕方ないことじゃ…………。」
ククルは首の皮一枚、いや、頭に生えたアホ毛っぽい白ヒジキでなんとかルドラサウムに帰ろうとする魂を掴んでいた。

「むっ。なんだか俺様の知らん子がいるぞ。カスタムの女の子は全員知つたつもりだつたんだがどこに隠れてたんだ。」

半ば無意識に声をする方へと顔を向けてみると、ハイパー兵器丸出しの性魔人がいた

のであった。

しおしおとヒジキが萎れていく音がする。能面のような不可思議な笑顔を貼り付けたまま、ククルはルドラサウムの元へ、旅だった。

その腕から一生懸命抱えてきた宝物が、

ぼろり

ごとり

びかり

第八話

リーザス奪還編 幕開

ルドラサウム大陸には三大国と呼ばれる3つの国が存在する。魔法大国ゼス・豊潤大国リーザス・工業大国ヘルマンがそれに当たる。

ゼスは魔法を第一とする差別的な国家であるが、純粋な魔力運用に関しては他の追隨を許さ無いほどの力を持つている正しく魔法大国。

リーザスは温かい気候と肥えた土地による豊かな国である。治安も非常に良く、交流・商業の中心とされる。

ヘルマンは工業発展に富んだ共和国である。が、実のところ寒冷な土地柄故に作物の収穫があまり見込めず、更には政権の腐敗も進み、国力は低い。肉体的に優れた軍人を輩出することで知られ、軍事力は高水準とされる。

三国はお互いに同盟や交渉を繰り返し、小競り合いは多々あるもの、お互いの領分を変えること無く長きに渡って維持し続けてきた。しかし、この歴史にある一石が投げられる。

男の名はパットン・ミスナルジ。ヘルマン皇帝第一王子にしてヘルマンの世継ぎであ

る。パットンが次期皇帝ではあつたが、妾の子であつた。それ故に政略絶えないヘルマンでは疎まれ、次期皇帝をシーラ姫の婿と執り成すことで傀儡を企むもの達によつてその皇帝としての立場を危ぶまれていた。このままではまずい。しかしパットンは政治に疎い。彼の思考のそれはむしろ軍人に近いものがある。次第に国の中で孤立していく様子にパットンは焦りを覚えていった。この焦燥に駆られた、名声軍事共にある程度は持つパットンを利用しようとするものが現れるのは至極当然だつた。

魔人。それは魔王によつて選ばれた魔王の側近。魔人になるには様々な要因があるが、等しく言えることは非常に強く、攻撃が効かない、更に寿命がないことである。パットンに目をつけたのはその魔人であつた。名はノス。先々代魔王ジルによつて魔人となつた地竜である。

ノスには不満があつた。今、魔人達は二つの派閥に分断している。簡単にいえば、現在未覚醒であり魔王になることを拒んでゐる現魔王を支持するものとしめないもの。支持しないものは最も永らえた魔人ケイブリスこそが魔王に相応しいとしている。だがノスにはどちらも魅力的なものに見えなかつた。現魔王はただの小娘にしか思はず、ケイブリスのような大馬鹿者の支配に敷かれるなどプライドが許さない。やはり魔王に相応しい人物は先々代魔王ジルを置いて他にはいない。それ故にノスは動いた。同じ

志を持つ魔人サテラと同じくアイゼル、そしてノスの野望知らぬ愚かなヘルマン第一王子パットン・ミスナルジと共に、リーザス城下で封印されているジルを復活させるために…。

もぐもぐもぐもぐ…

ここはリーザス城下町。日が沈み始めたにも関わらず、整った町並みには人々の陽気な声や商人の呼び込みなどが響き、どれだけリーザスが豊かな国であるかを象徴していた。通りに面する店々はどこも人でごった返している。

もぐもぐもぐもぐ…

「もうちよつと落ち着いて食え。な？」

「うるさい。わしは今猛烈に食いたい気分なのじゃ。」

困った嬢ちゃんだ。面倒だがフルルもああいうしなあと頭を掻くはリーザス青の軍将軍コルドバ・バーン。身長206cm体重188kgの巨体を持つ剛の者。通称「リーザスの青い壁」とも呼ばれ、リーザス軍の守りの要としてその名を馳せるほどの男であった。しかし、先日彼の鉄壁の守りが遂に破られてしまった。

青壁を崩したのは彼の横に座る少女、リーザス中の露天販売食品をひたすら買い回

り、現在進行形で酒場のメニューを食い続けている元魔王ククルククルであった。暴食である。

「そろそろ思い出したか？　なんか見覚えある場所くらいあったろ。」

「全然じゃ。ゼーンぜん。」

「はあ…。先が思いやられるぜ…。なんで記憶喪失だなんて面倒臭い事になっちゃまったんだ。」

もぐもぐもぐもぐ…

コルドバとククルの出会いには唐突だった。その日もゴルドバは非番にも関わらず見回りを続けていた。ああ、ちよつと酒場にも寄りてえなあと気を逸らしたその時、空から砲撃が街道ど真ん中に落ちてきたのだ。まさかヘルマンの新兵器か、取り敢えず待ち行く人々に避難指示をして着弾点を調べようと歩み寄る。おかしい。着弾の仕方から見てもヘルマンとは逆方向から来たようにしか見えねえ。まさか自由都市が攻撃してくると思えない。なんにせよ砲弾を見ればわかる。ヘルマンの砲弾は重い。鉄の含有量が多いからだ。

着弾点に辿り着いたコルドバがぐつと身を乗り出しクレーターを神妙に覗き見ると、なんとそこには意識を失った全裸の少女がいたのであった。

その後紆余曲折あり、妻フルルの意見もあつてはククルを預かることになってしまっ

たのだった。お陰で幼妻とのイチャラブ生活の鉄壁が破綻してしまったとはコルドバ談。因みに記憶喪失というのはククルのでっち上げである。都合良く、名前だけは覚えていた設定だったりする。気を取り戻してからというもののククルは食欲をひたすら満たし、ついこの間の精神的ショックを紛らわす日々であった。

しかし、今日は違った。ククルはいつもの半分程、5人前ほどしか食べていなかった。いや、なにかおかしい気もするが。

「……………来おった。」

「あ？ お前戻すならトイレ行ってこいよ？」

「違うわい……。コルドバ、今夜は常に戦支度を整え気を張るのじゃ。さすればお主なら最悪の結果にはならんじやろうて。」

「……………記憶が戻ったのか？」

そういえばそういう設定じゃったな、とほくそ笑む。視界には心配そうな顔で覗き込むコルドバがいる。又随分と人間の世話になってしまったものじゃ。本来であれば人間など、どうでもいい存在である筈なのじゃが。まあどちらにせよジルに魔王として復活されるのは困る。そのついでに、ほんとについでに、何人がぐらいは救ってやるもの一興かもしれないな。

「記憶なんてな、あんまりいいもんじやないわい。忘れたいと思うことのほうがよっ

ほど多いからの。」

「辛いことがあんなら遠慮無く俺たちに言ってくれ。もう他人なんかじゃあないだろ？」

二つと笑い、俠気を見せるコルドバ。全くもっていけ好かない。そういうのはフルルにだけ見せんかこの馬鹿。わしはこんだけ迷惑掛けとるというに甘すぎるのじゃ。

「何、所詮過去の話。歴史を紡ぐのは今この瞬間なのじゃ。コルドバよ。今ある大切なもの、必ず守り切るのじゃな。」

「はっ、何説教垂れてんのかと思つたらそんなことか？ ククル、俺を誰だと思つてんだ！ リーザスの青い壁、コルドバ・バーンだぜ!？」

コルドバが椅子から立ち上がり、ジョッキ片手に両手を広げてポーズをとる。やんや やんやとそれを見た酒場の連中が囁し立て、又一つ酒場の雰囲気盛り上がった。ククルは、楽しそうに飲み燥ぐ彼らを、少し遠い目で見ていた。

そしてこの夜、大国リーザスは陥落する。

第九話

リーザス奪還編 第一幕

「リア様……。マリスさん……。必ず、必ず助け出します……。……。」

喧騒渦巻くリーザス城から闇夜に紛れ、1人の少女が闇夜に紛れ逃げ出した。彼女の服装は大陸では珍しいJAPANのものであった。リーザス王女リア直属のくノ一、見当かなみである。

ヘルマン軍は突如としてリーザス城地下に現れた。一体どのような方法を使ったのか、国を守護するリーザス軍には一切気付かれずにリーザス城へと流れでたヘルマン軍は、安々とリーザス城もとい大国リーザスを占領することに成功したのだ。リーザス王女リア・パラ・パラ・リーザスはかなみからの情報により、既に事態が看破できないほどまで進んでしまったことに気付き、最後の望みをかなみに託した。

かなみに託されたもの、聖盾。それをカスタム救出の英雄であり、リーザスと特異な

関係性を持つ男、ランスの元へと届けること……。かなみとしてはあんな男に頼ることそれ自体が許せないことであつたが、彼以外にいないのも事実。逆に言えば、ランスは国一つ救つてみせてくれるという希望が持てる程の男だつた。

「どこだ!? 確かに王室から逃げ出した奴がいたぞ!」

「街に逃げた! 必ずひっ捕らえろ!!」

市街の中を松明を片手にヘルマン兵達がかなみを逃すまいと追い立てる。何を隠そうかなみが背負つたその聖盾こそが彼らヘルマン軍、いや、その背後にいる魔人ノスが欲しているものだつた。魔人ノスの悲願、魔王ジル復活のキーの一つである。

「夜遅くにガチャガチャガチャガチャうるさい連中じやのー!」

と、そんなヘルマン兵の目の前に路地からすつと気だるそうな顔をした和服の少女が現れた。筋骨隆々な兵士相手に啖呵を切るとはなかなか豪胆である。

「おい邪魔だガキ!」

兵士達にとつては一先ず逃げ出した忍が問題である。戦鬪を走る血気盛んな新兵に

とつては子供なんぞ炉端に転がる石と同じ。邪魔なものが前に現れたら、力で退かす。「ふん。いきなり殴るとはあんまりじゃな。して、お主らがヘルマン軍で相違ないな？」

しかしながら力で退かせない障害も存在する。己よりも巨大な力を持った者だった時だ。掴まれた右腕がギリギリと悲鳴を上げる。苦悶する兵士の様子に周りも只のガキではないと、少女を再認識し警戒する。

「逃げた女も大陸の服じゃあ無かった…。てめえもリーザス軍のもんだな？ ガキだろうが構うこたねえ！ やっちまえ！」

ヘルマン兵は総勢10人、新兵も混じっているが、今回の進軍において先方を務めた若きエリート達だ。

「ガキガキやまかしいわ。年の功つてのを見せてやるかいの。」

対するは元魔王ククルククル。カスタムでのぶちハニー修行を終え、気力漲る丸い物。

「貴様ら全員まとめて伸してくれるわ。ファイアレーザー!!」

時を同じくしてリーザス城高欄、そこには闇に溶けるように巨体を黒色のローブに包んだ男と黒鎧を着込んだ美青年がいた。

「アイゼル……。お前の部下の洗脳に掛からなかったものが幾人かおるぞ。」

「……あの洗脳が効かないとなると……。……耐性を持つほどの高レベルのものか、それとも誰かによつて高位の洗脳を既に受けているもの……。でしような。」

この二人こそが人間では傷ひとつけることすら出来ないと言われる魔人ノスとアイゼルである。

「前者だとすればリーザス軍には思わぬ懐刀がいたということか。しかし後者ならば……。何者か我らの戦に乗じるつもりらしい。どちらにせよ、お前の小道具ではどうにも出来ない使い手がいるのは間違いない。」

「とはいえこちらにはサテラ含めて魔人が3人。そう訝することもないでしょう。」

シワを寄せるノスに対し、アイゼルは自らの勝利が揺らぐことはないとうつつを抜かしていた。

「甘いな。いずれその思考はお前を殺すぞ。」

これだから堅物は困る。もう少し美しく生きることと務めた方がいいとホーネット様に口添えしたほうがいいかしれないな。とノスにあまりいい感情を浮かべられないアイゼル。

「我らは魔人ですぞ? ご冗談を。」

これだから若造は。復活の暁にはジル様に魔血魂を回収するよう進言したほうが良いかもしれんな。こちらもアイゼルには仲間という意識すら無かったノスであつた。そもそも、魔王がいない環境で魔人が共闘すること事態が珍しいくらいなのだ。

「そんな怖い顔しないで下され。では分かりました、私とサテラで様子を調べて参ります。」

リーザスを無事陥落させたとはいえ、今ここで仲違いをするのはまずい。ここは素直に従つておこうと考えるアイゼルは、元人間の魔人だけあつて多少妥協出来る性格であつた。軽く礼をとると、踵を返してアイゼルは場内へと戻つていった。

「まあ、他の連中はどうかはわからんが、私に勝てる人間がいるとはとても思えんがね…。」

「それにはサテラも同感。勿論。サテラに勝てる人間もいないって意味だけど。」

柱に身を潜ませた緑髪の少女がアイゼルに語る。が、その少女の目線が異様に高い。驚くべきことに彼女は巨大なゴーレムの肩に乗つていたのだ。彼女こそが、ゴーレム使の魔人サテラである。

「サテラ、お前はヘルマン側を索敵しろ。私は正面に出る。」

この場合洗脳に掛からなかったものが、敵国であるヘルマンに行くとは考えにくい。どう考えてもサテラが出る意味が無い。

「何？ 見栄でもほりたいのか？」

「……単純に私自身のものではないとはいえ、あの術が効かなかったものに多少興味が出ただけだ。」

「ふうん。それじゃあ辛くなったら呼ぶんだな。助けてサテラ様——つてね。そしたら助けてやらないこともないね。」

小馬鹿にしたようにサテラが両手を口に添えて叫ぶ仕草をする。

「口の減らない小娘だ。ホーネット*様はいつもお前のことで頭を悩ませているのだぞ。」

※ 二代魔人派閥の筆頭の一人 もうひとりにはケイブリス

「ホーネット様がそんなこと言うわけ無い!! サテラはいつだってホーネット様の役に立っているんだ!!」

「そういうところが困らせているというんだ…。全く。」

アイゼルは堅物で扱いづらいノス、幼くプライドの高いサテラと共にまだまだ共闘しなければならぬ事実を、一つため息を吐いた。

第十話

リーザス奪還編 第二幕

「ふふふ、やっと元魔王らしくなってきたのじゃ。」

陽炎揺らめく自身の魔法にご満悦のククル。彼女の放ったファイアレーザーはヘルマン兵の真上を通りすぎただけであったが、その高温に当てられた彼らは気を失っていた。それほどまでの威力だった。火炎魔法では知る人ぞ知るサイアス将軍に勝るとも劣らない、かもしれない。

これならば、と今一度魔人に対しどの様な策を弄する事が出来るか思索する。サテラに対しては幾らでもやりようがある。彼女は感覚がずば抜けて鋭く、擦りやあんなことやこんなことをすれば確実に倒せる……ゴニョゴニョ。アイゼルは美しいものに弱い。ならば何も問題ではない。わし、美少女。ノスが現れたら……口八丁小細工何でも使って逃げるしかないかもしれないが。

——
っ!!!

「なんじゃ? この声は…。」

ククルの思考を男の咆哮が遮った。聞き覚えのあるこの豪快な重苦しい声色。ここ一週間、何かとグチグチと文句を垂れてきた声。状況を鑑みるに声の主は…。

「まさか…、あのクソツタレめ!」

三十路後半に差し掛かろうという男、コルドバは戸惑った。深夜不可思議な騒音に目を覚ましてみれば、いつもの国境砦ではなく久々に城下へ戻ったコルドバの生活を滅茶苦茶にしてくれた憎いあん畜生が家にいないのだ。しかも彼女の寝袋には「カスタムに行け」とだけ書き置きがあった。あいつ夜逃げでもしたのか。事情でも話してくれりやあなと寂しい気持ちになる。まだ得意のハーモニカも数曲しか聞かせてないというのに。

「おーいフルル、済まんちよつと聞きたいんだが。」

「ふあ．．．、なにい？」

力が緩み、ふらふらと身を起こすフルルの煽情的な姿にドキリとする。が、我慢我慢と精神滅却。コルドバは成人するまでククルには手を出さないと決めているのだ。彼女の体が未熟で不安定故に。

「つ、ククルの奴今日何か言つてなかった？」

「わかんない．．．むにゃ。」

ぼすんと音を立てて再び眠りこけるその姿は妻というより娘のようだった。

しかしそんな彼女の愛くるしい姿を見てもコルドバには何か妙な胸騒ぎがしてならなかった。外の様子も変だ。酒場でのククルの台詞が胸にチクチクと刺さる。

「うじうじしててもしょうがねえ。一つ見回りでもすつか。」

コルドバ・バーン、37歳。趣味はハーモニカと見回りである。

異変にはすぐに気がついた。警備の兵が誰一人としていない。何事かと僅かに喧騒が聞こえる方へと足を進めると、そこにはヘルマン共和国の国旗が堂々と掲げられたリーザス城があった。

「な……なんだこりゃあ……。夢でも見てんのか……。どうして何も警報が出なかった。それにヘルマンの屑鉄共はどっから来やがったんだ！」

熟練のコルドバとは言えまさかこのような事態に陥っているとは到底思わなかった。リーザス城が落ちる姿なんぞこれまでの生涯で一度足りとも想定していなかった事態である。

「ククルが言つてた事はこいつのことかよ……。バレスのじいさんは何やってんだ……。！」

カスタムへ逃げろ。ククルが何者であったかはわからない。だが彼女は少なくとも悪いやつではない、そんな風にコルドバを感じていた。

「大切なもの……。俺にとつて大切なのは……。ちつ、俺はリーザスの青い壁だけ？ 俺がリーザス守らんでどうするっちゅうよ！」

荒っぽい軍人の家とは思えない、新品のような扉。普段はフルルに気を使い、愛情込めて開いたそれをバンと開けた。

「フルル、起きろ!! 戦だ! いいか、よく聞け。カスタムに行くんだ。リーザス軍を頼れ。俺の身内だつて言つちまえばどの部隊だつてお前を守ってくれる! いいな!!」

「ふえっ!? えっ、あつ、うん。わ、わかった!。」

「よし！ これ持つてけ、それじゃ行ってくるぜ。」
渡したのは、ハーモニカ。コルドバにとって、苦渋の決断だった。

「へつ、これで俺も昇進は間違いねえや…。副将軍、いや将軍にだって夢じゃねえかもしんねえぞお…。」

酒を煽り、自らの地位を着にするはヘルマン第三軍部隊長アイザック。何千もの部下を率い、リーザス城の眼下で飲む酒のなんとうまいことか。五臓六腑にしみわたる。

「ちよつと隊長、トーマ將軍がいらないからつてそんなイヤラシイこと口に出さないで下さいよ…。鬼婆に聞こえでもしたらどうすんすか。」

「うおおい、ばつかやろおお前のほうがキモ冷えるわ。寿命縮めてえのか！」
ヘルマンの鬼婆。それは公然の秘密である。絶対に語ってはいけない…。

「それにしても魔人の力つてのは凄いつすね。リーザスの奴ら無抵抗どころかこつちに味方するなんて…俺らもしかして体の良いように使われてんじやないすか…?」

「アホか、こりやパットン様のお力よ。リーザスを洗脳したのは魔人、魔人を操つてんのはパットン様。わかるかあ…?」

「お気楽つすねー。でもそんな隊長の事好きつす。」

「気持ち悪つゝ、ん？ あれもう酔ってんのかな。なんかリーザス兵っぽいの来てねえか。」

特徴ある軽鎧を纏った大男が一人。その双眼でヘルマン兵達を一人ひとり睨みつけながら、城門へと続くリーザス中央通りのど真ん中をどしんどしんと歩いてきているではないか。

ざわめく城門警備に、ヘルマン兵達は何事かと続々と現れる。その数有に千。
「おう、屑鉄共。ヘルマン青の軍が將軍！ コルドバ・バーン様の登場よ!!」
予想だにしない事態にヘルマン兵達はピタリとその動きを止めた。

「俺がいる限り、リーザスは、絶対に渡さんつ
!!!!!!」

男コルドバ、ヘルマン軍千と相對し、吠えた。

第十一話

リーザス奪還編 第三幕

リーザスとヘルマン、雌雄の決したリーザス城。ヘルマン国旗が棚引く敗者の城に男が一人、古今奮闘我武者羅に猛る。

「將軍首だ！ 取った奴には地位も名誉ももらい放題だぞっ!!」

アイザックが兵士に一喝。はつとしたヘルマン兵達は己の職務を思い出し、慌てて武器をその手にコルドバに襲いかかろうとした。相手はあの青の軍將軍。アイザックの言葉通り、討ち取れば確実に昇進は間違いない。この状況ではいくら猛将と言えど、一方的に蹂躪出来る。

しかしそこに、待て——と静止の声が掛かる。その一言は思いがけない餌に興奮したアイザック含むヘルマン兵全員をピタリと止める凄みを含んでいた。

「ふむ。後者だったか。何者かの洗脳に掛かっているようだな。」

ゆらりと城門から現れたるは魔人アイゼル。妖艶な金色の髪を棚引かせ、人間とは隔絶した存在であることを感じさせるその立ち振舞に、味方である筈にも関わらずヘルマ

ン兵は皆、死を感じ取った。本当にパットン様は彼らを使役しているのだろうかと疑問を抱かずにはいられない。

「貴様、誰の手の者だ。言え。」

優雅に一步一步しっかりと踏みしめ、城門前の階段を降りた。背汗がぶわつと流れる。命捨つ覚悟で勇んだコルドバですら、その存在そのものに恐怖を覚え、震える。これが、魔人か。

「やっぱりてめえらが何かしやがったな……狡い手を使いやがって。」

何もコルドバは最初から犬死にするつもりではなかった。道中リーザス軍駐屯所に寄り、リーザス城を直に、国王ウエンズデイング・リーザスを直ぐにでも救出するために持てる戦力を整えようとした。しかしそこには誰一人としていなかったのだ。

「狡い？ 何を言う。無駄な喧騒を避けるための賢く美しい遣り方だ。何より、この私に仕えたほうが幸福、というものだ。」

「幸福だと……？ ふざけやがって……！」

強張った筋肉に電撃が走る。潜在的恐怖より、怒りが勝った。

「軍人の幸せってのはなあ！ 国の安寧と！ 帰りを待つ家族なんだぜつ!!」

コルドバは両手で巨大な槌を両手で振りかぶり、アイゼルに振りかぶった。

「ふん、つまらん生き方だな。人間は何か縛られてこそ、幸福を得るといふものだ。」

…見えなかった。コルドバにはアイゼルの動きが皆目見えなかった。振り抜けば、いつの間にか背後を取られていた。まるで最初からそこにいたかのように。

「べ、べらべら喋ってんじゃねえ!!」

返す勢いで今度は大きく踏み込み、横に一線。いくらなんでもこれは当たる。当ててみせる。

「喋る余裕が私にはあるのだ。さて、私はお前の操者を探さねばならん。誰がお前をここに駆り立てたのか…、その体に直接聞かせてもらおうぞ!」

確かに、コルドバの攻撃はアイゼルに届いた。しかしそのコルドバ全身全霊の一撃はアイゼルの左手一本で動きを封じられ、ピクリとも動かない。コルドバの力は、まるで届いていなかった。呆然とするコルドバに構わず、アイゼルはいつの間にか右手に剣を持ち、構えもなしに只軽くスナップさせた。

「かッ!? う…お……………」

一振り。たった一振りでコルドバの左肩から右足まで鎧ごと一直線に鮮血迸った。両手を手放し、あまりの激痛に地面に膝をつく。

「それだけのガタイをしているだけはある。切りにくいな。」

魔人に情などあるわけもない。アイゼルの言葉には憐憫も嗟嘆もない。血飛沫を上げるコルドバに特に感じる様子もなく、左手に持ったコルドバの槌を投げ、無抵抗のコ

ルドバにトドメを刺さんと再び斬りかかった。

しかし、突如として、アイゼルがヘルマン兵達の視界から消える。と共に、城壁から破城槌のような爆音が響いた。

「ぐっ……！ 何事……?!」

アイゼル自身も何が起こったのか不明であった。ただ、驚くべきことに何者かに殴り飛ばされたらしい。城壁に叩きつけられるとは、思わぬ衝撃にアイゼルはただ驚いた。あの人間が何かやったのか？ それとも他の人間か？ 何にしても、アイゼルはこの時、殴り飛ばした相手がいるという事実を意識していなかった。魔人故に、自らを脅かす存在がないという過信の下の行動であった。

「少々退いてもらうぞ。魔人よ。」

思考の海に沈んでいたアイゼルの目の前に、土埃に紛れいつの間にか少女が立っている。そう認識した瞬間、彼の視界は真っ白に染まった。

リーザス上空に一筋の光が灯る。至近距離で直撃したファイアレーザーは、アイゼルの体を吹き飛ばし、その余波を持ってヘルマン軍前衛を無力化させる程の威力だった。

「まさか…ククルなのか…：…うぐっ！」

コルドバの目の前に映る少女は、見覚えのある白髪、黄眼、そして和服。間違いない。つい数時間ほど前に酒場で牛飲馬食を共にしたいけ好かない少女、ククルであった。衝撃に、痛みも忘れて立ち上がろうとする。しかしコルドバの傷は余りにも厳しすぎるものだった。とても立ち上がるなど出来ない。

「コルドバ…。貴様わしになんと言った？　リーザスの青い壁じやと、大切なモノを守ってみせると決意をわしに見せたのではなかったのかっ！　この大馬鹿者がっ!!」

ククルの発言には怒気を隠す様子もなかった。彼女はこの状況でコルドバに対し、明確な怒りを感じていた。

「なっ…。突然出てきて何言ってるんだ。そもそもお前なんでこんなところに…。」

「何故じゃ！　何故お前こそここに来た！　フルルは、フルルはどうしたのじゃっ?!」
ククルはコルドバの話を聞くつもりはないらしい。ここまで焦っている彼女を見るのは初めてであった。

「フルルはカスタムに送った…。俺がここにいるのは、俺がリーザスの青い壁だから…。」

ククルのファイアレーザーに慄くヘルマン兵の慌ただしいざわめきの中に、ゴン、と音が響いた。

「いつてえ………何しやがんだ!!」

「青二才がつ! 物事の分別もつかぬ愚か者めつ!!」

ククルの一方的な物言いに、コルドバも黙っては入られない。

「リーザス軍ならリーザスを助ける! 当然だろうが! 国王様が…リア王女が死んじまったらこの国は終いだ! 俺以外に戦える奴はいなかった!!! なら例え行きて帰れぬとしても行くしかねえだろう!!!」

「あれ? アイゼルがサテラを呼んだのかと思ったけど、アイゼルはどこ? それにあんた達何?」

ククルよりも少し幼い緑髪の少女が首をこてんと傾げた。魔人はアイゼルだけではない。先ほどの爆音で反対側に展開していた筈の魔人サテラが現れてしまったのだ。更には既に彼女を守る強力なゴーレム、イシスとシーザーがククル達を囲むように鎮座している。

「コルドバ……貴様に説教したいのは山々だがそんな余裕はない。奴一人ならわしげな
んとかする。よいか、まずこの世色癌を食え。そして喋るな、考えるな、戦うな、逃げ
ろ。良いな。さもなくば……。」

「ふざけんな、ここで尻尾を巻いて逃げれるか！」

「……………全く、こちらの台詞だ。よくもふざけた真似をしてくれたな小娘。」

魔人が二人、その使徒同等のゴーレムが二体。こちらは重傷者が一人に丸い者が一
匹。

「さもなくば……わしも、わしも死んでしまうのじゃ……。」

第十二話

リーザス奪還編

第四幕

無敵結界。それはあらゆる物理魔法問わずダメージを無効化する大陸最強の異能。無敵結界を持つがゆえに魔人は絶対なる存在として確立している。しかし、無敵結界を持つ魔人を倒す方法は幾通りか存在する。

一つ。世界の創造者であるルドラサウムの分身たる神・悪魔の力を持つて倒す。神・悪魔やそれに準じる者達には無敵結界は通用しない。

二つ。同じく無敵結界を持つ魔人・魔王の力を持つて倒す。無敵結界を持つ物同士はその力量に関わらず無敵結界を互いに無効化出来る。

三つ。人類が一定数以下になった時、人類救済システムとして覚醒する勇者の力を持つて倒す。勇者は絶対の強者とされ、魔王・魔人に対して圧倒的な力を持つ。

四つ。世に二本しか存在しない魔剣カオス・聖刀日光の力を持つて倒す。それぞれ魔剣聖刀は無敵結界を破壊する能力を持っている。

ファイアレーザーの余波で熱気渦巻くりーザス城下。目の前には依然として魔人が二人、後方にゴーレムが二体と囲まれている。更には、現状ククルが魔人を殺すことは不可能だ。元魔王とはいえ魔王の力は一片足りとも存在してはいない。魔剣力オスも聖刀日光も保有してはいない。だからこそその奇襲だった。今のククルにできることは、不意をついて吹き飛ばすくらいしか出来ない。しかも吹き飛ばしてもダメージは一切与えていないのだから直に戻り、追ってくるのは自明の理。時間との勝負だったというのに…。

「お主がさっさと逃げれば良かったものを…。わしも終いかもしれんな。」

ククルとしては今は序盤も最序盤。ルドラサウムと戦うまでの途中経過に過ぎない。魔人と相対しても一人ならやり過ぎせる自信があった。故にリーザスで行動を起こしたのだが。

「て、てめえから突っ込んで……クソッ！」

不甲斐なかった。リーザス軍一の猛将と謳われた自分がこんな小娘の足を引っ張っているという事実が悪態をつくことしか出来なかった。

「あ、アイゼルどこ行ってたんだ？　もしかして方向音痴か？」

緊迫した雰囲気にも関わらず、魔人サテラはマイペースであった。彼女にとって、人

間という存在は敵足り得ないのだろう。

「サテラ、お前は私を何だと思ってるんだ……………」

人間に警戒を持つていないという意味ではアイゼルも同じではあるが、サテラの場合には度が過ぎていると言えよう。なんにしてもサテラの発言は一々癩に障る。

「まあいい。小娘、貴様がこのデカント*モドキに洗脳をかけていたものだな？　このような雑魚を仕向けてどうするつもりだったのだ。万に一度足りとも勝てる見込みなどないだろうに。」

※デカント 巨人の魔物。筋骨隆々で棍棒を武器に戦う。

「アイゼルは馬鹿だな。このシチュエーションはあの山猿に騒ぎを起こさせて操者は裏で暗躍するっていうのが鉄板なんだぞ。」

「サテラ…貴様……………」

真剣な空気を取り戻そうとしたというに此奴は……………」

「だとしたら何故操者である奴がここにいる！　おかしいだろうがっ！」

「あ、そつか。」

「馬鹿は貴様だ…。」

「サテラは馬鹿じゃないぞ馬鹿じゃないぞ馬鹿じゃないぞ……………」

魔人達のほのぼのとした会話に惑わされてはいけない。彼らは一瞬でククルとコルドバの命を刈り取る自信と、それに見合った力を持っているのだから。

「コルドバ、ならば選べ、今ここでわしを道連れにするか。わしの言う事を聞いて生き残り、リーザスのために戦うかじゃ。」

「……………俺が囷になる。なんとか突破口は開いてやるからお前は逃げろ。」

「現実を見るのじゃ。お前は足手纏に過ぎん。貴様が囷になるほうがわしにとつては邪魔でしかないのじゃ。それともわしを殺したいのかの？」

ククルの発言は最もだ。つい先程のアイゼルとの交戦は戦いにすらなっていないかった。長年守りの要としてリーザス將軍に席を置いたコルドバの尊厳を打ち砕くほどの一方的な蹂躪。しかし目の前の少女、ククルは不意打ちとはいえその魔人を吹き飛ばしたのだ。形ばかりは四対二となっている現状だが、実質四と人質一対一であるのは間違いなかった。

「何、心配するな。リーザスを守ろうとするものが多い。アイスの街からいざれここに英雄が現れようぞ。しかしそいつはちと好色でな。フルルを守ってやれるのはお前だけじゃ。」

「…ククル、お前は…。」

何者なんだ？

「どうしてそんな力を持っている？ どうしてそんなことを知っている？ どうして俺を助ける……………」

「ゴーレムの間を抜けて逃げろ。ゴーレムと言っても侮るなよ。魔人が作ったゴーレムじゃぞ。」

魔人たちの警戒が薄い。やるなら今しか無い。

「業火炎破！」

ククルお得意の火魔法である業火炎破が戦いの幕を開けた。魔人に抜けて放たれたそれは広範囲に拡散し、視界を奪う。

「今じゃー！ 走れえ!!」

コルドバが飲んだ世色癌*の効果が続いてきた。今なら走れる。ククルを置いて逃げることに後ろ髪を引かれる。が、將軍たるもの大局を見る力が必要だ。苦虫を潰し、コルドバは走り出す。

※ 世色癌 ハピネス製薬製の一般的な回復薬

「ふん、こんな小細工が通用する相手だと思うなよ？」

「イシス！ シーザー！ 逃すな!!」

走るコルドバを大きな影がぬつと塞ぐ。問題はこのゴーレム達。イシスとシーザー。

どちらもサテラが丹精込めて作り上げた最高のガーディアンである。ククルが振り抜けば、既にゴーレムはコルドバに迫っていた。想像以上の速さだ。とても泥で作られた人形とは思えない。

「じゃがゴーレムはゴーレム。弱点はあるのじゃ！」

姿勢を極力下げ、地面を蹴る。今のククルの力では装甲に重点を置かれたシーザーを打ち破ることは出来ない。しかしイシスは防御よりも回避に特化したゴーレムだ。イシスの装甲相手なら必ずやこの拳が答えてくれると踏んだ。

コルドバを抜いたククルは、イシスの足を狙って低く飛びかかる。イシスはこれを瞬時に後退し避けるがそれは想定通り。空中で前転、体を撚ることで向きを変え、再び地面を蹴る。イシスが速い事は間違いない。しかしながら接近戦での瞬発力はククルに分がある。ククルの拳はイシスの横腰を抉った。足を狙ったのはブラフでこちらが本命。ゴーレムはその原料からして過大な重量となる。いくら速度に特化したイシスと言えど、その重量を支える腰部が破損すれば、その性能は極端に落ちるだろう。

「サテラさま　メイレイ　タオス。」

イシスを庇いにシーザーがククルを狙う。これでいい。コルドバは今ノーマークだ。彼とて人間の中では圧倒的強者の部類だ。必ずや抜け出して見せてくれるだろう。後はシーザーを惹きつければいい。しかし、その慢心がククルを襲う。所詮彼女がしたこ

とは、魔人が作ったゴーレムを一体弱体化させただけだ。

未だ轟々燃え続ける火炎をヒュツと何かが切り裂いた。並々ならぬ反射で恐らく魔人の攻撃だろうと想定し、ククルは襲い来る攻撃を見切ろうと振りむく。と、同時にククルの背に凄まじい衝撃が訪れた。肺の空気が強制的に吐出され、あまりの痛みにククルは地面に落とされる。

彼女をたたき落としたものはサテラの鞭だった。ガーディアンメイクとしてサテラは知名度が高いが、その実有数な鞭の使い手でもある。変則的な鞭による攻撃は、初めて体験するククルにとって予想だにしない威力を見せつけたのだ。

「ま、まだまだじゃ………！」

だがククルは元魔王であった程の戦闘経験を持っていた。遠距離攻撃を受けた場所に留まるのは無策にも程がある。直に痛みを堪え、なんとか立ち上がろうと四肢に力を込める。ゴーレムを縫うように移動すれば鞭を攪乱することが必ず出来る筈だ。

「いや、(´▽´)までだ。」

死神のような黒鎧がククルを見下ろす。ククルが倒れた隙は、魔人にとっては十分過ぎるほど長かった。透き通るようなアイゼルの太刀筋が、ククルの首を狙い、ストンと

落ちる。

魔人と元魔王の決着は、呆気無くついた。

第十三話

リーザス奪還編 第五幕

コルドバの時間が止まる。叫び声も上げず、刃が通った後、暫くして、ドバつとその生命を散らした。ゴトリとその首が落ち、少女の美しい白髪が黒く染まった。その肉体は未だに四つん這いの体勢を維持したまま。少女の生首はまるでつい先程まで生きていたとは思えないほど、無造作に、振り向いた姿勢で固まったコルドバの元へと転がっていく。

「ク、ククル……………」

一体全体何がなんだかコルドバにはわからなかった。軍に席を置くだけあって、身近な死には慣れていて。だが、余りにも唐突なククルの登場と死。結局、ククルが何故ここに現れ、何故自分を助けようとしたのかわからないままであった。口うるさい奴だった。食費ばかり消費するふざけた居候だった。そのくせ訳のわからん説教と垂れてくる生意気なガキだった。

「なんだアイゼル？ 殺しても良かったのか？」

「生かす意味も特にないと思つたまでだ。此奴を殺せば何も問題は起こらんだろう。」

それにノス爺の心配事を増やしたくないからな。此方に飛び火されては敵わん。」

ひゅつと血糊を振り払い、鞘にしまう。だがその動作の中に、アイゼルは僅かなブレを感じた。なんだ…？ 普段と勝手が違うな。

「殺しても良かったならサテラがさっきの一撃で殺してたのに。アイゼルかつこつけたかったんだろ…。」

見目同じ年頃の少女が一刀のもとに両断されたというに、サテラはむしろ獲物を取られたこと、そのみが不満な様子であった。壊れてやがる。元人間だなんて生易しいもんじゃない。コルドバは魔人という存在をこの時初めて理解した。

「うるさいな…。」

しかもそれでいて、もう終わったと、お前など戦う必要もないというように魔人達はコルドバを放置し、再びふざけた会話を始める。

「てめえら…許さねえ……………」

もう力の差だとか人数差だとか、リーザスがどうかそんなのはどうでもいい。必ず、こいつらに一撃ぶち込んでやる！

「サテラ、もう一匹はお前に譲ってやろう。」

「当然だ。イシスもちよつとだけど傷つけられたしムシャクシャするからな。」

メインデッキ前の肩慣らしだろうか。右肩を一回転、鞭を撓らせる。ピシヤツと

いうなんとも言えない音が飛び散り、それだけでリーザスの石道に亀裂が走った。

「お前のゴーレムに傷を負わせたのか……。ふむ。」

アイゼルの中の違和感はどんどん膨らんでいく。思った以上に呆気なかつたな。やはり人間というものは脆い。魔人の身では人間がいくら力をつけようと兇戯に等しいか……。

やはり、おかしい。この違和感はなんだ……？

……匂いが、違う。血の独特な匂いがしない。どういうことだ。

暗がりの中に目を凝らして見てみれば、少女の胴から流れ出たものは、黒い。闇のように真っ黒な液体のようだった。更には首を切り落としたというのに、その流血がもう止まりかけている。

「さてと、覚悟はいいか？ 少しくらい楽しませてみろっ！」

最早、違和感どころではない。これは何かある!?

「待て！ サテラ!!」

サテラが鞭を振り被ったその時、ククルの肉体が突如ぼこぼこ奇怪な音を立て、四肢から何まで膨張し始めた。これは、まずい。

「爆発魔法か!? だが魔力は感じないぞ。」

例え爆発魔法であったとしても、無敵結界を破壊しない限り魔人に肉体的損傷は起らない。それは間違いない。しかし、アイゼルが自身に疑問を感じてしまうほど不気味な光景であった。

「くっ、シーザー! イシスを守るんだ!!」

それはサテラと同じ、加えてサテラのゴーレム達は無敵結界を保有していない。既にククルの肉体は殆ど球体に近いほど膨らんでいる。

刹那、アイゼルの目には、顔を地に伏せるように転がるククルの首が、ニヤリと笑った気がした。

爆発。ククルの肉体はその場にいた誰しもの想定を裏切り、内側からの圧力を持って弾け飛んだ。じめついた破裂音と共に肉体から飛び出て来たのは黒い液体。先ほどアイゼルが血液と勘違いしたものだ。液体は四方八方面状に決壊し、魔人もゴーレムもヘルマン兵をも、全て飲み込んでいく。

「ぐおっ!? なんだこれは!? くっ、前が見えん!!」

「目！ 目がっ!? 取れないぞっ!?」

べつとりと周囲に広がったのは、アミノ酸とメラニン。つまりは、墨だった。

「……………この状況はなんだ?」

騒ぎに駆けつけたのは魔人ノス。一体全体どうなっている。辺り一面真っ黒ではないか。しかし、この光景、どこかで見たような…。

「サテラ、アイゼル。何があつたのか、詳しく話せ……………!」

リーザス城下の裏道に荒々しい呼吸音が響く。一人の巨漢が息も絶え絶えに膝をついていた。

「なんとか、逃げ切れたみたいだな……………」

「いやはや間一髪じゃったのー。」

はて、この場所には彼一人しかいるようには見えない。一体どこからと声音に耳を澄ませば、どうやらコルドバの胸元に何かあるようだ。

「くそっ!俺は気が狂っちゃまったのか!!!」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

!!!

艱難、汝を玉にするかはわからないが、コルドバは又一つ世界の神秘を知った。

第十四話

リーザス奪還編 閑話

一時期は呪いにより四魔女と恐れられ、和解後カスタムの街の復興に務めてきた女、エノレア・ランはある問題に大層頭を悩ませていた。それは街の復興が思うようにいかないだとか、隣国リーザスが崩壊してしまったことだとか、それに伴ってヘルマン軍が攻めてきているとか、リーザスから逃げ延びた難民たちの処遇に困っているだとか、ましてやリーザスの青い壁とかいう元將軍が凄まじいペースで酒を飲むせいで街のアルコールが底を着いたとかそんなものじゃない。

リーザスが滅びてしまった。それは間違いなく一大事だ。自由都市とリーザスの架け橋としての役割も強く持つカスタムとしては商工上大きな痛手だ。

ヘルマン軍が攻めてきた。まだまだ小規模だが、元々カスタムは都市群の一つであつて、軍隊を持つているわけでもない。正直もう手一杯手詰まりだ。他の自由都市群に要請を出したものの、芳しくない状況にある。

リーザス難民達の処遇は急務だ。街には溢れかえるほどの難民が訪れ、復興中であるカスタムにはそもそも宿も余分な住居もない。簡易テントが関の山だ。増えすぎた人

口は食糧・衛生・治安殆ど生活に関わる全ての水準を大きく下げている。本来であれば、洞窟内にあった旧市街を利用することも出来たが、一ヶ月程前の謎の爆発によって旧市街は瓦礫の山と化してしまった。

コルドバ・バーン。唯一のリーザス軍の生き残り、又リーザス陥落の生き証人だ。何故彼だけが助かったのかはわからないが、兎にも角にもリーザスの情報を彼から得ることが出来たのは大きい。それに今ではカスタム臨時自衛軍の総司令としてその防衛術を遺憾なく発揮している。カスタムが未だ無傷でいられるのは彼の功績による所が大きい。

だが、問題は彼が連れてきた謎の物体だ。いや、とても役には立っている。凄まじい魔法と見識で、コルドバの腕と合わせてカスタムを不落の要塞と昇華したのも間違いない。しかも話によれば、あの物体によってコルドバも命を助けられたそう。有益、そう、それは間違いない。だが……………。

「うわああああああん!! お母さああああああん!!!」

「うわああああああん!! なんで泣くんじゃあああ!!! わしだって好きでこんな姿しとるんじゃないんじゃあああああ!!!」

男の子の尋常じゃない泣き声と件の存在の声はエノレアの耳に届く。かれこれ十日ほど前から毎日のように聞くテンプレートだ。

机に山積みになった住民の苦情から目を背け、椅子から立ち上がりカーテンを開く。男の子と少女の姿が目に入る。大泣きして地べたに座ってしまった男の子と、脳天気な表情で笑う少女。そしてその少女の頭の上には、生首が乗っていた。

「わし、悲しくて死にそう。」

「ぶ……くくつ………。これも私の店を壊したバツですよ。さあ生首さん今日も頑張つて働いて下さい。」

「生首つて、言うのは、やめるのじゃああああああ……。」

「あ、逃げた。」

びよんびよんとバウンドして移動しながら、生首、もとい元魔王ククルククルは世の敵しさに咽び泣いた。

コルドバとククルは、リーザスで一命を取り留めたフルルとなんとか合流した後、ククルの推挙でカスタムの街に世話になることとなった。カスタムは自由都市としては四魔女を代表する豊富な戦力を持ち、元々の治安もいとあつて、ヘルマン軍から逃れ

つつりーザス開放への一手を打つのに適した土地であったのだ。

ククルは依然として生首のままだった。昔は一日二日で生えてきたものだが一体何時になったら体が元に戻るのか…。ククルは不安でしようがなかった。取り敢えず魔法を撃つ分には申し分なかったため、トマトの借りの件も含めてカスタム防衛の一要因として働いてみたものの、生首が動く姿にカスタム市民は騒然。バーン夫妻の協力もあつてどうにか街にいることだけは認められたのだった。

「この連中はわしの辛さが全くわかつておらん！ これだけ可憐な少女が傷ついているといふに奴らは皆悪魔じゃ。いや、神じゃあ！」

ククルにとつて、神も悪魔も似たような存在なのだ。どちらかと言えば神のほうがよっぽど質が悪い。

「私にそんなこと愚痴られても…。それに悪魔なのか神なのかどっちなのかはつきりしなさいよ。」

ここは防衛兵器開発長にして元四魔女の一人、マリア・カスタードの家である。真っ青な髪とむっちり体型が特徴的な元四魔女ではあるが、ある呪いが解かれた時にその魔力を失っているため魔法は使えなかったりする。現在マリア自身が開発した防衛用兵器チューリップシリーズの調整中である。

「はっ、こんなにも訴えておるのに薄情な奴め……。もういいのじゃもういいのじゃ。」
「ちよつと！ チューリップ二号の中に入らないでよつ！」

もぞもぞと髪の毛をまるで触手のように動かし、砲身の中へ入っていく姿は、女性に對して躊躇われる発言ではあるが、ちよつと気持ち悪かった。

「ねえマリア。まだ終わんないの？」

マリア家の窓からにひよつこりと顔を出したのは魔想志津香。彼女も同じく元四魔女であり、マリアの親友でもある。

志津香はマリアの家に礼一つ言わずに入ってくる。マリアも特に咎める様子はない。それは彼女たちがどれほど気心知れた仲であるのかを端的に表していた。

志津香はマリアとは違い、純粹な魔法使いだ。その才能は大陸でも五本の指に入るかもしれない程。その名は徐々に知れ渡り、今やカスタムの街で緑の少女といえれば魔想志津香だ。哀れトマト・ピュール。キャラの濃さでは勝っているはずなのだが。

「ご、ごめん志津香。ククルちゃん謝るから出てきてよ。」

「嫌じゃ嫌じゃ。もう街なんて守ってやんないもん。」

「あー、また生首が迷惑かけてるわけ？ あんたいいかげんにしなさいよ。」

ククルがマリアに迷惑をかけるのはここ数日の日課となりつつあった。ククルのことを名前と呼んでくれるものが、元々人間としてのククルを知っているバーン夫妻を除

いてマリアしかいなかった。そのため彼女は頻繁にマリア家を出入りし、日々の鬱憤を晴らしていたのだった。

「うわあああああ!! 志津香は血も涙もないのじゃ。謝るまでわしは出てこんぞ!」

子供か…。思わずため息が出る。つい最近まで別の存在によつて悩まされていたと、いうにまた新たな悩み種の種が…。

「はあく、やつとランスがいなくなつたと思つたら今度はヘルマン軍に生首。ふんどり蹴つたりだわ。」

ククルの脳内に電撃が走る。

ん? ランス? そういえば最近自分の事で精一杯で、何か重大なことを忘れていたよな……………。

唐突に、ククルの絶叫が砲身に木霊する。肺も無いだろうにどうやってこんな大声が出るのか志津香は不思議でならなかつた。

「忘れてたのじゃ! リス*の洞窟じゃ! あのスケコマシがこのままだとリスを追つ払つて会えなくなつてしまうかもしれないのじゃ!!!」

※ 丸い者の一種 魔人ケイブリスはリス出身の魔人

「えっ!? ククルちゃんランスの事知っているの!？」

「説明は後じゃ! んっ、おっ、あれ? 抜けん!? 出れん!? 動けん!？」

純真なマリアに下らない意地悪をし続けた罰なのか、それとも先ほど神と悪魔を同時に敵に回す発言をしてしまった天罰か。どうやらククルはチューリップ内にびったりとはまってしまったようである。

「マリアっ! 助けてくれええええええ!!」

自業自得ね…。と呟く志津香。まあ、無理もないだろう。彼女は自身の魔法に相当の自身とプライドを持っている。少なくとも、同じ魔法使いに負けるなんてことはまずない。しかしながらなんとこの生首はこんななりをして志津香以上に強力な火魔法をカスタム防衛時にバンバンと打ち続けてくれやがったのだ。まさかこんな首だけびっくり人間(?)に負けるなんて、と彼女がその夜ベッドで嗚咽を漏らしていたことはマリアだけの秘密である。

「うゝん、これはちよつと分解しないと無理かしら。でもこれはプロトタイプだからそんな簡単に分解できないのよ。それに中のククルちゃんを安全に取り出すとしたら

三日は欲しいわ…。」

因みにこのチューリップ、名をチューリップ二号マレスケ試作型という。実に長つたらしい名前のこの砲台は、四魔女の育ての親にして呪いの指輪を付けさせた魔法使いラギシスを倒すために急ピッチで作られた傑作である。

「そんなに待てんのじゃ！　なんとかならんのかあ!？」

「自分から入って置いて酷い言い草ね。生首、魔障壁くらい貼れるわよね。」

「な、なにをするんじゃ…。まさか……………」

志津香は砲台後方に両手をつき、軽く深呼吸した。

「火爆破!!」

「やっぱりのおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
……………」

「おー、よく飛ぶもんねえ。」

「つて、ちよつと志津香!　どうしてくれんのよ!　天上に穴開いちやつたじゃない

!!」

そこかよ、と突つ込む志津香。今日もカスタムは平和だった。

第十五話

リーザス奪還編 第六幕

「んあ……どいじやいじは……。」

カスタムから大砲でふっ飛ばされて何処へど。最初の目覚めは心地よいものとはならなかった。はて、目を開けたはずなのに真つ暗である。しかもゆっさゆっさと身体がバウンドしている。まあ、身体はないのだが。

「何がどうなつとるんじや……。しかもまだ首だけ……。」

どうやら何か袋状のものに入れられ運ばれているらしい。ざりざりと質の悪い布が、頬を擦り切るり、耳を悩ませる。

「乙女の柔肌になるたることを。全く許せんのだじや。」

魔法を使えば直ぐにでも外にできることは出来る。しかし外の状況が全くわからない現状、むやみに魔法を使って逃げ出すというのはまずいかも出来ない。やはり一先ずは情報かとククルは冷静に判断した。ククルは忘れかけられているが元魔王である。策略と智謀に長け、世界を支配した存在なのだ。…本当か？

「しっかし世の中には変なものもあるもんだな。」

「私もびつくりしました。JAPANには人面果と言って、仙人が不老長寿の薬にするなんて話を聞いたことが有ります。」

麻袋の中に誰かしらの会話の音が微かに聞こえてきた。若い男女の声だ。声量からして、どうやら女がククルの麻袋を持っているらしい。

「ほー、それじゃ漬け置きでもしてみるか。」

んん？ 何処かで聞き覚えがあるような…。

「ランス様。そろそろ日が暮れちゃいます。テントを張りましょう。」

「あー、そうだな。さっさとやれ。」

元気よく了解する声がなんと健気な。ああ、見当がついてしまった。これは間違いない。どうやらククルはランスとシルに捕まってしまったようだ。一体どのような経緯を経てそうなったのだろうか…。

少しばかり時を遡る。カスタムから本当に勢い良く飛び出たククルは、まず畑に埋もれた状態で地元農民に発見された。その後生きている生首を恐れた彼らに捨てられようとした所を通りすがりの商人に引き取られ、アイス*の街でひっそりと営業する怪し

い物品屋で売られていたのだ。そして運悪くもアイスの街に家を持つランスに興味本位で買われたというわけだった。

※ 自由都市群の一つ カスタムの割りごと近所さん

この状況…なんとかして逃げ出さねば…。

薪の火の粉が爆ぜる軽快な音とともに夜が訪れた。よしよし、やはり安全に逃げるならやはり夜。ランスとシイルが食事を取る間がチャンスだろう。ここは焦らず、虎視眈々と機会を伺わねばなるまい。先ほどシイルがランスを呼ぶ声が聞こえた。この長さからいつて遂に目的の瞬間となつたらしい。逃げるなら今のうち…。

「お、面白いや首女があつたな。ぐふふ、俺様の世界中の女の子を俺様のものにするというハイパーな夢を叶えるためにも不老不死の薬とやらを試してみるか。」

なんて声が聞こえてきたからさあ大変。よもやと思うが、ランスならばそのくらいの畜生道に入りかねない。

まずい、このままでは奴に食われてしまう！ なつ、紐で縛つてあるのか!? 出れんぞっ!! なんでわしはこうも狭いところから出れなくなるんじや…っ!!!

「あん？　なんか袋が跳ね回ってないか？」

我武者羅に動き回っているからして当然であるが、どうやらククルの行動はバレてしまったようだ。もう時間がない。鍋の具のように煮込まれる運命が透けて見えるようだ。

くっ、こうなったら致し方ない…

「火爆破！」

突如、袋の中から爆風が巻き起こる。流石のランスもこれには驚いた。

「うおおおおおおお!!　あちっ、あちちちちちち!!」

「っランス様!!　た、大変っ！」

「早く回復魔法をかけろっ、このマヌケっ！」

「あっ、ランス様！　首が逃げてます!!」

「なにい!？」

ククルは全速力で走った。過去の栄華を忘れ、敵に背を向けた。嘗て無いほどの悔しさを飲み込みククルは走った――。

「オラーッ!!　捕まえたぞっ！」

だがククルは生首だけの存在だった…。その速度は、致命的に——遅かった……。

「さて、俺様に火傷を追わせた罪を償ってもらおうか、」

ククルは髪の毛を輪っかのように縛られ、テントの骨組みにぶら下げられていた。な
んでわし、いつもこんな目に…。

「しっかし首だけってのはなー。身体がないんじやエツチ出来ないではないか。それ
にしてもなんかどっかで見えた顔だな。」

「えっと、なんて呼んだらいいんでしょうか。」

「……………ククルククルじや。」

「うおっ!? 喋ったぞ!!」

もうククルの脳内は怒りでヒステリックパニック状態だった。ここ暫くまともな生
物としてすら見られていない気がする。唯でさえ陶器が喋れる時代だというのに。

「何処まで愚弄すれば気が済むんじや!! わしはククルククルじやぞっ!! 丸い者の
王であり初代魔王じやぞっ!!」

「あ？ 何言つてんだこいつ。」

当然そんなことを何も知らないランスに言ったところでわかるわけもない。

「と、取り敢えずどうしましょう。まずククルちゃんは…何者？」

「よくぞ聞いてくれた！ わしは遙か昔、この大地を全て統治した丸い者の王にして…。」

長々とした演説が幕を…

「うるさいやつだな。殺すか。あーでも折角払った金が勿体無いなあ。」

開かなかつた。ランスという男は基本的に他人の話に耳をかさないのである。

「ランス様あ、殺しちゃうなんて可愛そうですよ。ククルちゃんは どうしたい？ お

家はどこ？」

シイルの話しかけ方は幼い子供へのそれと同じであつた。なんだかククルとして又もバカにされた気分である。首だけだからしょうがないが。

しかしなんにせよ、このままではランス達に良いように扱われ、ククルの尊厳はボロ雑巾同然にされるかもしれない。何とかしてシイルを誘導して逃げ道を作らなければきつとあんなことやこんなことに………。あれ？

ククルは閃いた。よくよく考えればこの状況はそんな悪い状況でもないかもしれないな

い。まず身体はないからランスに襲われることもない。しかもランスと一緒に行けば必ずリスに会える筈。リスの恋人らしい人間の女はそのときランスから守ってやればいいだろう。

…うむ…うむうむ。ふははははは、なんじゃ、何も問題ないではないか！

「……………わしは天涯孤独の身なのじゃ。できれば一緒にいたいのだじゃ！」

そうと決まれば即日決断。ククルは媚に一転傾倒。尊厳とやらは何処へ行ったのだろうか。

「やっぱこんなもん気持ち悪いわ。はよ死ね。」

「うわああああああああああん。気持ち悪いって言うなああああああ!!!」

残念ながらククルの努力は実らなかった。元の体に戻らねば共にすること叶わず、戻れば守ること叶わず。酷い板挟みである。

第十六話

リーザス奪還編 第七幕

「ランス様、ここがリスの洞窟みたいですよ。リスって書いてます。」

ランス達はリスの洞窟へと辿り着いた。ランスは金稼ぎのためにギルド長キースから家出少女搜索の依頼を受けていたのである。

※ アイスの街のギルド長 ランスとは腐れ縁 ランス世界のギルドは傭兵派遣所のようなもの

「ふがふが…のう、そろそろここからでしてくれんかの。」

「ランス、いい加減出してあげたら？」

再びククルは麻袋の中に入れられていた。自慢の艶やかで美しい髪はズタボロである。閉所恐怖症への第一歩を踏み出しそうだ。

因みに先ほどククルへと憂いの言葉を向けたのは見当かなみ。あのリーザス城から逃げ延びたりア王女のくノ一である。現在はリーザス奪還のためにランスと行動を共にしている。先日、周囲の偵察からランス達の元へ戻ってみれば生首が火炙りにされかけていたのだ。然しもの不幸体質少女かなみもこれには同情したそう。

「けっ、そんな姿見ながら戦えるか。それより首人間、本当に、本当に貝殻が大量にあ

る場所なんてのを知ってんだらうな？」

「ほつ、本当じゃ。この時代にわしより貝に詳しい奴なんておらんぞつ！ なにせ生きた貝と闘いぬいてきたのはこのククルククルなのじゃ！」

ククルがランスと行動するためにランスへ掲示したものは貝殻の宝庫である未開の地へ案内するというものであつた。このランスという男、性格に似合わず貝殻に対しては相当の熱意を持つ筋金入りの貝殻オタクである。

対してククルククルは貝全盛期に生きていた存在である。当然貝と全面衝突した場所や更には当時の貝の集落も既知である。ククルはランスの無類の貝殻好きを利用し、この情報を教えることを条件に冒険への同行もとい身の安全を確保したのであつた。

「ククルちゃんすごいですね〜。」

「ヴォー・ソー*を差し置いて貝に一番詳しいだなんて抜かすのはどの口だ。」

※ 貝殻研究で著名な博士 ランスは半年ほど前にその著作を読んで感銘を受けたとか何とか ランス9初出

バシンバシンと叩かれる麻袋。当然入っているのはククルである。大変、痛そう。

「叩くのはやめるのじゃ！ やめるのじゃ！」

リスの洞窟はとてつもなく狭かつた。人間が入るには四つん這いに進むしか入れ

ることが出来ない程である。この地に古き丸い者であるリスが棲息することが出来たのはこの入口の狭さも一役買っているのかもしれない。自然の城砦に感謝である。

ランス達は進入時に素早く動けるかなみを先頭に置き、順にシイル、ランスと続いた。四つ這いで細い洞穴を通らなければならぬとあって、人間どうしても頭部を下げなければならぬ。となると今度は下半身が釣り上がってしまふものなのである。ランスがその現象に対して反応するのは摂理というもの。

「でへへ、いいしりだぞシイル。」

「ら、ランス様つ。あん…やめて下さい…。」

ランスもついつい手が出てしまふ。つんと指で突かれたシイルは逃げることも出来ず、思わず身体を剃り上げてしまふ。なんとというイチャラブ空間だろうか。

「顔がつ！ 顔が削れるううううう!!」

対してククルは悲惨であった。四つん這いでは持つことも出来ず、袋ごと引きずられているのだ。

「顔以外に身体ないだろう。」

というランスの心を抉る発言も届かないほど。前途多難である。

リスの洞窟は入口が狭く、大型モンスターが入れないだけあって、特に戦闘に苦勞す

ることはないダンジョンであった。幾つか宝箱を発見し、ランスの突発的な性的行為で場を和ませつつ(?)メンバー全員が万全な体調でどんどんと奥へと進んでいった。ククルとしても、戦闘面で役立つということでなんとかランスから許可を貰い麻袋から出してもらえていた。かなみの頭にのっかり上機嫌である。

「なんか広い空間にでたな。」

今までの道のような狭い空洞ではなく、ドーム状に広がった場所に出た。

「ランス、彼処に倒れている人がいるわ!」

かなみが指を指す方向には確かに若い男女が生死もわからぬほど大量の血溜りの中に沈んでいた。それは橙色の髪色の男と金髪の子。キースギルドでランスと同じく家出少女搜索の依頼を受けたラーク&ノアのコンビだった。ラークの軽鎧はまるで巨大な鉄塊でも

「きゃ、大怪我してるみたいですよ! 大変!」

「待つんじゃない! 魔人がおるやも知れぬ!!」

ククルの脳内にはこれと似たような状況が知識として浮かんでいた。間違いない。ラークとノアを襲ったのは魔人サテラ。これは暇つぶしがてらサテラが強者を探し、その標的とされた結果だ。とすれば近くにサテラかそのゴーレムが潜んでいる可能性が

高い。魔人サテラは知識ではここでランスを襲うことはせずに新たな強者を探しにどこへ行くのだが、現状のように何が起こるかはわからない。場合によってはこちらに牙を向いてくるかもしれない。

「あん？ 適当な事ぬかすんじゃないぞ首人間。」

「特に倒れている二人以外ないようだけども。」

ランスとかなみが周囲を警戒してみるも、空間は異様なほどの静けさを保っているだけ。どうもサテラはいないようだ。

「そ、そんな筈はないのじゃが…。」

もしかしたら、ククルの影響によってランス達がここにたどり着く時間に遅れが生じてしまったのだろうか。もうサテラ達はいないのかもしれない。

「だとしてもこの洞窟に魔人がいる可能性は高いのじゃ。警戒を怠ってはならん。」

確かにかなみの言うとおり何か潜む気配はないが、静か過ぎる。ここは魔物の住処となった洞窟内だ。ここまでの道中も魔物はわんさかいた。逆にこの状況はおかしい。

「成る程。確かにこの状況はほんの数刻前、何者に襲われたということ。ここで警戒することは理にかなっている。」

珍しく同意の声が届ってくる。しっかりとした落ち着いた声だ。ランスもわかつてくれたのだろうか。

「その通りじや、相手は魔人。どれ程の警戒をもつてしても足りるもんじやないわい。」

「ふむ。流石、丸い者の王ククルククル殿ですな。ところで。」

ククルククル殿？ ランスの奴め、唐突にどうしたというのだ。もしや遂にこのククルの偉大さがわかったのだろうか。

「探しているのは、俺のことかな？」

なんぞ声がかから聞こえると見上げれば、漆黒のローブを身にまとった災厄が、こちらをニヤリと見下ろしていた。

第十七話

リーザス奪還編 第八幕

「えっ?! いつの間に?!」

魔人ノスはくノ一であるかなみの警戒を掻い潜り、ランス達の前に唐突に現れた。ノスの巨体が音もなく出現した様子は、まるで空間を裂いて現れたように感じられた。

「どわあああああああ!?! なんだこのむさくさいじじいは、どつから現れやがった。」

「ノス…、御主何故ここに…。」

ノスはしげしげと興味深げにかなみの頭に乗ったククルを観察している。何故サテラではなくノスがここにいるのか。本来であれば、シル復活のために様々な暗躍に動んでいる筈なのだ。リス洞窟という弱く、規模の小さい洞窟に居ること事態がおかしい。だいたいサテラはどこに行ったというのだ。

「やはりここに来たようだな…。これはこれは、随分と貧弱な姿になっているが、ククルククル殿とお見受けしよう。」

どうやらノスはククルの存在に気付いていたようだ。元の姿とは似ても似てつかない。

い現状だが、それでも判断できるとは。余りにもククルを認めてくれる人がいないからか、ちよつと嬉しくなつてしまつたのはククルだけの秘密である。ついつられてテンションが上がる。

「た、他人の空似なのじゃ。わしはククルククルのように凄まじいカリスマも威厳もないのじゃ！ それにほれククルククルはこんな小さくないし、わしには美しい造形の触手もないのじゃ!! 新しく覚えた魔法が楽しくて地竜の巢を撲滅したりなんてとても出来ないのじゃ!!!」

事情を知らないシイルもこれには察する。

「よくわからないけど、ククルちゃんそれ本人つて言つてるようなものじゃ…。」

「なんと!? しまつたのじゃ!!」

おかしいな。我らドラゴンに辛酸を嘗めさせたあの魔王はこんな知恵遅れな奴だつたのだろうか。ここに来て人違いだつたかとノスが不安に成る程ククルの言動は酷かつた。

「これに見覚えはあるだろう。」

そう言つて取り出したるは、何かの歯を用いたネックレスだつた。鉤爪のような突起が幾つかある円状の不思議な歯だ。

「あつ！ お前さんわしの大事な吸盤引きちぎつたあの地竜か!! あの時痛かつた

ぞ!!」

その歯は当時蝟のような外見だった頃の吸盤の歯だった。当然この事実を知っているのは当時を生きた極々一部だけである。

「やはりな。」

「あつ。」

どうやら本当に、この阿呆がククルククル本人のようだ。

「…お前に聞きたいことが幾つかある。俺についてきて貰おうか。何、素直についてくれば手荒な真似はしないと約束しよう。」

どうやらノスはククルに会いに来るためだけにこのリス洞窟に来たようだ。ノスは地竜の魔人。嘗てククルが魔王として在任だった頃の敵である。ヘタすれば当時ククルはノスの知人や友人を殺しているかもしれないのだ。この誘いはククルに利があるとはとても思えない。

「さ、誘いは嬉しいのじゃが、出来れば遠慮したいの…。」

さてどうすればこの状況を切り抜けることが出来るのか。呑気な雰囲気纏って入るが、今の状況はかなり窮地に陥つていると言っても過言ではない。ノスは魔人の中でも別格の強さを誇る強者だ。とてもククルを含む今いる面子で打倒できる相手ではない。墨爆弾をしようにも未だに身体は再生していない。小細工をしようにもこの狭い

洞窟ではそもそも逃げ出すこと事態難しいものだ。

しかし、ノスの情報を知っているのはククルだけである。ノスが魔人であることも何も知らないランスはいつも通り果敢に跳びかかった。

「このランス様を放置して話を進めるとはどういうことだ！ これでも喰らえ!!」
対するノスは微動だにせず、ククルの返答に眉を潜めているだけ。ランスの上段振り下ろしがノスの肩にガツンと当たる。常人なら身体を縦半分に裂かれるほどの威力である。

「それは困った。こちらとしても出来れば手荒な真似はしたくなかったのだが。」

だがそれは常人であればの話。相手は地竜であり、魔人のノス。全くに意に返さず、むしろ腕が痺れるほどの衝撃がランスに襲いかかった。まるで鋼でも叩いたかのようだ。

「んなっ!!? 俺様の攻撃が効かないだど!!?」

ランスの斬撃によってローブだけが切れ、ノスの肉体が顕になる。その姿、正しく鉄塊。鎧のような皮膚に覆われたその身体は、ノスがどれ程尋常ならざる存在かを主張しているかのようだった。

「ランス！ 危ない!!」

自らに絶対の自信を持つランスは驚きの余り、敵が目の前にいるにも関わらず呆けてしまった。ノスは目の前に飛んでいる羽虫を払うように、無手でランスに振りかぶる。それだけで、ランスの剣は砕け散り、洞穴全体が振動するほどの轟音を上げ壁に叩きつけられた。衝撃に、パラパラと洞穴の天上から砂埃が降る。

「ランス様ああああ!!」

ランスは痛みに声を上げる暇すら与えられず、そのままずると倒れこみ意識を失った。

突如現れた暴風にククル達は窮地に落とされた。かなみは余りの恐怖に身動きを取れず、シイルは顔を鼻水と涙でぐしゃぐしゃにして主人の名を叫び、その主人たるランスはノスのたった一払いでいとも簡単に伸されてしまった。よもやこうまで一方的に追い詰められるとは。サテラとアイゼルから逃げ延びたことで慢心していたのだろうか。相手は他と一線を超えた存在であることは理解していたというのに。例え今うまく魔法を使って逃げようにもランス達を見殺しにすることになってしまう。だが、このままでは全滅は避けられない。

「ふむ、初代魔王の付き人は如何程かと思つたが、全く面白味も何もないな。ランスがここで殺されるのはかなりまずい。ランスはククルの不本意ながらルドラサウムに対する唯一かもしれない突破口だ。

「なんにせよ。ククルククル殿、選択肢が与えられていないことは理解してもらえたかな？」

ククルは黙つて肯定するしかなかつた。

むんずと頭を捕まれ、無造作に袋に入れられ、ククルの視界はまた闇に落ちた。

第十八話

リーザス奪還編 第九幕

綺羅びやかな調度品の数々に囲まれた部屋のテーブルに、不似合いな汚い麻袋がどさりと置かれた。ここはリーザス城最上階近くの皇室の一つであった。

「ぐえつ、もうちよつと丁寧に扱ってくれんかの…。」

麻袋からひよつこり顔を出したのはククルククル。長時間袋に入っていたためか、髪がかなり悲惨なことになっていた。

「おつと、これは済まなかった。どうも最近はお減がわからなくてな。」

ククルに軽く笑みを零し話しかけるのは、彼女をここまで連行した魔人ノスその人。彼には小さすぎるであろう椅子に腰掛ける姿には、つい数刻前見せた冷徹さははなかつた。

「そ、それで結局わしに何をするつもりなんじゃ。」

そもそも一体ノスにどのような目的があつてククルを連れてきたのだろうか。昔の悔恨に対する憂さ晴らしだろうか。過去のククルがドラゴン族に行った行為を考えれ

ば最も起こりえる事だ。何せ二千年も戦い続けたのだ。しかし、この状況では何をされてもどうしようもない。

「初代魔王ともあろう御方が、柄にも無く怯えているのか？ 当時の傍若無人っぷりはどこへ行ったのだ。」

「いや…その、わしは魔王としてドラゴン達を何体も殺したし、当時は憎み嫌忌する仲間じゃったからな…。」

意外にも、ノスは屈託なく笑っていた。ノスも同じ時代を生きたドラゴンである。何故このような笑みを浮かべることが出来るのだろうか？と疑問に思わざるを得ない。ククルはノスの目をじっと見つめ、解答を待った。

「俺達はお互いの種族のために戦っていたに過ぎんよ。なんてことはない。あの戦いは自然の摂理だった…。」

ククルの警戒を解こうと虚言を吐いているわけではないようだ。その表情には次第に覇気が消え、歳相応の過去を背負った、疲れた表情を見せている。

「むしろ、あのまま戦争が続いていたほうが俺達ドラゴンにとつては良かったのかも知れなかったがな…。」

「アベルの事か……………」

二代目魔王アベル。一介のドラゴンに過ぎない男だったが、偶然にもククルの止めを

差し、魔王を継承した者。魔王としての力を得たアベルは、唯一の女性体ドラゴンであるカミーラを強制的に魔人にすることで支配し、再びアベル側とドラゴン族で戦争が始まった。

「さて、何から聞くべきか。まずはククルククルよ。単刀直入に聞こう。何故生きているのだ。」

「それについては何も知らん。確かにわたしはあの戦争で死んだ。だが数ヶ月ほど前に唐突に蘇ったのじゃ。今はこんな見てくれじゃが何故か人間の姿としてな。」

ククル復活の原因がランスの皇帝液だということを知ったらどうなるのだろうか。

「ああ、その奇怪な姿の理由については他の魔人共から聞き及んでいる。なんでも当時と同じよう身体を爆発させたそうだな。あれには皆苦勞させられた。全く面白い魔王様だ。」

「わしがこの姿になってどれ程苦勞していると思つとるんじゃ…。」

ここ最近のククルの不幸度は六千年の歴史でも凄惨過ぎるものだ。今までの足取りを考えると、頭のひじきもしおしおと倒れていく。そろそろ球技のボール代わりに使われそうである。お前ボールな。

「話が逸れたな。俺が質問したのは生き返った原因だけじゃない。どのような目的を持って、何故生きようとしているのか、だ。」

なんとなく、流れが変わった。漸くノスの真意を聞くことが出来そうだ。

「…質問の意図がわからん。お主らドラゴンがそれを聞くのか?」

ドラゴン族は生物としての生きる意味を持ち得ない存在である。現在、アベルの暴挙によって彼らには女性体が存在していないために繁殖行為が出来ず、時間とともに滅びるしか無いという宿命を義務付けられている。

ノスは深呼吸と共に一拍を置いて、ゆっくりとその胸中を語り始めた。

「ククルククル。お前は五代目魔王で在らされるジル様について知っているか。」

「人間の魔王じゃったか。惚れた男に封印された哀れな女、といったところかの。」

ククルの憐憫を含んだ言い方にピクリとノスは強張る。

「…………その通りだ。ジル様はガイという人間に並々ならぬ慕情を抱いて居られた。人間とは相いれぬと説得しても、ジル様の御心は変わらなかつた。」

「それで結局、寝首を掻かれたわけじゃな。」

ジルは魔王である自らを滅ぼすために戦い勇んだ人間であるガイを何故か魔人とし

た。そしてガイを魔人筆頭として、愛人として寵愛したのだ。ノスはそれが不安でならなかった。いずれガイという存在がジルの障害となるだろうと。いくら魔人にしても、魔王と人間は相いれぬ存在であると。何せ魔王ジルは人類史上最悪の魔王として人間を家畜として扱ひ、その尊厳を全て奪い去った人物なのだから。

「ガイがどのような方法を使ったかは知らん。だが奴は魔人でありながら魔王の絶対命令を逃れ、結局ジル様に反旗を翻してしまった。」

そしてその不安は現実のものとなった。ガイは二重人格者であったのだ。片方の人格では魔王の絶対命令を受け、もう片方の人格を使うことでジルに相對するといふ驚くべき方法をとった。ガイに対し、完全に信頼を寄せていたジルはあっさりガイに心臓を一突きされ、魔王はガイへと継承されたのだ。

「俺はジル様をお慕いしている。君主としても、その在り方も、人間としても。だからこそ、このリーザスを抑え、ジル様復活の為に行動している。だが、思うのだ。果たしてジル様は再び魔王として君臨したいと、この世に生きたいとお思いになられるのか、とな。」

ジルは超神と謁見し、永遠の命を手に入れた魔王。封印されて千年たった今も喘鳴ではある。しかし、その精神が既に死んでしまったものであるなら…。

「男と女については俺自身よくわからん。しかしククルククルよ。現実としてお前が

死んでからドラゴン族はその四百四病の外によって混乱に陥った。だから俺は不安なのだ。ガイに裏切られたジル様は、永劫の眠りに付きたいのでは……と。」

まずいのー。わしも恋愛とか未体験なんじゃがのー。焦るククル。まさかこんなじじいに恋愛相談をされるとは思っても……………」

「だからお前に聞きたい。ジル様と同じ魔王だったものとして、何を持って今を生きようとしているのかを……」

ほっ、と若干恋愛から話しが離れてククルがひと安心したのは致し方ないことである。

「わしも別に特段目的は持つてはおらん。只、そうじゃな。なんとなく生まれ変わったかのような気分なのじゃ。丸い者は滅び、憎み殺し合ったドラゴンもいつの間にか滅んでおった。王としての責務も、魔王の血も、過去のしがらみも、この身体には有りません。生まれたばかりの生き物が生きたいと考えるのは当たり前のことじゃろ？」

これはククルの本心であつた。未だにドラゴンが跋扈し、丸い者が文化を気付いていたら、今のように自由に生きることが出来なかつただらう。既に一度死んだ身として、

生を諦めてしまっていたかもしれない。

「生まれ変わる…か。そんなものなのだろうか。」

「ジルについては知識でしかわしは知らんからジルも同じ事を考えるかは知らんがな。正直会ってみんとわからんのじゃ。」

「ふっ、良いだろう。ならば直ぐにでも合わせてやろう。お前と話して多少不安が収まったわ。結局何もしなくては始まらないしな。何を迷っていたのか、俺にできることなど限られているだろうに。ジル様に会っていただくためにも暫くここにいてくれ。安全と不自由な生活は保証しよう。」

豪快に笑いながら立ち上がるノスの忠臣たる姿は、部下を殆ど持たなかったククルにどこか輝かしいもののように見えた。

本来であれば、ジルの魔王化による波乱を避けるために復活を阻止しようと考えていたのだが…。まあこれも余興だ。大丈夫、ジルが蘇っても何とかなるさ。馬鹿になるのも、たまにはいいだろう。そうククルは納得すると軽くノスに了承する素振りを見せ、豪華絢爛ふかふかベッドに飛び乗り、久しい安眠へと旅だった。

普段から馬鹿やっているようにしか見えないとは突っ込んではいけない。

第十九話

リーザス奪還編 第十幕

「わしはこう見えても初代魔王として二千年もこの大陸に君臨しているのー。」

「ふーん。」

「あのノスもぺちつとあしらったくらいなのじゃ。」

「ふーん。」

リーザス城の一室でコネコネ泥を弄くる少女とがいた。少女はどこからか聞こえてくる声に聞く耳持たず、適当に相槌を打ち、黙々と自分の作業に集中していた。

「これっ、なんじゃその適当な返事は！」

「うるさいなっ！ サテラは今忙しいんだっ！ 普段と湿気とか温度が違うから大変なんだぞっ!!」

しかし、今しがたその集中は切れてしまったようだ。頭に被っていた妙な帽子を勢い良く地面に叩きつけ、どうもその帽子に向かつて怒鳴り散らしている。と、その帽子は独りでにくるりと起き上がった。帽子ではない。ククルククルその人であった。今日で魔人達と過ごし始めて三日ほどである。

「痛いのか。そうじゃもうちよつと丸みのあるデザインにしてみんか。球状というのは魂を留めるには最も効率のいい形なんじゃぞ。」

どうやらサテラは新しいガーディアン用のゴーレムを作っているようだ。リーザス防衛用の雑兵として使うものだろうか。その積み重ねられた泥は、どっしりとした人型に近い姿に見える。

「ふん。そんな格好つかないのはお断りだ。大きく逞しい男性体こそがガーディアンとして相応しいものなんだ。」

サテラの代表的なガーディアン、イシスとシーザー。どちらも人間の男に近い形態をしている。逞しいと言ってもデカントのような巨体というわけではなく、やはりどことなく人間味が溢れている。実のところ、サテラが人間そっくりのガーディアンを作るのは先代魔王の影響があるとかないとか。

「待て、それは少々聞き捨てならんな。」

ぬるつと唐突に口を挟んできたのは筋骨隆々とはイメージのかけ離れた男。魔人アイゼルであった。

「確かにガーディアンとしての性能を求めると男性体となるというのは納得できる。」
まるでモデルのようにどこか見せびらかすような歩き方で部屋へと入ってくるアイゼル。流石世界一の美形と自称するだけはある。自分に酔っているようだ。その姿に

サテラもククルも眉を潜めてしまう。黙ってれば…と彼女らが思ったのも仕方あるまい。

「だが普段から身の回りに配することを鑑みれば、美しい形態であるべきだろう。この私のような美男子か、あるいはホーネット様のような美しい女性のようなフォルムこそが相応しい。」

「なんだとつ。サテラのガーディアンが美しくないって言いたいのかつ！ だいたいホーネット様の方がお前より百倍綺麗なんだ!!」

自分で作りもしないくせに難癖付けられるなんてたまったもんじゃない。だいたいホーネットと同等と考えることが烏滸がましいのだ。

「いやいや、やはりわしは丸型を推奨するのじゃ!」

「遅い男型!」

「美しいフォルム!」

互いの譲れないものの為に、魔人界一下らない争いが今、始まるツ!!!

「マリス…これで三日も拷問が行われなかったわ。どういふことかしら…。」

「恐らくですが、ランス殿が決起なされたのではないでしょうが？ 人質としてのこ

こちらの身の安全が確保されたのではないかと……」

ここは仄かな灯火だけが照らす場所。陽光届かぬリーザス地下の牢獄である。現在牢獄にはリーザス城に仕えていた人々がヘルマン軍によって大量に投獄されている。

それは元王女のリア・パラパラ・リーザスも例外ではなかった。彼女はヘルマンに制圧されて以降、魔人達が求める魔剣カオスへの鍵となるリーザス聖武具の在処を答えさせるために、長きに渡ってこの場で拷問を受け続けていたのだ。

しかしながらその拷問は唐突に止んだ。更にはリアの侍女であるマリス・アマリリスと同室となることも許されるという捕虜にあるまじき特別待遇である。もしやランスがリーザス軍を率いて解放しに来たのではないかという淡い希望がもたげたが、一向にそのような気配は訪れない。結果として、何故か待遇がよくなったという不可思議な現象が起きていた。

「……リア様、誰か降りてきます。お静かに。」

悲壮感漂う静寂に、カツンカツンと足音が響いてくる。いつもの獄卒のものではない。遂に何かが起こるかとマリスはリアを守るために覚悟を決め、賽が振られるのを待った。拷問がなくなったということはその必要がなくなったということ。既に聖武具が全てヘルマンに回収された可能性もある。その場合、リア様に訪れる未来は……。

「何故わたしがこんなところ……。マリアちゃんが世界一のアイドルであるこのわた

しを待っているのよ。」

「まあまあ人付き合いは大事じゃて。」

降りてきた男は確かヘルマン第三軍司令官、ヘンダーソン。特長あるオネエ言葉でヘルマン軍人でもかなり知名度の高い人物である。ここでヘルマン軍人が来るということとは、最悪のシナリオが描かれてしまったということだろうか。

「御主がリーザス王女リアにその侍女マリスじゃな。お初にお目にかかる。わしはククルククルというしがない丸い者じゃ。」

絶望に押し付けられ、顔を伏したマリスに、天上から声が掛かる。もしやこの土壇場で来た救援かと顔を上げれば、その声はなんとヘンダーソンの頭の丁度上から聞こえてくるではないか。

「生首が…喋ってる……………」

王女として様々な珍品やら奇怪なシロモノまで献上されてきたリアとしても、人生初の対面であった。

「リア様、予予同意致しますが些か失礼な発言かもしれませんよ。」

生首は目に見えて落ち込んでいる。しかしこのククル、毎時毎分成長しているのだ。もうこの程度で泣き喚くような昨日までのククルではない！

「大丈夫？ ククルちゃん。」

ヘンダーソンは例え生首であつても女性に優しい紳士である。

「うむ、うむ。もう慣れたのじゃ。」

唇を噛み、なんとかして涙を堪えるククル。ヘンダーソンの期待に答えないわけには
いかないっ！

「流石ククルちゃん偉いわ！」

「そうじゃろ！　そうじゃろ！」

やった！　遂にククルは乗り越えた！　有難うヘンダーソン！　有難うヘンダーソ
ン！

「それで、リア様に何か御用がお有りなのでしようか……。」

目の前で繰り広げられた漫才に、鉄仮面と恐れられるマリスも、もうどうにでもなれ
と脱力しかける。が、危ない危ない。リア様の命が関わっているのだ。最後までリア様
を守り通さねばならない。それこそがこのマリス・アマリスの生きる意味なのだか
ら。

「うん？　特にこれといつてはないが、そうじゃのー。取り敢えず人間の王というも
のを一目見ておきたかったというところじゃの。」

おかしなことを言う。現国王はリアではなく、その父である。

「リア様は王女であつて、女王では御座いません。」

「そうじゃつたか？ まあいずれどうなるじやろうて。」

どういう意味なのだろうか。リーザスが解放されるということか？ まさかここに
来てヘルマンがリーザスを開放する理由が見つからない。だいたいこの生首は何者な
のだ。ヘルマン軍に席を置くものだろうか。それともこの奇怪な姿、新たな魔人だろ
うか。

「ちよつとククルちゃん。それはどういう意味よ！ ヘルマンが負けるつていうの
!？」

ククルの発言に驚くヘンダーソン。これはもしかしたら、魔人側はリーザスという国
時代には興味がないという意味なのか？ 一体地上で何が行われているのだ。

「んあー、ヘンダーソンは知らんでもいい事じや。最悪の場合になつても助けてやる
のじや安心せい。ほれ、もう気は済んだのじや。さつさと帰るのじや。」

マリスを思考の渦に落としたまま、ヘンダーソン達は牢獄を後にする。ククルの言葉
は、冷め切つた牢獄に仄かな熱を灯したのかもしれない。直に牢獄の中は先ほどのリー
ザス解放をちらつかせる内容に皆湧きだつた。リアが女王として再びリーザスを統治
する明るい未来に…。

「伝令！ カスタム攻略隊が大損害を受け、撤退したとのことですよ！ 相手側の大将はあの青い壁、コルドバ・バーン!!」
そして物語は再び動き出す。

第二十話

リーザス奪還編 第十一幕

夜風が吹き付ける丘の頂に豪傑立つ。コルドバは巨大な槌を携え、ヘルマン軍に占拠されたラジールを見下ろしていた。自由都市でも活気のあるラジール。眠らぬ都市であるその姿は今、ポツリポツリとした灯りが見えるだけだった。

「コルドバさん。準備が出来ました。いけます！」

コルドバに準備完了の知らせを伝えた少女はカスミ。カスタム防衛兵器開発長マリア・カスタードの助手であり一番弟子である。マリア・カスタード本人は この日のために対攻城戦用自走砲、チューリップ三号*を執念で完成させ、今は休養を取るためにカスタムで待機の任を授かっている。

※ チューリップシリーズ最新版 原作でも大軍兵器として猛威を振るうが、当初は原料となるヒララ合金が不足していた。この作品ではカスタムの女騎士ミリ・ヨークスとコルドバで既に確保した。

「こっちもいけるわ。ミル達も問題ないみたい。…後はコルドバさんの采配次第ね。」
志津香達魔法部隊も万全を期した。カスタム元四魔女の一人、幻獣魔法使いのミル・ヨークスも後方からウィंकして了解を知らせる。準備万端と言ったところか。

「おうし、相手はまだ増援が来ちゃいねえ筈だ。明日の百より今日の五十。今がラジールを、果てにはリーザス軍を洗脳から開放する最大のチャンス。アイゼルとかいう魔人曰く、リーザス軍は洗脳を受けているらしい。だが…。」

ちらりと志津香に目配せする。カスタムの兵を確信させるに、やはり四魔女の言葉は大きい。特に魔法に関しては志津香以上の存在はリーザスを含めてもない程である、とコルドバは認識していた。

「ええ。その魔人が直接洗脳でもしていない限り、大規模な人数に洗脳をかけるにはかなり近くにいる必要があるわ。つまり、今リーザス軍が駐留してるラジールに操っている誰かがいる可能性が高いわね。」

「そういうことだ。ここで勝てば前進どころじゃねえ。リーザス解放達成みたいなもんだ。必ず、勝利する!!」

掛け声とともに、待機していた千を超えるカスタム防衛軍が動き出す。水面下のラジール奪還作戦が鼓動し始めた。

「チューリップ部隊! 装填準備! 照準固定!!」

「俺達は防衛線だ。相手の攻撃は全て俺達で受け止める。後ろに漏らしたりでもしたら皆お陀仏だ。だが安心しろ! このリーザスの青い壁ある限り、敗退の二文字はねえぞ!!」

コルドバは防衛にこそ真価を發揮する男。今回の作戦は、自身の長所とカスタム四魔女の遠距離攻撃の人数を最大限に活かすために、コルドバ達前衛は街の入り口で進軍をやめ守りに徹する。そして本命は少数精銳のリーザス軍解放部隊というものだった。

「集団詠唱始め！ 第一隊は業火炎破！ 第二隊は氷雪吹雪準備！」

集団詠唱によつてラジール郊外に火が灯る。魔法陣から湧き上がる灯りに照らされ、待機した兵士たちの姿が今顕になった。

「いくぜ、開戦だああああああああああ!!!」

「チューリップ部隊！ 一斉に、撃てえ!!!」

撃鉄と共に、静寂が撃ち抜かれた。いざ、開戦。

ラジール駐屯兵の数はリーザス洗脳軍四千、魔物兵二千、ヘルマン兵千。対するカスタム防衛軍改めリーザス解放軍はカスタム兵千、逃げ延びたラジール近衛兵三百。数値のみならば圧倒的に不利。だがコルドバは長年の経験で、魔物兵は進軍部隊としては非常に有効ではあるが、混戦や防衛戦ではその力が殆ど發揮されないと見た。更にこれまでのリーザス洗脳軍の進行は日の出ている内に行われたものが殆どだった。志津香か

らの情報を鑑みて、リーザス軍を洗脳しているのが人間だとすれば、夜間は休養と取っている可能性が高い。例え洗脳者が万全の体勢だったとしても、四千の兵を直に防衛線につかせることは難しい筈だ。

つまり、ヘルマン兵千さえ突破し、リーザス軍を解放すれば突破口は開ける。そしてこちらにはヘルマンにない強力な魔法部隊と兵器部隊が存在する。コルドバはそこに賭けた。

「うおおおおおおおおお!!」

コルドバの巨体から繰り広げられる怒涛の破壊力に、ヘルマン兵はその重鎧ごと捻り潰される。今のところ魔物兵は疎らに見えるが、彼らの凶体は魔法のいい的となっている。更にリーザス洗脳軍に至ってはまだ姿も見せていない。

「今ならいけるぞ! ミリ! 解放部隊、司令部に突っ込め!! 俺達は敵を出来るだけ惹きつけるんだ!!」

「あいよ! 行くよ皆。トマトもしっかり付いて来な!」

「コルドバさん私頑張ってきますよ。」

「おう! 漢見せてやれ!!」

「私、女ですけどね……。」

完璧と言っても差し支えないほど問題なく進んでいる。チューリップ三号の攻撃力は想定以上のものを見せているし、志津香率いる魔法部隊もかなりの練度だ。このままリーザス軍の洗脳が解かれれば数でも圧倒。最早負ける余地がない。この想定外の余裕に、防衛だけじゃなく、侵攻作戦もたまにはいいなと呑気な考えが顔を見せ始めた。しかし、戦は生き物。常に変化し続けるものなのだ。

「総大将！ ヘルマンの援軍がもう既にこの付近まで進軍しています!!」

「なんだとお!?!」

斥候部隊の一人が伝えた報は、正しく決定的な一打だった。

今までのヘルマン軍による侵攻よりも明らかにペースが早い。完全に予想外だ。司令官のヘンダーソンが戻るまでは早くとも二日掛かると踏んでいたのだが想定外の早さだ。このままではリーザス軍を解放する前に押し切られるかもしれない。

「だがここでの撤退はリーザス軍解放のチャンスを不意にするって事だ…。無い知恵搾り出してみせろコルドバ…っ!」

そう自分に叱咤してみるが、現状取れる手段は、直ぐにでもミリ達を引き帰らせカス

タムまで再び戻るか、それともミリ達を信じて守り続けるか。侵攻作戦に不慣れなコルドバにはこの判断はなかなか難しい物だった。頭を抱えている間にも、刻々とヘルマン軍は近づいてくる。

と、これまで以上の雄叫びがラジュールに響き渡る。異様な規模の援軍だ。五百や千では無い。少なくとも三千はいる。援軍というよりは一個旅団規模といつても差し支えないほどの兵がドンドン近づいている。

だが、兵の数など問題ではなかった。その中央で先駆けを務める男の姿。それこそがこの戦の勝敗を決定づける存在であった。

「派手にやってくれたではないか、リーザスの青い壁はどこかな？ このトーマ・リップトンが相手になってやろう！」

人類最強の男、ヘルマン第三軍将軍トーマ・リップトン。リーザス解放軍にとって最悪の一手である。この男の前では歴戦の戦士コルドバですら有象無象として扱われかねないほど、隔絶した強さがある。身長220cm 体重150kg。全身に纏った鎧と特徴的な赤髪によって強調されたその巨躯は、周囲の兵士をひと睨みで凄ませる。

「撤退しかねえなこりゃ。あのじいさんに見つかる前にさっさとミリ達に知らせねえ

と…。」

トーマ・リップトンが敵とあつてはどうしようもない。そういう男なのだ。だがコルドバは確信した。ここにリーザス軍を操つてゐるのは間違いない。トーマ程の人物が最速で援軍に來たということは、ここにそれだけの価値があるということだ。次こそは必ずと自身に誓ひ、撤退準備を始めたその時、トーマの足が止まつた。

獲物を探すトーマの前に、どこからか男が一人立ち塞がつてゐる。解放軍の者ではない。特徴的な緑の鎧が眩く光る。唐突に現れた男にトーマの歩みが止まり、つられて援軍の兵もランスを囲むように立ち止まる。一人の男が千を超える軍隊を圧えるその光景は、何物よりも素晴らしい名画のようだった。

「何が人類最強だ。この俺様を差し置いて人類最強を名乗るなんて百万年早い。俺様に殺されることを、光榮に思え!!」

あいつがククルの言つていた…。あのトーマにタイムマン張る程の人物。間違いない！ あいつこそ、このリーザスを解放する英雄、人類を導く者、ランス!!!

第二十一話

リーザス奪還編

第十二幕

今、英雄ランスが歴史の舞台上に立ち上がった。舞台は自由都市が一つ、ラジール。相対する役者は人類最強の男、トーマ・リプトン。

「肉達磨風情が人類最強を名乗るとは無礼千万。このランス様に有難く殺されな。」

その様子はまるで象と蟻。一般的な身長と体格のランスだが、かのトーマ・リプトンの前では遠近感覚が狂う程。傍から見ればランスの行動は無謀過ぎる。

「わしに向かつてそれだけ啖呵を切るとは。例え相手の力量すら測れない愚か者だとしても、その俠気は讃えてやろう。」

トーマの一声だけで周囲のリーザス解放軍は震え上がる。しかしランスは崩れない。

「へっ、でかい図体に胡座かいてるだけのお前と俺様じゃ全然違うんだよっ！」

それどころか、敵陣ど真ん中だというのに、その胴体に勇み斬りかかったのだ。

「やりやがった！　ほんとに挑んでいきやがった！」

トーマが誇る人類最強は伊達ではない。トーマ操る人一人など軽く吹き飛ばす巨大な鉄球は、どのような手段を使っても防ぎようがない暴力の権化。体格に優れたコルドバであっても、その鉄球の一撃で伸されかねない。1:1を挑むなど自殺行為でしか無い

のだ。

愚直なランスの一闪は、甲高い金属音を上げ、トーマの持つ鉄球の鎖に簡単に防がれた。トーマの強みは鉄球の一撃だけではない。その鎖を使った相手をいなす防御技術こそが彼の真の強みである。それ故に老齢になるまで戦場に立つことが出来たのだ。

「なかなか悪くないな。そのちさい肉体でようこれだけの力が出せるわ。」

ランスは我武者羅に片手で剣を振り回す。一見雑で隙だらけだが、良い具合に相手を翻弄し、鉄球という性質上大振りが必要とするトーマの攻撃をさせまいとしていた。だが、ランスの馬鹿力を持つてもトーマの大鎧を通せない。只鎧を砕くだけなら簡単かもしれないが、トーマ自身も凶体に任せているのではなく、鎖でランスの攻撃を上手くあしらっている。何度攻撃してやった相手を封じているランスと、一撃入れればそれだけで片がつくトーマ。いくらなんでもこのままではランスに勝ち目がない。

「思ったよりも硬いな…。くそつ、人間に負けてちや魔人には勝てねえんだ！　ランスアタアツク!!」

痺れを切らしたランスは、ランスの十八番である必殺技ランスアタツクを大振りの上段から繰り広げた。剣技能Lv2以上が放つことが出来る必殺技、その中でもランスオリジナルのこの技は範囲威力に優れた強力なもの。大振りの貯めからのこの技では、流石のトーマも無傷で防ぐことは出来ないだろう。しかし、この状況でのランスアタツク

は今まで押さえ込んでいたトーマの鉄球を解放することと同義である。

「馬鹿者が、そのような大振りが仕合で通用すると思うか！」

彼の者老成持重成り。その隙を歴戦のトーマは見逃さなかった。ぐいと鎖を持つ左手を引き、鉄球がぐわんと前に飛び出たところを右手で鎖の付け根を抑える。遠心力を得た鉄球は急速にその速度を増し、ランスの横腹を狙った。空中のランスにはこの攻撃は避けられない。超過重の鉄球とは思えない早業だ。

「ちっ、これでどうだっ！」

ランスアタックとトーマの鉄球が激突した。刹那、昼夜が逆転したのかと思うほどの火花が散り、視界が真白に染まる……………。

「なかなか派手じゃのー。わしもあのランスアタックとかいうのやってみたいのじゃ。」

「ん〜。それにしてもあの男、このままじゃデカブツに殺されちゃうぞ？ いいのか？ あいつがカオスを抜ける唯一の人間じゃないのか。」

その仕合を呑気に眺めている者達がいた。魔人サテラと丸い者ククルである。楽しそうなくくルに対してサテラはぶすつと不満を隠さずに不貞腐れている。それもその

筈、サテラはノスにククルの護衛兼見張りを命ぜられ、そのククルがわざわざ人間の下らない争いを見たいが為にゴーレム作成を中断してリーザス城から遠く離れたラジュールまで来たのだ。

しかも彼女達の足元にはピンクの髪がつんつんと飛び出たグルグルに布で巻かれた人間らしきものが横たえている。ククル考案でランスを確実にラジュールに連れてくるためにランスの奴隷であるシイルを生け捕りにしたのだ。全くもってこの生首、極悪非道である。勿論実行者はサテラであつてククルは何もしていない。これでランスがトーマに殺されてしまったら、どれ程ノスから怒られることか……。ぶるる……………。

「心配はいらんよ。ランスは負けん。」

「随分と買つてるんだな。」

聞いた限りではランスという男は只の人間。特別な能力も、優れた才能も持ち合わせていない。何故こんなにもククルはランスを信頼してるのだろうか。

「あー、まあそれもあるが……。サテラ、一対一の殺し合いに勝つには何が必要だと思ふ？」

「そうだな。力と知恵、それと経験かな。」

ある程度以上の力差があればまず戦いにすらならない。同じ力量の相手ならば、経験と知恵が勝敗を分ける。実に単純なことだ。

「うむ。単純な力も重要だが知略も必要だ。相手の状態や環境を知ることが勝利につながる。更に経験があれば知恵をカバー出来る。だが当たり前故に忘れてしまう条件もある。それは何が何でも勝つという精神じゃ。」

何を言うかと思えば、実に人間らしい考えだ。とサテラは魔人故に思わざるを得なかった。

「精神論なんかで人間はサテラには勝てないぞ。」

「そりゃそうじゃ。お前は人間に容赦ないしのお。だが、ほれ見てみよ。あれが答えじゃ。」

視界が晴れた先では未だランスとトーマが対峙していた。しかし、片やランスは膝をつき、トーマは余裕の表情だ。

「ようやったと褒めてやろう、小僧。だがわしと戦うには少々経験不足だな。後十年待てば一介の戦士になれるじやろう。」

激突したランスアタックと鉄球。ランスアタックであつてもその鉄球を破ることは出来なかつた。ランスはしたたかに腹を鉄球に打ち付けられ、あわや瀕死の体である。

「ありやまずいな…。やっぱいくらなんでもトーマの爺と一騎打ちなんて無理だ…。」

コルドバは思案する。ランスは今ヘルマン軍に囲まれている。そこから救い出すには一点直下で突っ切るしか無い。だがそれには兵力が圧倒的に足りない。このまま突っ込んででも犬死にしかない。誰でもいい、手が空いてるものはいないのか。

「大将！ リーザス軍の洗脳が解けました!! 反撃のチャンスです!!」

そう。兵力ならば、ある。この場には四千ものリーザス兵がいるのだから。視界に入ってきたのは懐かしい黒鎧を来た今だ衰えを知らない老骨。

「バーン、苦勞をかけた…。これより我らリーザス軍、国を取り戻すために心骨注ぎ込もうぞ。」

リーザス黒の將軍にしてリーザスを代表する総指揮役。その者の名はバレス・プロヴァンス。

「バレスのおっちゃん!? おっしやあああグツトタイミングだ！ ランスを救うぞ！」

黒の將軍を預かるリーザス総大将の名は伊達ではない。まさかバレス將軍がこの地の洗脳軍にいようとは。これならば覆せる。ならば善は急げだ。ヘルマン軍がランスとトーマの対決に集中している今が勝機。バレス將軍と共に、洗脳されていたリーザス軍がヘルマン軍に向かって流れ込む。再び勝利の行方は混沌へと帰した。

リーザス軍が洗脳から解けたその時、ランスが駆けた。トーマの懐を狙い、一気に距離を詰める。血迷ったかとトーマは思ったが、その目は勝利を確信した光を灯していた。

「面白い!! 最後の賭けというわけか、来い若造!!」

トーマは油断なく構える。鎖による防御、鉄球による攻撃。ランスが何をしようと立ち向かえる自身と経験がトーマにはあつた。さあ己の力を見せてみよ!

ランスはその手の剣を、投げた。トーマの下半身を狙って全力投球したのだ。これにはトーマも驚嘆するが、所詮苦し紛れの攻撃か、この程度の攻撃ではトーマに手傷すら負わせられない。

「甘いな、若造。この程度の小細工が通用すると思つたか!」

鎖をピンと伸ばし、剣先を地面に逸らす。たたそれだけで、ランスの剣はトーマに防がれた。剣を手放しては何も出来ぬ。これが最後っ屁だったということか。わしに立ち向かってきた久々の漢だったのに残念だ、とトーマが油断した次の瞬間。トーマの鎖が突如としてぐんと地面に引かれた。何事かと現実に戻った時、その視界は塞がれていた。

鎧をつけた男とは思えないほどの素早さでランスはトーマに迫り、トーマの鎖を足場

にして跳んだ。剣に気を取られていたトーマは突然の重さに前のめりに倒れ始め、そこにランスの顔面飛び蹴りがブチ当たる。トーマの巨体がゆつくりと傾き、その鉄球が空に放り出される……。そのままランスは瞬時に落ちた剣をその手に握り、トーマの首元に突きつけた。

その場にいた誰もが、予想外の光景に釘付けになった。闘志を漲らせヘルマン軍に突撃を仕掛けるリーザス兵も、リーザス兵の造反に驚き慌てるヘルマン兵も、勝利を確信し高揚するカスタム兵も。只その二人の戦闘に魅入られた。

「俺様の勝利だっ！」

ラジールに、肉を切る音が、静かに木霊した。

第二十二話

リーザス奪還編

第十三幕

「トーマが、師匠が死んだ…だと?」

ラジール攻防から二日、トーマ戦没の報がリーザス城のパットン皇子に届いた。トーマはヘルマン軍、いやこの大陸の軍人の象徴たる存在。パットンの師匠でもあるそのトーマ敗北を、彼はにわかには信じられなかった。思わず前のめりになり、斥候に再度問い詰める。

「はっ…、第三軍將軍トーマ・リプトンはラジールにてリーザス奪還を目論むカスタム軍と戦闘。突如現れたランスと名乗るカスタム軍協力者と一騎打ちにて敗北。同時にリーザス軍の洗脳が解け、死体の確認は出来ませんでした。トーマ將軍は恐らく死んだものであるかと…。」

「そうか…。トーマ、お前はやっぱり…。」

悲壮感漂う謁見の間にひっそりと佇む女が一人。彼女は黒髪のカラー、ハンティ。何百年もの時をヘルマンで過ごした伝説のカラー*である。ミスナルジを支えるものとして、戦死したトーマとは旧知の仲であった。

※ 人間にそっくりな別種の生物 額にクリスタルが存在する女性体のみ種族

わかりやすく考えるとエルフっばい何かである 呪術に優れていることでも有名

彼の死に、悲しみは多分にある。だが、そのための涙はリーザスに来る前に流したのだ。

「そ、そんな馬鹿な…。それでカスタム軍は今どうなっている。」

「ラジール解放の勢いのままにレッドの街を襲撃、守備隊司令官フレッチャー・モーデルは単騎で最後までリーザス軍へ立ち向かい、壮絶な戦死を迎えたとのことです。」

既に状況は突然訪れた嵐に完全に転覆された。リーザス全土を抑え、あわや自由都市もとゆうゆう侵略を開始したと思えば、いつの間にかリーザス洗脳軍は造反。カスタム軍の予想以上の戦力。トーマ・リプトンの戦死。いったい何が悪かったというのか。このために募った優れた兵士達。用意周到な襲撃。迅速なリーザス統括。更には魔人によるバックアップ。一体これで不可能ならば何を持って可能と呼べるのか！

ふつつつと怒りが湧いてくる。何故だ。何故俺はこんなにも上手くいかない！

「ヘルマン本国から援軍はまだ来ないのかっ!？」

パットン是我慢ができる穏やかな男ではない。その怒気を隠さず顔を膨張させ、ぐわつと立ち上がり周囲に悪態を巻き散らす。

「パットン…、そんなもん来やしないよ。期待しても無駄さ。」

「くそっ！ サウス防衛のミネバ隊長をリーザスの守備に回せ！ サウスは敵に渡しても構わん！」

こうなればリーザス城で解放軍を打ち砕いてくれる！ ふざけるんじゃないやねえ、なんで俺ばっかり…っ！！

「まずいわねえ、まさかトーマちゃんがやられちゃうだなんて…。それにこのままじゃミネバが実質この頂点。もしかしてわたし達、詰みかしら？」

リーザス城に留まっていたヘンダーソンにも解放軍に只ならぬ雰囲気を感じ取った。この戦の流れは良くない。相手側の戦略だとかそういうレベルの勢いではないのだ。確実に裏で誰かが手を貸したのだ。そう、このわたしのように美しく強い誰かを！

「何故私に話を振るんだ…。」

一方アイゼルも今窮地に立たされていた。それはトーマの戦死などではない。アイゼルにとって人間風情のことなどどうでも良い。正直なところヘルマンが勝とうが負

けようがもう関係ないのだ。

問題は横でくねりくねりといやらしく踊る吐瀉物だ。ラジールからの報を聞いてからヘンダーソンは何故か異様にアイゼルに迫り続けているのだ。それは頼りになる上司が死んだことによる不安をいじらしく表した乙女行動だったのだが、如何せん媒体が悪い。

「いやんアイゼルちゃん恥ずかしがらなくてもいいのよ。」

「やめろ！ ナチュラルに腕を組んでくるな!!」

「おーいつの間にか随分と仲良くなったもんじゃのおー。」

「お似合いのカップルだな。ぷぷぷ…。」

ひよっこり顔を出した、というか顔しか無いそれを出したのはククルとサテラ。どうやら上手くりーザス解放軍に見つからずに無事帰還したようだ。心なしかシーザーとイシスが活き活きとしている。サテラに傷を負わせなかったからだろうか。両手を腰に、なかなかどうして感情豊かなゴーレムである。

「良いだろう。お前達全員を洗脳してこのオカマと強制的に結ばせてやる…!!!」

「なっ、ななななんと悪趣味な！」

なんて恐ろしい発想だろうか。とても美しさを誇る魔人の台詞とは思えない！

「サテラサマ オカマ カラ マモル！」

先ほどまでの余裕が嘘のようにシーザーとイシスがサテラを庇うようにがっしり仁王立ちである。そう、ラジール往来の道中などではない。ここが彼らの正念場だったのだ。

「結果として、わたしだけが傷つけられているように感じるのは気のせいかしら…。」

「丁度良い、皆集まっているな。」

「ようやつと来たか。遅いぞノス。」

やはり、ノスが来ると空気が変わる。その重厚な姿には空間凍らせるだけの迫力があ
るのだ。これにはふざけていたアイゼルとサテラも着を正す。

「ノス殿、我らに話とは一体。もう既にカオスを抜くものは判明し、魔人が敵だということも奴に知らしめました。これでどう転んでもカオスを壊す算段は付きましたよ。それに出来れば私が戦闘に出てはいけない理由もお聞かせ願いたいですな。」

ククルとノスによると、カオスの封印を解くことが出来るのはランスという男。そのランスには既に策を巡らせ、ほぼ確実にリーザス上へ封印解きに来るとのこと。更にカ

オスを叩き折るのは一人でも不可能ではない、とは実際にカオスを見たことのあるノスの意見。正直な所、ここにとどまり続ける事に意義はない。今更話などすることがあるだろうか。それにここ数日何故かアイゼルは外出禁止の命をノスから受けていた子供か。

「あく、そりやわしの案じゃ。アイゼル安心しろ、御主は強い。だが何にしても例外はある。理由は言えないが御主のためなのじゃ。信じてくれ。」

「言えない理由で信用しろとでも？ 元魔王という肩書だけの貴方を？」

「肩書だけとは酷いことを言うのう。この数日でわしと御主の中は互いの肩書だけではなくなつたと思つたのじゃが……。」

目を逸し、口を尖らせ、ちよつといじけてみせるククル。なかなか、可愛いかもしれない。首から下を隠せば。

「ふん。まあ……、いいだろう。」

にひひと笑うククル。思つたよりもこの魔人。ちよろいな。

「うむ。まずは皆ここまでよう働いてくれた。」

やつと話したしたと思いきや、即座にサテラが手を挙げる。だから子供か。

「サテラは働いたけどアイゼルはなんもしてないぞー。」

「空気読まんか己は！」

「確かにカオスは既に壊したも同然だ。わしはこの国でホーネット派の息がよりかかるよう尽力を続ける。御主らにはホーネット様にこれまでの軌跡を伝えてほしい。」

「ん？ それならサテラだけで十分じゃないか？ アイゼルなんて連れてても自慢ばかりでなんの役にも立たないからな。」

「この……っ!!! ふっ、確かに一人で十分というものには賛成だ。勿論私が！ホーネット様の下へ参上する場合だがな。こんな学のない餓鬼一人では役に立たまいと心配するノス殿のお気持ちもわからんではないがね。」

「プププププ、ヒッ、ヒーっ！」

餓鬼と呼ばれてカツとなるサテラ……。命令によるものだったというに、能無し扱いにプライドを傷つけられ挑発するアイゼル……。神妙な表情で語ろうとしたまま固まったノス……。どうしようもなく状況が面白く笑い転げるククル……。

コホン。

「……アイゼルが言った通り、このリーザスに留まるのは俺一人で十分だ。それよりもホーネット様の近くで役に立てるよう尽力しろということだ。」

「ふむ、ならばお言葉に甘えよう。何かホーネット様に伝えることは？」

「そうだな…。済まなかった、と。」

「…不思議なことを言う。むしろノス殿の功労だろうに。」

「それじゃあ皆。ここでお別れね。」

「シーザー、イシス、ホーネット様にさつさと会いに行くぞ。ホーネット様はサテラがいなくてつらい思いをしているに違いない。」

「うむ、達者でな。わしはノスと共にここに留まるのじゃ。いつかまた…の。」

「また皆で会えることを祈りましょう！ それじゃあ皆!! 解散ね!!!」

再び魔人たちはバラバラに動く。それぞれの目的のために。アイゼルは自身が認め
る強者、ホーネットのために。サテラは自身が親しむ幼馴染、同じくホーネットのため
に。ノスは自身が敬する主君、魔王ジルのために。ククルは自身が愛するケイプリスと
自分自身のために。ヘンダーソンは自身の美を更なる高みへと昇華するために!!!

「ん？ なんじゃ先の会話に凄い違和感を覚えるのじゃが…。はて…?」

第二十三話

リーザス奪還編

第十四幕

「さて、遂にここまで来たわけなのじゃが。」

ラジールでリーザス軍の洗脳を解き、戦力を急増させたリーザス解放軍は今、ノースの街に駐留していた。リーザス城は既に目と鼻の先だ。だが、リーザス城こそが最後にして最大の問題なのだ。

「問題はリーザス城をどうやって手に入れるかだな……。」

新たに軍師としての位置に就いたバレス指導の下、皆それぞれのような方法を使ってリーザス城を攻略するか思案していた。早朝から始めた会議だったが、既に何も目新しい案も無く正午を回ってしまったところだ。毎日のように見回りを行いリーザスに明るいコルドバも必死に考えるが、どうにもこういう事は向いてないようだ。今ならデコで玉子焼きが出来るだろう。

「あの城は硬いわ食料はあるわでどうしようもないからな。」

ランスとしてもこのリーザス城の堅牢さは歯がゆい。さっさとシイルを救い出して散々エッチしたいというに。まだ新しく手に入れたシイルの服の謎機能も殆ど使えていないのだ。

「なんか意外……。ランスのことだから何も考えずに突撃だなんて言うと思ったのに。」
「あの阿呆でも真面目になることがあるのね……。」

なんだろう……。ちよつとシルちゃんを羨ましい。私が攫われても、ランスはこんな風に助けに来てくれるのかな……。はっ、いけないいけない。今は大事なときなのよ！ 感傷的になつたらダメよ！ 志津香がこつち見て溜息ついてるじゃない！

それにしても、ラジュールでのランスの活躍見たかつたなあ。

どんな時でも乙女なマリア・カスタードであった。ありえたかもしれない平行世界で、彼女が囿として使われたという残酷な事実は知らないほうが良さそうである。

「バレスのおつちゃん、いい作戦か何か思いつかないのか？」

ここはやはり年の功。バレス將軍本人に何か案はないのだろうか。

「うむ。正直わしとしてもリーザス城を攻めることになるとは……。」

これにはコルドバも同意と大きく頷く。なにせリーザス城は正に鉄壁。軍人であれば、これは絶対落ちないだろうと考えてしまうほどなのだから。

「ガハハ！ 素晴らしい案を考えたぞ。」

「何っ!? 本当かつ!?」

と、ここで声を上げたのはまたしてもランスである。リーザス軍の洗脳が解かれた時、彼らの目に一番最初に飛び込んだのは人類最強の男トーマ・リプトンに手に持つ剣

を突きつけたランスの姿だった。神話の一節のようなその光景にリーザス軍が歓喜したのは言うまでもない。建国の歴史の再来だの人類統一の英雄だの有る事無い事歯止め無く広がり、今やランスはリーザス解放軍に無くてはならない存在である。

「その名もゴールデンランス作戦！ どうしても入れない場所があるなら相手入れてもらう。降伏を偽ってゴールデンハニーを奴らに献上するのだ。そしてその中に俺様と優秀な女の子が入り、中に侵入次第暴れて中から門を開ける。どうだ！ グットな作戦だろう!？」

つまりはトロイの木馬だ。ゴールデンハニーはその身体が金で出来ているため、献上品としては文句の言い様がない。さらにゴールデンハニーはかなり大きいのだ。十人程であれば、外見からは全くわからずに仕込むことが可能である。

「それは…、無理じゃろうな。」

だがこれにバレスは難色を示した。

「んだとく？ 俺様の考えた作戦だぞ。絶対成功する。」

何がそこまで自身を持たせているのかはわからないが、頭ごなしに否定されては腹が立つというもの。理由がわからなければ納得なぞ出来ない。

「我らはトーマ將軍を殺してしまったのだ。相手側のトップであり、英雄であった男をな。それに最悪時間をかけてチューリップ3号で押し切ることが出来ればリーザス

城を落とすことは可能だ。この状況での降伏宣言に意味は無いじやろう。」

確実に負ける要素のない敵に対しての降伏。そこにある意味は罨意外の何者でもない。いくら相手が浮かれた皇子だからといって流石にそれがまかり通る程世の中甘くはないというものだ。

「むむむ…。しかしそれだと時間がかかってしまうではないか…。」

「だからいい案が無いか模索してるんでしょ。もうしつかりしてよランス。前にリーザス城に侵入したことあるじゃない…。」

そう、ランスはとある事件を解決するために過去リーザス城へ親友した経験がある。ああ、あの時侵入してきたのがこいつじゃなければ…と悲しまずにはいられないかなみであった。嫌な事件だった。

「あれ？ 俺様確かにリーザス城に前潜入したな。どうやって入ったんだっけか。確かあの時侵入は手形かなんか使ったんだな。それで地下から脱出して…。」

「…ん？」

何かその時使ったような…。そうそう、リーザス軍に対して正面から脱出するわけにもいかずどうにかしてバレずに出れないかと手段を探して…

バツとランスとかなみは同時に顔を合わせる。何故忘れていたのか。あるじゃないか！ 簡単にリーザスに侵入できて極僅かしかその情報を知らない経路が！

「排水路っ!!!」

「というわけでやって来たぞリーザス公園。」

リーザス城下街の平凡な公園。なんとこんなところがリーザス城に続いているとはよもやリーザス国民も誰一人知るまい。

「ほんとにここからリーザス城に繋がっているの?」

リーザス城に詳しく無い志津香としては半信半疑である。今回リーザス潜入に選ばれたメンバーはランス、志津香、かなみ、ミリ、レイラ*。マリアはチューリップ三号の運用のため今回も待機だ。

※ レイラ・グレクニー リーザス軍親衛隊長の武人 女だてらに幼少から剣を握り、その腕前はリーザス軍N.O. 2と言われる程 原作ではアイゼルに捕らわれていたが、今作ではラジールにいた

「ええ、それは間違いないわ。リーザスでも限られた人しか知らない極秘事項よ。」

さらに言えば、恐らくヘルマン軍人は知らないであろう絶好のポイントである。しかもこの排水路、直接地下牢に続いている。囚われの身のリア含む王族達を助けるという意味でも最高の方法だ。

「よし、さつきと行くぞ。とりや。」

がしやんと排水口の鍵をうまい具合に壊す。緊急時であるからして仕方ない。珍しく率先して面倒事を引き受けるランス。きつと全員俺様が頼りになると惚れなおしているに違いないと下心満載なのは言うまでもない。

「いい、私達の仕事はリーザス正門の解錠と人質の救出よ。女の子がいても直ぐに手を出したりしないでね。」

「ふん。わかってるわ。ただし、リーザス城を取り返したら、その礼として全ての女の子は……ぐふ、ぐふふ……」

「はあ、なんでこんなのに……。マリアは惚れちゃったのかしら……」

ランスは確かに強いし決断力はあるしそういう面だけ見ればいい男かもしれない。しかしこの性格が全てを駄目になっている。マリアには幸せになってもらいたいし、どうかして目を覚まさせないと……そう心に誓う志津香であった。残念ながら、この問題に今後長い間悩まされ続けるとは流石におもってみなかつただろう。

「しっかしなんで英雄の俺様が又こんな湿っぽい所を通らにやアカンのだ……」

排水口の中はネズミがウロウロと徘徊し、カビ臭い匂いが充満している。道は決して

広くない。縦一人ずつ道なりに進むのがやつとだ。

「わっ、ネズミっ！」

「なんだかなみく。お前忍者の癖にネズミが恐いのか。」

「こういうところにいるネズミと天上とかにいるのは違うの！ 大きさが全然違うの！」

かなみを庇うようだがネズミは意外にも恐ろしい相手である。特に病原体を保有していることが最大の理由である。集団になれば下手な傭兵よりも恐ろしい相手なのだ。

「ちよつとランス！ あんた道わかつてるの!? さつきから適当に進んじやいないでしようね。」

「俺様が信じられないというのか!?!」

「かなみさん。これで本当にリーザス城に向かっているの?」

「え、えくつとお。えへへ。」

ああ、これは駄目ね…。メンバーのかなみに対するイメージがガラガラと崩れていく音がする。やめてっ！ やめてっ!!

「かなみなんか頼つても意味ないぞ。俺様に全て任せろっ。シイルもリーザス城もついでにリアも全部まとめて俺様が救ってやる。」

どんと胸を張るランス。こうなつてはランスに任せるしか無い。もうどうにでもな

れと言ったところか。

「へえ、そいつは楽しみだね。」

「あん？　誰かなんか言ったか？」

排水路に入つて未だ数分。先頭を歩くランスの先方、一寸先の暗闇の中から、すつと筋骨隆々の女が現れた。誰だ此奴、なんでこんな所に……？

「あたしの名前はミネバ・マーダレット。人類最強の女だよ、ぼーや。」

ミネバはこの状況に驚くこともなく、静かに言葉を紡ぐ。ミネバの正体を理解したかなみとレイラはその事実には震え上がった。ミネバ・マーダレット！　ヘルマン第三軍隊長、暴虐ミネバ！

「ランス！　危ない!!」

「？　こんなババアの何が危ないんだ。大体人類最強はこのランス様だぞ阿呆。」

何を騒いでいやがると後ろの二人を一瞥する。暗闇でよく見えないが、どちらも尋常じゃないぐらい焦っているのはわかった。このババアが一体何だと言うんだ。

「さあ、それは今から味わってみるんだね。ぼーや。」

いつの間にかその手にスイッチが握られている。ランスがそう認識した瞬間、排水路内に爆風が轟いた。

第二十四話

リーザス奪還編

第十五幕

「おわっ!? なんだなんだ!?!」

風と音の暴力がランス達後方から駆け抜ける。

「出口が…!?!」

爆発が起こったのはランス達の後方。排水路の出入口となる方角だった。既に排水路は瓦礫の山となり、完全に退路が絶たれてしまった。想定外の出来事に、ランス達はパニックになる。特に最後尾のレイラには吹き飛んできた瓦礫が襲いかかり、かなり危険な状態だ。

「それと、もう一つ。」

焦り慌てるランス達と対極的に、ミネバはあくまで散歩にでも出かけに来たかのように自然に振る舞う。再びミネバがベルトの中着から取り出したのはまたしても別のスイッチだ。

「そうは行くかつ!」

いくら楽観的思考のランスであっても、あのスイッチを押させる訳にはいかない。直に理解した。突然の襲撃に何が何だか分からないが、こんな所で死ぬわけにはいかない。

のだ。

「動くんじゃないよっ！」

「ランスっ！ ダメよ!!」

だが、もう遅い。既にランス達は完全にミネバの罠にかかってしまっているのだ。そのままの勢いでミネバにとっかかるランスをかなみが止める。

「いいかい、ぼーや。人の話を聞くときは大人しくしてるんだ。このスイッチは丁度お前たちの上に設置されたぶちハニーの爆破スイッチだよ。どういう意味がわかるかい?」

「人質ってこと…? いったい何が目的なの?」

解せない。全員皆殺しにするなら最初から全て爆発させてしまえばいい。そもそも相手が一人だけなのも理解できない。万が一にも考えたバレス達本隊に対する保険だろうか。

ミネバはそんな志津香の疑問の声を全く意に介さず話を続けた。どうやらランス以外は眼中にないようだ。

「ぼーや、あんたがトーマ・リプトンを倒したつてのは本当かい?」

「そうだ。俺様こそ真の最強、ランス様だ。糞ババア風情が俺様と会話ができることを光栄に思え。」

ランスの答えにミネバは満足そうに頷くと、指の関節を押さえポキリと鳴らす。

「そうかいそうかい。それじゃあ一つ、人類最強を賭けて仕合でもしてみないかい？」
「断る！ 俺様は今忙しいんだ。ババアに構っている暇など無い。」

相変わらずミネバはランスにのみ興味を示しているようだ。ここは一つ不意打ちで魔法を撃つか…。悪いけど、こつちも相手に情をかけてる余裕はない。

「下手な小細工はやめな雌餓鬼！ 一歩でもそこから動いてみな。一瞬で全員お陀仏だよ！」

志津香が魔法をぼそぼそと最小限の音量で唱え始めた瞬間、ミネバの纏う空気が一変。その気迫に呼吸が止まりそうになる。

「志津香さん、ここは素直に聞いたほうが…」

「でもレイラさん…。その傷を放置するのはマズイわ…。」

「私は大丈夫。それでも親衛隊隊長なんですから。」

レイラの傷は暗闇でよく見えないが、生々しい鉄臭さが鼻に届いている。相当な出血をしているのは確かだ。肝心の傷を治すための世色癌を入れた小袋は爆風でどこかに飛んでいってしまったようだ。

「無事にここを通りたければ、あたしを倒していくんだね。ぼーや。それとも何かい。あたしを倒せる自信がないのかい？」

いったい何が目的かと思いきや、この状況で一對一とは……。益々持つて分らない。「ムカッ。俺様に喧嘩を売ったことを後悔しろっ！」

売られた喧嘩は絶対に買う。相手が誰だろうとこの俺様に立ち向かった奴は倒す。そう意気込んでランスは腰のリーザス聖剣を力いっぱい振り上げる。が、瞬間ガキンと甲高い金属音と共に、思わず剣を落としてしまいかねない程の衝撃が腕を襲った。その衝撃の正体はなんてことはない只の壁だ。ここは人一人通れる程度の排水路。端から長剣など振るうことが出来るはずもなかったのだ。

「げっ、ここじゃ狭すぎて剣が振れん！」

「おや、どうしたんだい。ぼーや。来ないならこっちから行くよー！」

対するミネバの両手には既に短剣が構えてある。どうやら爆破といい相当な計画性を持つて行われた襲撃のようだ。ランスの武器を封じ、完膚なきままに叩き潰す気か。攻撃手段を失って焦るランスに、遂にミネバが動き出した。

「そらそらそら！ 防御してるだけかい!？」

「むぐっ、このババアなんて馬鹿力だ。」

巧みな双短剣がランスを襲う。まともに振ることも出来ない長剣で出来るのは防衛くらいなものだ。ミネバの豪腕から繰り出される一方的な攻撃の嵐には流石のランスも耐えかねる。

「それなら突きだ突き！　くらえっ！」

「甘いね、そんなデカイ剣で突きだなんて無意味だよ！」

細剣と違い、長剣では突き 동작がどうしても大振りになる。破れかぶれのランスの一撃は、左手の短剣で剣の腹を弾かれ、脇腹を無防備に晒す。

「ぐわっ、やりやがったな！」

爆発的な瞬発力でランスは身体を捻り隙を隠そうとするが、そこで好機を見逃すミネバではない。右手の短剣の抉るような一閃に、遂にランスに深々と傷をつけた。

「だいぶ息が上がってるようだね。人類最強つてのは眉唾もんかい？　トーマならこの狭い通路でも、もう少しは戦えただろうさ。」

既にランスには身体のおちこちに生傷が刻まれていた。どうしてもランスが攻撃に移ろうとすると、狭い通路が邪魔をする。元来ランスは大振りの攻撃を中心としたスタイルの戦士。この状況では圧倒的不利なのだ。

「畜生。長いのがいけねんだ長いのが………んっ!？」

しかし若くして幾度もの視線をくぐり抜けてきたランスはそれで終わるようなヤワな男ではなかった。そう、短ければいいのだ。長くて使いにくいものがあるならば短く

すればいいのだ。

「わかったぞ！　どりゃああああ!!!」

唐突にランスは左手の長剣を壁に押し付け、右足で思い切り剣の腹を蹴った。

「焼きが回ったかい。目の前に敵がいるつてのに關心しないねえ。」

「そいつはどうかな!?!」

本来想定されていない圧力を掛けられ、リーザス聖剣はバキンと半分に分れた。

「ぎゃあああああああああああああああす!?!」

国宝たるリーザス聖剣を自らへし折るなんて！　己の状況も忘れてレイラは叫ぶ

「流石俺様。知的でクールな作戦で勝利だ！　おりやおりやおりやあああ!!!」

今まで溜め込んだランスの怒号が一気に爆発した。剣先が見えないほどの早さで、縦

横無尽の軌跡がミネバに降り注ぐ。

「やるね！　だけどこれで同じ条件になったつてだけ、まだ勝負は決まっちゃいないよー！」

とは言えミネバはそれだけで倒せる相手ではない。むしろ、これからがランスとミネバの勝負である。

「す、凄い……。」

かなみはあまりに苛烈な戦いに驚嘆した。ラジュールで戦ったトーマ・リプトンは凄まじい強敵だった。圧倒的な力にその技術、何を持ってしても上回る事など出来ないという無言の圧力。そして数々の戦場を乗り越えたという風格が彼にはあった。だがこのミネバ・マーガレットは違う。彼女とランスではその力も 技術も素人目でもそこまですで差が無いように思える。トーマにさえ勝てたランスだ。対等くらいにしか感じられないミネバにはきつと簡単に勝てるだろうと、そう考えていた。しかし、その実ミネバはあのランスに拮抗している。目だ。目が今までの相手とはまるで違う。勝利への執念、いや妄執と言ったほうがいいかも知れないほどの貪欲な渴望がその目に渦巻いているのだ。ランスが斬りつけてミネバに傷を負わせれば、またミネバもランスに一太刀入れる。これこそが、人類最強を決める壮絶な闘いなのだ。

「ちつ、思ったよりも守りがうまいね。ならこれでどうだい！」

お互いに決め手を失い、苛立つミネバはここで仕掛けた。排水路の空間限界まで大きく右手を下から振り上げ、強烈な切り上げを放った。定石ならば、こんな大振りの技は避けて反撃されるのが関の山だ。しかしこの排水路内ではそうもいかない。防御してやり過ぎすしか無いのだ。さらに、ランスの剣は中間で折れた状態である。洋剣にはそ

の重厚さに見合った重さがある。それ故に下段からの攻撃を防ぐ場合、いなすのではなく剣の重みを利用して食い止めるのだ。相手が軽量の短剣ならばそれは尚更。ランスも定石通り弾き返そうと防御するだろう。しかしその手に握る剣の刀身は半分しかない。普段よりも軽量なその半剣では経験との不一致から、否しきれぬ筈もない。ミネバはそこを狙った。

だが、このタイミングにチャンスを見出したのはミネバだけではなかった。ミネバが防御に廻ると考えた切り上げに対して、ランスは驚くべきことに全力で攻勢に転じたのだ。完全に防御を捨てている。

このままであたしの攻撃も通るけどぼーやの攻撃も避けられない！ こいつ!?
本気で相打ちにでもなるつもりか!?

「くっ！ あたしはこんなところで死ぬわけにはいかないんだっ！」

その判断が勝負の明暗を分けた。急遽刃先を防御に転じたミネバの短剣は、全力で振り下ろされたランスの攻撃を防ぎきれなかった。ランスのその一撃はミネバの肩に深々と切り口を刻み、ドクドクと排水路の汚水が鮮やかな朱色に染まる。そのままミネバはがくりと膝を突き、水音が響いた。

ここに雌雄は決した。ミネバの傷は戦闘を継続できるようなものではない。だが負けず劣らずランスの傷もかなり酷い。まさに全身傷だらけ、肩で息をし全身から血が止

めどなく流れている。

「ランス！ トドメを刺して!!」

「待ちな…っ！ まだ爆破スイッチがこっちにはあるんだよ!!」

死ねない！ あたしはまだ死ねないんだよ!! ミネバはここで生を放棄するほど弱くない。まだミネバの手には爆破スイッチという保険があるのだ。

「げ、なんて卑怯なババアだ…。」

「はっ、はっ。あたしに勝ったご褒美だ…。リーザス城の地下へはあっちのほうさ。まだ動くんじゃないよ。あたしの視界からぼーや達が消えたら行くんだね…。」

ミネバは後方の分かれ道の片方を指さす。それが本当か嘘なのかはランス達には分かりようがない。最初からわかっていないのだから関係ないかもしれないが…。

「爆破しないなんて保証がどこにあるのよ!」

ミネバの瞳には未だ闘志がみなぎっていた。かなみの目には傷が癒えでもしたら直に襲いかかってきそうに思えた。信用できるわけがない。

「信用しようがしまいがぼーや達に選択肢は無いんだよ。…ぼーや、あんたは爆破なんかじゃ殺さない。いつか、確実にこのあたしの手で打ち破ってやるよ。人類最強の女として…ね。」

ミネバは只、一心にランスを見つめた。

「何度やろうが、俺様が全て勝つ。」

「ふっ、それじゃあ精々頑張るんだね…。」

そう言い残し、暴風ミネバは肩を抑えながら指を差した通路とは別の道へとゆつくり去って行った。落ち着いた今思えば爆破自体ハツタリだったかもしれない。狙った地下道の通路の上に爆発物を仕掛けるということが可能なのだろうか。

ミネバが見えなくなると、ランスは直にずんずんとミネバが示した通路へと歩き出した。あれだけの戦闘をして疲労感もなにもないのだろうか。

「ちよつとランス酷い怪我よ！ 今日を出直したほうが…。それにあの女がいたってことはヘルマン軍にばれてるかもしれないのよ！」

「志津香のアホンダラ！ リーザス城には俺様に助けられるのを今か今かと待ちかねてる女の子たちがいるんだぞっ!? 戻ってる時間なんざない!!」

「志津香さん。リーザス城には医務室もあります。ヘルマン軍が接収してなければ世色癌もあるかと。それに出口は…。」

そう、退路は既に絶たれた。かなみの記憶が確かならば、世色癌がある。かなみの記憶だが…。レイラとランスの傷を癒やすためにも、今ランス達には進む以外に道はない。

「くそっ、こんな時シイルがいれば回復魔法で一発だつてのに……。俺様の奴隷の癖して魔人なんかには捕まってるんじゃねえ……。」

第二十五話

リーザス奪還編

第十六幕

リーザス城に慌ただしくヘルマン兵が駆けまわる。リーザス解放軍に追い詰められたヘルマン軍は未曾有の大混乱に見舞われていた。数刻細前に解放軍の動きを伝えるために伝令がいつも通り謁見に向かうと、そこには自墮落な王の姿はなく、大量の親衛隊の冷え切った身体が横たえていたのだ。噂が噂を呼び、魔人はパットンの異母妹であるシーラ派についたのだの、リーザス解放軍にはシーラ派の息がかかっているのだ、ヘルマン軍は主導者を失くし既に統制の取れないほどとなっていたのである。

「おい！ パットン様が魔人にやられたらしいぞ！」

「やつぱり人間が魔人を従えるなんて無理なんだ!!」

憶測に制御を奪われ、慌てるヘルマン兵が次々と詰め所から走り去って行った。と。その詰め所の裏手、人のいるはずもない空間からドタドタと大きな音が聞こえてきた。

「がはは！ ほらちゃんと着いたぞ志津香！」

現れたのは全身傷だらけだが、元氣有り余る勇猛な男。更にそのランスに続いて三人もの女が顔を出した。

「レイラさんがこのままじゃ危ないわ。まずは医務室を探さないと…。」

ランスの次はくノ一の少女かなみ。きよろきよろと回りを見回し、情報を得ようとす
るその姿は精良なくの一を連想させるのだが。続いては緑の魔法使い、志津香。なんと
も腑に落ちないといった様子であった。

「本当に道を教えるなんて、何が目的だったのかしら…。」

最後に志津香に手を引かれながら現れたのは軽鎧の女、レイラはヘルマン軍隊長ミネ
バの爆発によってその背に大きな傷を負っていた。今直ぐにでもこの傷をどうにかし
なければレイラに未来は無い。

「これくらい大丈夫よ…。大局を、見失わないで…。」

だがレイラはこの状況で、自身を優先することを良しとしなかった。それは親衛隊隊
長としての矜持か、レイラ・グレクニーとしての願いか。

「…わかりました。ランス、私はこれから城門の解錠に向かうわ。それが終わり次第
世色瘴を見つけて合流する。地下牢獄はその詰め所から下に向かえば直ぐ付く筈
よ。」

この状況で単独で動けるのは仮にもリーザスに仕えるかなみだけ。殆ど動けないレ
イラはここで一人待機するか、ランスにおぶってもらうしか無いわけだが仮にも敵陣内
での待機は危険過ぎる。それに、ランスとしては女が死ぬのは見過せない。必然的に動
けるのはかなみだけなのだ。

「俺様達はリアを探して魔人をぶっ殺しに行く。いいな?」

かなみは頷くと、直に踵を返してリーザス正門へと駆け出した。ここからは時間が勝敗を分ける。魔人に気づかれる前になんとしても魔剣カオスを手に入れなければ。

「よし、さっさと行くぞっ!」

レイラを肩で持ち上げ、どたどたとランス達は地下へと進む。段々と調度品の数が減り、遂に重苦しい鉄製のドアが現れた。この重々しさは間違いなく牢獄であるはずだ。時間はない。鍵など用意できるわけもなく、ランスは渾身の力を込め躊躇せずその扉を蹴り開けた。

「リーザス親衛隊レイラです! 皆様を、助けに来まし………た!」

拷問を受け、苦しんでいるであろう王室の人々を想像していたランス達の目の前に広がったのは、黄金に煌くこの世の栄華を極めた姿だった。天蓋付きのベット。優雅な湖畔の絵画。何十人も職人が命を削り作り上げた荘厳な絨毯などなど。果てにはメイドまで完備である。

「あ、ダーリンおっそーい。リア待ちくたびれちゃった。」

天蓋のベットから顔を出したのは、投獄され拷問を受けていると思われるいたリーザス女王リア。

「な、なんじゃこりやー!」

さしものランスもこれには絶叫。駆け寄るリアも無視してこの状況に只絶句した。何がどうして人質であるリアがこのような環境に置かれているのか。これではそもそもランスがここに来る意味があったのかと色々失いそうである。

「くそっ、ついでとはいえ助けに来た俺様が馬鹿みたいだ…。」

「やーんそんなこと言わないで、ダーリン。」

喜びを隠さず、リアはランスに走り寄るとそのまま抱きついた。この様子ではとても苦渋を飲まされていたとは考えられない。

「だいたいなんだそのダーリンってのは。」

「きや!? ダーリンひどい怪我!」

ランスに抱きついた途端、リアの純白のドレスが一瞬にして赤い染みに染まった。ランスは依然としてミネバとの一騎打ちの傷が癒えていないのだ。この状態でここまでその体力を失わずに來れたこと自体が驚きなのだ。

「もし、そこの方…。」

キラキラと欲が輝く部屋に、ひたむきで清純な声がかかる。酷い言い方だが、この純粹な声色はリーザス城の者ではない。牢獄とは思えない凄まじい絢爛な部屋の隅に、一応牢獄としての名残か何室かの牢屋があり、その中に幾人の修道女が投獄されていた。

声の持ち主はその修道女の一人である。しかし、一体この部屋の状況は何なのだろうか……。何故このような自体に陥ってしまったのか……。

「ん？ おお！ これはなかなか……。」

「わたしはセル・カーチゴルフ、レッドの街の修道女をしています。多少神魔法の心得があります。助けて頂くせめてものお礼に是非お二方の傷を治させて下さい。」

声の主はAL教徒セル・カーチゴルフ。レッド陥落時、ヘルマン軍によつて捕縛され、何故かリアと同じ場所に投獄された真つ直ぐな彼女はこの英雄との出会いを運命と思つたとかなんとか。

「可愛い上に回復要員にもなるのか。これはいい女だ……。お礼なら回復より欲しいものがある。」

「私に叶えられるものでしたら如何様に。」

ランスが女に求めるもの。それは唯一にして絶対。相手が王女だろうが魔王だろうが神だろうが変わらない唯一一つの願い。

「うむ。ずばり！ セックスだ!!」

「それはダメです。神の教えに背きます。」

残念ながら、セルが崇拜するAL教は快楽としての性を禁じているのだ。実はこの前にもハニワ教徒に同様の理由で断られたランス。彼の中で信教のイメージが面倒くさ

いものから邪魔なものに切り替わったのは間違いないだろう。

「どうしてものか!？」

「ダメです。」

「ぐぬぬ…。」

何故か、本当にどうしてかセルには頭が上がらないランスであった。

「さてと、遂にこの時がやってきたのじゃ。」

部屋の外、灯りを消した廊下から牢獄の扉をじつと見つめるものが二人。リーザス陥落の裏の首謀、ククルククルと魔人ノスである。

「長かった。只々、長かった…。」

今ここにカオスの封印、ジル復活の鍵が揃った。リーザスを継ぐ者、リアとランス、リーザス聖武具、カオスを持つもの。満を持して、ノスの悲願が叶う。

「果報者じゃのく。だが、わかっておるのか? ジルがどのような行動に出るとはわからないのじゃ。最悪わしが危惧するようなことになるやもしれんのだぞ。」

「何を今更、全てを投げ捨ててジル様に仕えたこの命。俺はジル様のためを思つてのみ行動するまでよ。」

不安を煽るククルの言葉もなんのその。ノスは溢れんばかりの忠誠心を胸に、再びジ

ルのために全てを注ぐ決意を表した。全くなんともいい人生観をしている。

「あく羨ましいのお。今からでもわしに鞍替えしてもいいんじゃないぞ?」

ほしいのお、ほしいのお。行動を共にしたこの数日間でククルはノスのことを甚く気に入っていつてしまった。これは誠、逸材である。死なせるのは惜しいなんてものじゃあない。このままでは、ノスは知識通りならばランス達に殺されてしまうのだ。とはいつてもノスの行動原理はジル第一である。いったいどうしたものか……。

「ふはは!・もう少しまともな格好になってから言うのだな。見ろ、人間たちが動き始めた! 此方も動くぞ!!」

見ればククルの指定でわざわざレッドから連れてきたセルに治癒を受けたランスが此方に向かってきている。ノスを何とかするための思考は一旦お預け。魔王ジルが、復活するのだ。

「ふははははははは! ぐわっはっはははははははは!!」

「喧しい! 飼い主を心待つわんわんか己は!!」

第二十六話

リーザス奪還編

第十七幕

「おお、本当に出てきたぞ。」

ランスがリーザス聖武具を装備しリーザスの継承者であるリアと並び立つ事で、カオス封印の間へと続く秘密の階段を出現させていた。

「どうせなら二人のキスで道が現れるとかが良かったのに……」

ランスのこととなると王女の鉄仮面もかなぐり捨てて乙女道まっしぐらである。こんな姿を晒してはいるが、リアは何人も無垢なる女性たちを自らの気の向くままに誘拐拷問した過去を持つ女であった。そんなリアを過去に矯正したのがランスだったというわけだ。

「双方が男性であった場合を考えると悲惨ですね。」

話に突っ込んだのはリアの侍女マリス・アマリリス。政治も給仕も管理もツツコミも、全て一人でこなすスーパーパーマンである。

「がはは！　なんだか知らんが裸にならなきゃならんとは恐ろしい罠だ！　うほほ、

かなみはもう少し食べたほうがいいぞ。」

階段を下り続けると、突如道そのものが煌々と輝き放つ長い道が現れた。驚くべきことにその光の道は魔物と服を来た生物を拒むのだという。

「なんでこんな仕組みになってるのよーっ!？」

仕方なしにランス達は服を脱ぐこととなったが、仕える主であるリアの前でかような姿を晒す事に恥辱を禁じ得なかった。

でもリア様のためなのよ…。カオスを手に入れてリーザスを救うため…。ランスが喜んでいるのを見て喜ぶリア様のため…。

「あっ!？」

「ダーリンどうしたの?」

「志津香のやつも連れてくれば良かった…。くそつ、俺様としたことが。」

志津香は投獄された人々とレイラを護衛するために一旦別行動中。ここにいるのはランス、リア、マリス、かなみであった。

「ランス殿…。」

恥を忍んだ裸のかなみとマリス、更にはランスを甲斐甲斐しく愛そうとするリアの目の前でこの台詞とは流石ランス。

目の前にリア様がいるというにこの態度とは。こんな男のために…。だけどこれも

結果としてリア様のため……。リア様のため……。立場は大きく違うが、その胸中はかなみもマリスも同じなのかもしれない。

秘密の階段、続いて光の道を抜けてみれば、ランス達は異様に古臭い傷んだ石の台座のみが鎮座する部屋に辿り着いた。室内は光の道から漏れる明かりに薄暗く照らされ、台座の上にギリリと鈍い輝きが灯る。よくよく見れば、台座には黒い柄の長剣が深々と突き刺さっているようだ。独特な意匠の柄はまるで生き物のように揺らめいている。これが魔人に対抗することの出来る伝説の魔剣、カオス。

「こいつが魔剣カオスカ、さっさと抜いて魔人をぶっ殺しに行くぞ。」

しかしランスはこの雰囲気にも負けず、どこかとその裸体を恥じること無く突き進む。何人も近づけさせまいと感じさせるカオスのオーラなどお構いなしだ。

「ランス殿、待つて下さい。このカオスは伊達に魔剣と呼ばれてはいません。カオスを持つものはその精神を侵され、元の人物とは似ても似つかない怪物になってしまうというのです。ですから――。」

スポツ。

「あ？　なんだって？」

「対策も何も取るのは危険ですと言いたかったのですが…。」

ランスはぶんぶんとカオスを振るう。台座から抜き取るまではオドロオドロしい雰囲気放っていたカオスだが、どうやら特に問題はないように見える。ランスという男はもしかすると別次元の法則に基づいているのか、とマリスは疑わずに入られない。

「流石ダーリン！ 魔剣にも負けないだなんて。」

もしやするとリア様がランスに恋心を抱いたのはこの事実を何らかの形で感じ取ったからなのだろうか…。マリスはこれまでにないほど喜び騒ぐリアと、それに調子を良くして笑うランスの姿を一言も発さずに見続けた。これがリア様の求める未来なのかと…。

「がっ!？」

突然、視界に映るリアとランスの笑顔が歪む。首下を襲う激しい力の奔流に呼吸が止まりそうになる…。

「ランスよ。よくぞ封印を解いてくれた…。礼を言おう」

カオスの取得に喜ぶランス達の前に、再び暴風が吹き荒れた。身長167cmのマリスを軽々と持ち上げ、唐突にランスへ謝辞を述べたは魔人ノス。その身体からは湯気の

ように、もやりと知覚出来るほどの闘気が漲っている。

「てめえはあの時のくそつたれな魔人!? 丁度いい、このカオスで往生させてやる!!」
あの時の恨みをランスは忘れていなかった。いきなり現れて、いきなり負けた。男
ランス、人生始まって以来の屈辱だった。

きつとこいつが魔人の親玉。シイルを攫ったのも此奴に違いない。あの時シイルを
連れた俺様を見て嫉妬したのだ。だからこそあんな不意打ちなんて汚い真似をしてま
で俺様を倒したかったのだ。間違いない。

「この女の命が惜しくはないのか?」

とはいえ今のノスの手にはマリスの命が握られている。マリスはここで失うには惜
しい女だ。ランスにとって気に入った女の命は、魔人一人の命とは比べ物にならない程
重いのだ。

「ちつ、今日はやけに俺様の女が狙われるな…。」

命の遣り取りの裏側。時と場所を同じくして、ランス達に立ち塞がるノスの背中には
人の頭ほどのサイズの毛玉がくっついていていた。その情けない体たらくを魅せつける謎
物体はククルククルである。

「これっ！ テンション上がるのはわかるがもうちいと力を弱めんかい！ 苦しんでるだろうが!!」

ノスに首で持ち上げられ、マリスは悲痛なうめき声を途切れ途切れに上げている。下手をすればこのまま涅槃の旅へと行脚してしまうだろう。ランスを支える重要人物をここで無くすわけにはいかないとこっそりノスに話しかけてみたのだが…。

おお、ジル様が復活する…！ 地竜ノス、この時を千年お待ちしておりましたぞおおおお!! うおおおおおおおおおお!!

…あかんこれは聞いておらん。ノスはその瞳を真っ赤に充血させ、ふるふる感動に震えている。いやはやここまでジル馬鹿だったとは。お、おいつ！ ノス！ 止まるのじゃ!! 震えすぎじゃ!! 落ちるっ?!? 落ちるっ…!!!

その時。ぞわり、とランスの背中を正体不明の何かが這いずりまわった。嘗て感じたこと無い感覚に、バツとランスは本能で背後を見やる。

「ジル様…。よくぞご復活なされました…。」

カオスが封印されていた台座の上に、いつの間にか全裸の少女がいる。薄暗い室内に浮かび上がるその姿はまるで現実味がない。普段なら裸の女が目の前に出れば、自慢の

ハイパー兵器がシャキーンのズババーンとなる筈。だが、ランスが女から感じたのはひたすら焦燥のみだった。

「なんだお前はっ!？」

「……………ノス。…よくやってくれました。遂に私はカオスの呪縛より解き放たれた…。」

思わず叫びかけるランスだが、女はランスを一瞥することもなく、淡々とした様子でノスに話しかける。なんだこんなふざけた女は！

「俺様越しに話を進めるな!! 誰だと聞いてんだっ!？」

「貴様のような人間風情が知る必要のない御方だ。」

間髪入れずにびしやりとノスが口を挟む。悔しいがノスの言う通りこの女から確かに隔絶した何かを感じてしまう。本能が秒速100mでここは危険だと逃げまわっている。

「ノス。私は長きに渡る封印で力を失っています。あなたが私の手足となるのです。まずは手始めに忌ま忌ましいカオスを叩き折りなさい。」

「はっ。ランスよ、女が惜しければカオスを此方に渡してもらおうか。」

状況は最悪だ。先のミネバとの戦いのほうが余程気楽だった。マリスを人質に取られ、動くことも許されず、果てには得体のしれない女によって挟み撃ちされている。だ

いたい防具もつけていない状況なのだ。これでは勝てるわけがない。

「……くそっ。」

ランスはカオスを地面へと放り投げる。その軌跡が地にたどり着く前に、ノスの一撃によつて伝説の魔剣カオスは砕け散った。

「ジル様、この者達は如何しまししょうか？」

「私をカオスから救つてくださつたのです。命までは取らなくても良いでしょう。」

それだけを言い残すと、ノスとジルはゆつくりと部屋から離れていく……。魔人を倒すべく数多の惨禍を乗り越え、漸くカオスを手に入れた結果がこれか。余りの出来事にランス達は言葉を失つた。絶望的な状況だ。一体どうすればノスとあの女を倒すことが出来るのだろうか……。

「んお？ 千年ぶりに出て来てみればいきなり裸のねーちゃん達とは絶景かな！」

絶望に打ちひしがれ、マリスの嗚咽だけが響き続ける封印の間に、どこからか聞き覚えのない男の声が奏でられた。一体どこからとランスが見渡せば、その声の正体はなん

と魔劍カオス。

今ここに伝説の魔劍、カオスが覚醒する。

第二十七話

リーザス奪還編 第十八幕

リーザス最上階、闇夜に聳え立つリーザス王城にて、人ならざる者達が二人。

「ジル様。このリーザスからお離れにならないのでしょうか。」

魔王ジル、人間の国リーザスの王座に坐す。その顔からはどのような表情も伺えず、リーザスの栄華の象徴たる王の間はその煌めきを曇らせていた。

「良いのです。カオスは既に葬られました。今は魔人領にいるよりも都合がよいでしょう。」

封印の魔から立ち去ったジルとノスは本来魔王がいるべき場所、魔人領に帰ることはなかった。

魔人領は正に魔王にとっての聖地。何故ジル様は復活直後で衰退しているにもかかわらずこの地に留まることをお選びになられたのだろうか、と疑問がノスの頭を一瞬よぎる。しかしジル様の行動は絶対。俺は只従うまで。

「それで、ノス。あなたの背中に付いているそれは…なんですか。」

ノスがジルに対し、了承の意を込めて礼をすると、その拍子にぼてんと毛玉が床に落

ちうめき声を上げた。追加で人ならざる者が一匹か。

「うぐつ!? むつ、遂に見つかってしまったか! ならば仕方ないのじゃ。」

毛玉はそのそと動き、ジルの足元まで進むと、その髪を掻き上げたかのように動かし、ガツツリ決め顔で名乗り上げた。

「わしは初代にて歴代最強の魔王、ククルククルじゃ!」

「…ノス。一体何時から斯様な愛玩動物を飼っているのですか。あなたがこのような趣味に目覚めるとは意外です。」

「か、がはつつつ…!?」

「ではあなたが本当に初代魔王なのですね…。」

「驚くべきことです。左様です。この俺が生き証人となりましょう。」

一向に毛玉が初代魔王ククルククルだと認識できなかったジルだが、ノスの助勢もあつて漸く話が進みそうである。

「わ、分かればいいんじゃないやよ…。分かれば…。」

しかし、ククルには悪いが流石のジルであつてもこれが嘗ての己より格上とされる存在だったなど信じたくはないだろう。

「カオスの呪縛から私を開放するのに尽力してくださいましたようですね。目的はわかりませんが一先ず礼をしましょう。」

意外にもジルはククルに対し頭を垂れた。軽くではあったものの、絶対強者である現魔王が他の生物に頭を下げるなどとても信じられるものではない。これにはジルという魔王の人物像が深く関係している。ジルは元賢者であった。最悪の魔王とその暴虐性が後世では語り継がれる傾向にあるが、その本質は知識と術。ジルは魔王について深い知識を得る際に初代魔王ククルククルについて可能な限り知識を集めていた。一騎当千何千何万ものドラゴンへ と立ち向かった最強の魔王。この伝承には流石のジルも驚嘆通り越して呆れた果てたという。まあ、現実とは幾分違ったようである。

「よいよい。わしとしてもお前さんには会ってみたかったからの。」

気を良くしたククルは器用に王座を登り、肘掛に陣取った。なんとも厚かましい限りだ。

「ククルククル殿。出来ればあなたの真意を、加えてどのような方法現代に生き返ったのかを教えていただきたいのですが……。」

ジルは今までの濁った瞳ではなく、何か希望を見出したかのように焦りとも喜びとも言えぬ感情を顔に表してククルに問い詰めた。これはひよつとするとジルがどのよう

な存在であつたかを知る千載一遇の機会かも知れない。

「生き返つた理由はようわからん。いつの間にか生き返つてた。只それだけじゃ。」

「それに魔王としての力を完全に失つてゐるようですね…。ノス、私は少々ククルククル殿と話があります。」

「はっ、それでは失礼致します。」

ノスはククルを軽く一瞥する。ククルとしても特にジルに何かする気もない。ククルが安心しろと視線を返すと、視線代わりに踵を返して立ち去つていった。

王の間にいるのは元魔王と魔王ただ二人。

「…ククルククル殿。貴方はもしや魔王の力を捨てる方法を御存知のですか…?」

先に口を開いたのはジルだった。この発せられた内容に、ククルは自分の予測していたものが正しかったことを確信した。

「どういう意味じゃ?」

だがあくまでもククルは素知らぬ顔で通す。ククルの予想通りならばジルがリーザス城に留まり続けたことも、ランス達を殺さなかつたことも、数多ある魔王としての違和感も十分に理解できる。

「そのままの意味です。私にその方法を教えて頂きたいのです。」

「それを知つてどうするのじゃ。魔王をやめるつもりなのかの。」

魔王とはこの世界の絶対強者。ジルは自らの意思でそれを放棄したいと語る。

「貴方も魔王だった筈です。ならば私の意図がわかるのではないのでしょうか？」

確かに魔王は絶対王者ではあるが、その行動は神に定められた暴力的な法則性に従うことを強制され、ある種の奴隷とも言えるのだ。

「まあ、の。所詮魔王は神の下僕。：ジル、やはり御主理性が戻っておるな？」

だがこれをククルは魔王になってから二千年の間、自覚出来たことがなかった。これは魔王という束縛から開放された今生において漸く認識することが出来た事柄である。それを一割にも満たない魔王の力しか所持していないとはいえ、現魔王が語ることがどれだけ異常な事態だろうか。

ジルは言葉を詰まらせ、俯きそのまま押し黙った。魔王になる前の理性がある。それはつまり、魔王が及ぼす害悪もその力の割合に準じている可能性が高いという事。唯一魔王の力の一部だけを持つ存在であるジルはその空論を証明しているのではないか。

「ふん。御主は魔王の身で人間に見惚れ、その人間に封印されたらしいの。秋の鹿は笛に寄るといふが、随分と又大きな鹿が掛かったものよ。」

ククルは芝居のかかった大げさな口調でジルの過去をなじるように語る。魔王相手に喧嘩を売っているようにしか思えない行動だ。

「私がガイに抱いたものはそのようなものでは：有りません。」

だが、それにも関わらずジルは依然として俯いたままだ。ここが正念場、もうひと押しとククルは畳み掛けるように続ける。一体何をしようというのだろうか。

「そして女死なずともその男去りし後。なんともっ……悲しい話じゃな。」

ククルが言い終わる前に、視線の数ミリ先にバチバチと凄まじい金切り音を上げる雷球が現れた。後少しでも雷球が動かされれば、ククルの命は元魔王という肩書も意味なく掻き消えてしまうだろう。

「例え初代魔王としてもそれ以上の侮辱は許しません…。」

だがそんな状況とは裏腹にククルの心情は有頂天と言っていいものだった。よしよし、これで良い。魔王の力による暴力性は押さえられているが、それが諦観によるものでは意味が無いのだ。

「おんや？　魔王を辞める方法を知ることが出来なくなるやもしれんぞ？」

余程魔王を辞める方法を知りたいのか、意外にもジルは怒りに満ちた顔を歪ませ、雷球を胡散させ押し黙ってしまった。

これでは魔王というよりも、意に反した巨大な力を手に余らせているだけの人間じゃな。ん、そろそろ復活するか。

「それにしても最悪の魔王とは、本当に甘いものだな。ほれ、来るぞっ。」

「ッ!?　この拍動は…!!」

リーザス城が鼓動した。ジルは想定外の出来事に狼狽する。ククルにこの状況を問
い詰めようとした時、そのジルの首元を、ゾリつと舐めとる感触が襲った。カツと目を
開き、恐怖に焦点が定まらず駆け回る。この強烈な殺意は…間違いない、魔剣カオス!!

「ノ、ノスツ!? どこにいるのですかノスツ!? カオスをなんとしても葬りなさいっ
!!」

ジルはククルの存在すら忘れて、ひたすらに忠実なる下僕、魔人ノスを探して王座か
ら駆ける。部下の庇護を求めて走る儂げな背中とは、とても魔王とは思えない見目相応の
少女のそれであつた。千年もの孤独によるものか、魔王の血が薄れた結果だろうか…。

「ふむ。憎悪と殺戮の人生、これがその末路か。ま、わしが終わりにはさせてやらの
じゃがな!」

第二十八話

リーザス奪還編

第十九幕

「全く処女は守ったとはいえセルさんの記念すべき初エッチをこんな馬鹿剣に奪われるとは……」

魔剣カオスは伊達に魔剣と呼ばれてはいなかった。カオスにはなんと意思が存在したのだ。そして目覚めたカオスはなんと折れた刀身を治すため、清純な女の子とのエッチを希望してきたのだ。カオスがどのような方法でエッチを行ったかはご想像にお任せしよう。

「年増……ふふ、そうよね。もう二十代後半に差し掛かるのですもの、ふふ、ふふふふ。」

カオスは剣でありながら、異様なまでに女の選り好みで激しかった。まず切り捨てられたのはマリス・アマリリス。二十歳以上はイカンとのことである。

「リーザス王女であるこの私を淫乱呼ばわりだなんて……折れたままのほうが良かったのに。」

更に選別は続き、エッチが好きな女も嫌とのこと。この緊急事態になんとも呑気なこ

とだ。

「ふほほ、なかなかいい娘だった。ランスよ、あの子は尻だ。チャンスがあれば尻を攻めるのだ。」

更にはこの発言である。魔剣カオス、その正体はそこらによくいそうな平凡なエロ親父だったのだ。末恐ろしい世界である。

「尻だと？ それはいいこと聞いたむふふ。」

意外にも、ランスとの馬がなかなか合いそうである。この一人と一振りが揃った時、一体どんなエロ革命が起きるのか想像できない。

「これも人類のためなのです…。これも…うううう…。」

カオスの犠牲となったのはレッドの街の修道女セル・カーチゴルフ。いつもは不幸属性としての名を我が物顔としているかなみも、初エッチが剣という人生に同情を禁じ得なかった。

「魔王はまだ近くにいます。奴の気配がピンピンしてる！」

「よし！ 魔王だろうがこのランス様には関係ない！ さっさと倒しに行くぞ!!」
どんよりと沈んだ女性陣に対し、なんとも陽気なエロコンビであった。

カオスの気配が駆ける速さで近づいて来る。ジルはカオスを恐れるあまり、ノスにカオスの迎撃を求めるとリーザス最奥の小部屋へと引きこもってしまった。完全に怯えきってしまったている。

何故ジルはリーザスから離れないのか。それにはジルの悲しき過去、配下であり寵愛していた魔人ガイに裏切られたという事実が切っても切り離せない。魔人に裏切られたという強烈なトラウマを持つジルは、魔人に対し強制命令権を持っているにも関わらずノス以外の魔人をも恐れているのだ。人類圏を離れば魔人との接触は避けられない。かと言って人類圏に留まっても、カオスという恐怖がジルを縛る。既にこの時点でジルは未来を見ていないのだ。

ジル様のために、このノス絶対の盾となりましょうぞ、と覚悟を決めたノスは王の間の前にてカオス到来を待つ。ヘルマン軍は既に崩壊し、散り散りとなった。リーザス城には魔人と魔王と元魔王だけ。給仕の一人もいないリーザス城は明かり一つ付けられず、静かにこの一幕が降りる時を待っていた。

「ノスよ、御主はジルについて何か思うことはあるか？ 何か以前とは様子が違うとは思わなかったかの？」

心見透かすような言葉がノスを抉る。ジルを敬愛するノスであっても、ジルの行動からどうしようもなく過去の君主は変わってしまったという思考から逃れることは出来

なかった。

「確かに、ジル様はお変わりになられた。以前は人間など全て家畜と扱ったほど冷酷無情な御方であられた。だがそれでもジル様はジル様、最後まで俺はジル様とお伴しようぞ。」

覚悟を決めた一人の男の声が、しんと廊下に響き渡る。ノスはそれでも構わなかった。封印されたジルを復活し、彼女に選択肢を与えることが出来たのだから。後は彼女の選択に付き合うのみ。

「もしもじゃ、もし御主の行動がジルの命運を分けるとしたら御主はどうする？」
ノスの肩に乗ったククルは更に続けた。己の欲望のままに。この劇の顛末を変えるために。

「何を当然なことを、ジル様のためを思って行動すると何度も言っておるだろう。」
そうだ。ジル様にとって最良となる道こそが己の選ぶ道。もしジル様を救えるのなら、選ばない道理など無い。

「ならばノスよ。信心過ぎて極楽を通り越す。少しばかりわしの話を聞いてくれいなに、別に御主に特別してもらおうことがあるわけではないのじゃ……………」

「ようやつと来おったか。全く年寄りを待たせるとは礼儀がなつとらん。」

遂にランス達は王の間へと辿り着いた。ノスはゆっくりと立ち上がり、ランス達を見回した。どいつもこいつも、いい顔をしている。決意の灯った強者の面構えだ。

「呑気構えやがつて！ これを見てみろ！ カオスは復活したぞ!! これでお前もあの女も終わりにしてやるっ!!」

だからこそ、手加減はしない。勝負というものは、得てして最初の一瞬で決まるものなのだ。

「カオスがあろうとなかろうと、俺は貴様ら程度の力量でどうにかなる相手ではないっ！ グレートファイアボール！」

ノスの全魔力を込めたグレートファイアボールが炸裂する。その威力は魔人が人間とは隔絶した存在であることを主張するかのような超火力。いきなりの無詠唱攻撃に、ランス達は避けることも防御の構えを取ることも出来ず、ものの見事に火球はランス達に直撃した。

「んなっ!？」

魔人の攻撃は人間のそれとは比べ物にならない。たった一発の魔法でランス達はランスを含めて瀕死の重体へと追い詰められた。

「どうした？ カオスを持つ者よ、その程度の実力だったのか？」

「うぐっ…なんて火力だ…。」

断じて魔人を舐めていたわけではない。志津香は事前に全員にバリアを掛け、神魔法に長けたマリスとセラで魔法防御を重ねがけするという万全の体勢だった。だがそれもノス渾身の一撃には紙切れ同然。気力は依然として漲っているが、凄まじい衝撃に思うように動けない。

「一撃でやられるとは情けない！ 立つんだランス!! ここで負けたら人類は終わりでぞ!!」

カオスがランスを叱咤する。ここでランスが負ければカオスは再度折られ、ノスの手によって人間の手に渡らぬよう葬り去られてしまうだろう。そうなってしまうえば、ジルを縛るものは無い。千年前と同じ、ジルの支配による地獄が再びその産声を上げるだろう。これは人類の命運を分ける天王山。勝たねばならない戦いなのだ……。

「ランス殿おおおお!!!」

そこに、ランス達後方から黒色の鎧と青色の鎧の群れが押し寄せてきた。リーザス青

の軍とリーザス黒の軍、リーザス防衛の要である最強の盾が二つ。今、ランス達を守るために立ち上がった！ 戦士達は恐れを知らないかのように魔人ノスへと立ち向かう。まさに無謀。生身の人間が魔人に立ち向かうのは、只々死を意味するのだ。

「いけません！ 相手は魔人ですよ！」

二人がどれ程優れた軍人であるかを知るマリスも叫ばずにはいられない。だがそれでも彼らは止まらなかった。

「俺達はランス殿の背中を見て希望を見出した！ リーザスの未来はランス殿と共に！ その輝きを今、失うわけにはいかねえええええ!! ラブラブラツーーーシュ!!!」

「コルドバ將軍を中心に防御陣を築けい！」

リーザスの青い壁がノスへと立ち向かった。その体格を活かした巨大な盾を抱え、何としてでもノスの攻撃を食い止めようと一念発起。今こそリーザスの雌雄を賭けた大一番なのだ。

「俺は二体の魔人相手からも生き残った男よ！ この程度でへこたれねえぜつ!!」

「ランスさん…今のうちに回復を…。」

ノスが軽くその体躯を振るうだけで、兵士の鎧は引き裂かれ、王の間の扉が赤く染まっていく。仲間の死体を踏み込め、リーザス軍がノスへと立ちふさがり続ける。彼らの死をもつて得たこの好機を逃してはならない。仲間の犠牲を無駄にしないためにも

足掻いて足掻き抜かなければ!

なんとか呼吸を整え、セルがヒーリングシヤワーを放つ。彼らが食い止めている間になんとしても立ち上がらなくてはならないのだ。

「ランス! 志津香!!」

ひたすらにリーザス軍を蹂躪するノスの顔面に、砲撃が炸裂する。流石のノスもこの攻撃によるめき、その隙を突こうと再びリーザス軍は奮起した。この覚えのある爆撃は……
：マリア・カスタード!

「マリア!? どうしてここにっ!?!」

マリアは後方からの爆撃部隊の筈。何故このような前線に。相手はあの魔人だというのに! マリアには命をかけるほどの戦いに意味はないかもしれないというに。

「志津香、いつもわがままばかりごめん……。でも私だつてランスのために戦いたい!! チューリップ隊、一斉放火!!」

マリアに続いて続々とチューリップ部隊がノスへと集中砲火を放つ。そしてその砲撃を縫うように、赤い閃光がノスへと斬りかかって行った。

「司令官! ……ここはお任せ下さい!!」

忠と書かれたリーザス独特の兜。その正体はリーザス最強の赤の軍将軍、リック・アデイスン。彼もランスのため、リーザスのために、人の身で魔人ノスへと立ち向かって

いった!

「リック將軍まで…。」

レイラの身体に力が漲る。リーザス解放軍全軍が自分たちのために時間を稼いでくれている。ここで挫けてどうするというのだ。

「バイ・ラ・ウェイ!!!」

人類最強とも言われるリック必殺の剣技、バイ・ラ・ウェイがノスを止める。矮小な人間たちが集い、絶対強者である魔人と拮抗しているのだ。

「回復終わりましたっ! リア様、ランス殿、今が勝機です!!」

「さつきはよくも不意打ち食らわせてくれたな! 今度こそ終わりにしてやるっ!

全員突撃しろおおおお!!!」

リーザス軍とノスの間に。今、人類最強の男が飛び込んだ。魔剣カオスが魔人の血を求め叫び、それに負けじと凄まじいまでの乱舞と共にランスがノスへと躍りかかる。

「ぐわっはっはっは!! こんなにも血肉湧き上がる戦いは久しぶりだっ!! これならばどうだっ!!」

ノスは歓喜していた。生を授かってから嘗てここまで猛るような戦いはあつただろうか。確かにククルククルは恐ろしい敵だった。闘神は人間が創り出したとは信じられない程の強さだった。だがしかし、ここまで全てを投げ捨ててまで立ち向かってきた

相手がいただろうか。

「ぐぼおっ!!」

「ランスさんっ!!? ヒーリングっ!! 回復して下さい!!」

ノスが兵士を一人殺せば新たに二人がその隙を埋めようと飛びかかる。ノスが中心たるランスを倒そうとすれば、仲間たちがランスを守ろうと一丸となる。成る程、正に不屈。こちらがどれだけ倒そうと、一向に絶望に身を委ねず、ひたすらに立ち上がる。これが人間本来の強さか。心を通わせ、一つの信念の元に結びついた時、人間とはこれほどまでの力が出せるのだな…。これならば、俺には勝てないと言った奴の言葉も理解できる…。奴の発言は信じてみる価値がある…。か。

コルドバの闘志が、バレスの的確な指示が、レイラのリーザスを守ろうとする気迫が、リックの高みへ駆け登らんとする軌跡が、ノスの行動を食い止める。

かなみの隙を狙った一撃が、志津香の満身込めた大魔法が、マリスの努力と思いの結晶が、セルの慈愛の心が、リアのランスを愛する気持ちだが、マリスのリアの幸せを願う執念が、ノスの巨軀を揺らがせた。

「今だっ! カオスの錆にしてくれるわっ!!」

「おうとも。やれっ! 心の友よ!!」

そして皆の希望を背負い、ランスが激流に乗って飛び上がった。カオスの刀身が目を

焼かんばかりに白く輝く。とどめを刺さんとするはランスの十八番であり、最強の一撃！

「ランスアアアアアアアア………!!!」

「ぐ……。どうやら俺はここまでのようだな。褒美だ、ランスよ！ これを受け取るがいい!!」

だがそこに思わぬ障害が立ちふさがる。ノスが王の間の扉付近に置かれてい巨大な袋を放り投げると、その中から攫われていたランスの奴隷、シイル・プラインが顔を出したのだ。

「ら、ランス様ああああああ!!」

「アアアアああつ!? げつ、シイル!」

想定外の乱入にランスの手が硬直。カオスの輝きはシユウシユウと胡散してしまった。ノスはランス達の一瞬の隙を見て、廊下から高欄へガラスを突き破り躍り出た。

「さらばだ強者達よ！ お前達と戦えたことを俺は光栄に思おう！ 今回はお前達の勝利だ!!」

「あつ!? こら待て逃げんなつ!!」

傷だらけにもかかわらず、闇夜を颯爽とノスは飛び降りる。ジル様の為にも、生き残り………か。

「後は頼みましたぞ………ククル殿。」

第二十九話

リーザス奪還編

終幕

「ランス様！ 痛い痛いのとんでけー。」

「がはは！ ノスの野郎は逃がしたがこれで後は魔王だけだ。一気に畳み掛けるぞ！」

遂にランス達は魔人ノスを退けた。最早残るは目の前にいるであろう魔王一人。この高揚し切った流れに乗り遅れてはならないと、戦士としての本能がランスに囁く。

「ランス殿。リーザス軍はほぼ壊滅状態です。先ほどの戦いと違い援軍は望めません…。それでも行くのですか…？」

といったものの、マリスが言うように回復要因がセルとマリスしかない現状では、既に壊滅したリーザス軍の助勢は見受けられるわけがない。ノス戦では多勢に無勢で押し切ったものの、ノスよりも更に上をいく存在であるジルに勝てるのだろうか。

「相手は魔王なのよ…それにノスと一緒にここから出て行くかもしれないわ！」

状況だけで言えば、明らかに分が悪い。加えてかなみの希望的観測も可能性としては無いわけでもない。眉唾ものだとしても信じてみたくなくなるというものが人間だ…。

「ん？ ああそう言えばシルも戻ったしなあ。」

ランス一行に不穏な空気が流れ始める。もう十分じゃないのか？ 魔王になんて勝てるのか？

「バカモン!! 魔王をこのまま放置すれば人類はおしまいだぞ! 大体目と鼻の先じゃないか!!」

ランス達全員に対し大声を上げたのは魔剣カオス。誰よりも魔王を殺す事に情熱をかける男であった。ちゃっかり王女に馬鹿者と言つてしまつたが大丈夫だろうか。既に淫乱呼ばわりもしているのだが。

いかんいかん、危ないところだつた。儂が叱咤せねば心の友は本当に挑まずに帰りそうだわい。儂がランスをしつかり支えねば。

「ちつ、わかつたわかつた。おいリア、魔王を倒した暁にはリーザス城の女と自由にやる権利を必ずもらうぞ。」

「ダーリンのためだから仕方ないけど…、私が一番最初にダーリンとエツチするんだからね!」

ぷうと頬を膨らませて答えるリア。その胸中はどれ程の葛藤に苛まれているのだろうか。

「リア様…御労しや…。」

ほろほろとマリスの目から涙が溢れる。一体どこにこれ程まともな身分も無い殿方

をお慕いする王女がいようか…。これはもうランス殿にリーザス王と
なっていたかどうか…。

「おうし怪我人は下がってる！」

門の開く音が重苦しく響く。リーザス城王座に座っていたのは、封印の間であった
女、魔王ジル。浮世離れた美しい肌に床にまで伸びた絹のような長

髪が、人間とは異なる存在だと淑やかに、それでいてギラギラと主張しているかのよ
うだ。

「来ましたね。カオス。まさか復活するとは思いませんでした。二度と力を取り戻さ
ぬよう粉碎し、再び葬り去ってあげましょう。」

ジルはゆっくりと立ち上がる。その起伏のない声はまるで人形のようなだ。

「はっ！ 出来るもんならやってみろ!!」

先の戦闘のようにはいかない。こちらも先手必勝、無駄な会話は控えレッドカーペッ
トを踏みしめランスは一目散にジルへと跳びかかった。

「私は魔王ジル。人間風情が追いつけると思えますか？」

ランスは上段一発で決めてやるとカオスを振り下ろす。が、その刀身は予想とは違い、ガツンと王座にぶち当たった。

「えっ？ はっ？ 何が起こった？」

ジルは一体どこにと振り返ってみれば、いつの間にか後方にいたランス以外の誰もが倒れ伏しているではないか。一体どのような曲芸をすればこのよう

な事態に陥るといふのだろう。ノス、ジルと先手を取られてばかりである。それにジルの姿が見えない。

「凄まじい速度だ……。ランス！ ここは一旦防御に回れ！ 奴の魔法は儂が防ぐ!!」

言った側から雷魔法が唸り声を上げてランスに襲いかかる。雷魔法はその特性から、兎に角速い。見て避けることなど不可能である。さしものランスもこれは避けられないと出来る限りの防御姿勢を取った。と、カオスの刀身からもやもやとオーラが現れ、ヒュッとジルの魔法に突撃。二つの衝撃は相殺され、輝きを失う。どうやら多少勝機はありそうだ。

これで対魔法はどうかになった。だが問題が全て片付いたわけではない。依然として魔法は止めどなく迫り来る上に、どこにもジルの姿がない。ただひたすら小鳥の泣き声のような不可思議な高音が、怒涛の勢いで鳴り響いている。

「おいおい、見えないんじゃ攻撃も出来やしないぞ。」

この音の正体はジルの足音だ。足音と称していいものかわからないが、ジルは高速で動き続け、その姿を不可視としているのだ。

「くっ、俺は魔法を防ぐだけで手一杯じゃ。なんとかするのだ！」

これが魔王と人間の差。絶対的なまでの肉体能力の差である。こればかりは魔剣カオスと云えどもどうしようもない。

「て言ってもなあ……どわっ!？」

「勘だけはいいいようね……」

突如としてジルが姿を表し、ランスの右後ろからその爪を刃物のように突きだしてきた。ランスの天性の勘がなせる技か、なんとかランスは直前に気付き、難を逃れることが出来たが、魔法に加えて何時くるかわからない攻撃、突破口がまるで見えない。

「また消えたぞ……。ウガーツ！ 魔王らしく正面から戦ってこんかい!!」

相手が見えない以上、攻勢に打って出ることも出来ず、時間と共にいらいらばかりが募る。ランスの気は長い方ではないのだ。

「落ち着けランス……。奴が攻撃する一瞬、絶え間なく続いていた魔法が止まった。その時魔法が飛んできた方が魔王のいる場所だ。」

「んなまどろっこしい……」

カオスもランスをサポートしようと必死だ。なんとかジルに一太刀浴びせたいもの

だが残念ながらランスはその手の高等戦闘技術に疎い。

「また右後だっ!」

「どりゃ! やったか!」

カオスの声に合わせて全力で振りかぶる。しかしその手にいつもの感触が伝わってくることはない。相手がどうしようもなく速過ぎる。

「振るのが遅すぎるわっ! 油断するんじゃない!」

「なにい!? 俺様に文句言うつもりか!!」

一向に攻撃できず、カオスによつて守られているこの現状にランスの苛立ちは高まるばかりだ。

「さつきから所詮剣の癖にベラベラと口出しばかりしやがって!」

「こらっ! この状況で余所見する奴がいるかっ!」

この隙を見逃す愚か者がどこにしようか。ジルは再びランスを強襲、あわやここまでかとカオスの脳裏をよぎる。だが、予想外にもランスは集中力を欠いた様子もなく、ギリギリではあるものの、上体を反らしジルの攻撃を避ける。忘れかけていたが、この男も只者ではない。人類最強の男ランスなのだ。

「ちっ、無駄に逃げ足だけは早い魔王だ。」

全く拉致が明かない。今はカオスがジルの魔法を防いで入るが、カオスについては知

らないことのほうが多い現状、何処まで頼ることが出来るか…。

くそっ、どうにか突破口はないのか。さつきからジルはやたら右後方から攻撃を仕掛けてくる。それに無駄だとわかっている魔法をやたら撃ってくるのも変だ。なんで右後方からだけなんだ…？ 確かにカオスを持っているのは左手、保身に回るなら右後方から…なのかな？ 取り敢えず右後方だ。右後方。

「くう、魔法が激し過ぎる。ジルの居場所が掴めん…。」

「がはは！ それなら問題ないぞっ！ どうせこつちだ、とりや!!」

なんとなく来ると感じたタイミングでくると身体を回転し、カオスを振り下ろす。下ろし切る直前まで何も見えなかった空間だったが、突如何かとぶつかる衝撃と共に、倒れ伏そうとするジルが視界に入った。やはり右後方から来たか。

「はぐっ!! う、うう。」

あーん？ なんか様子が変わる。強さは段違いだがまるでかなみを相手にしているみたいだ。さっきの魔人みたいな気迫もないし、何よりうじうじして思いきりがない、それになんというか何かを怖がっているみたいだ。

「まあ考えても面倒臭い。ランスアアアアアアッく!!」

膝をついたジルに渾身のランスアアアア。だが流石の魔王か、ジルは直に体勢を立て直し、姿をかき消した。どうやらランスアアアアは避けられてしまったか。

ランスは同じように右後方の攻撃に備え構えるが、一向に攻撃してこない。雷魔法だけが絶え間なく続き、視界がチカチカと点滅する。

「まーた逃げ腰か。しかも全然攻撃してこなくなつたぞ。」

「恐らく奴は儂が消耗するのを待っているのだ。何か手を打たなければ。」

手を打つか…。紐でも引つ掛けてみるか？ それともハイパー兵器を見せ付けてみるか？ あー、もうやめだやめ。

「走り回つてるんだつたら適当に振りや当たるだろー！」

ここでランスの堪忍袋が遂に切れた。雷魔法などお構いなしに、ブンブンと手当たり次第にカオスを我武者羅に降りだしたのだ。

「ひっ!？」

だがなんとそれが功を奏した。何を思つてかジルがその姿をさらけ出したのだ。これはランスの幸運か、それとも必然だったのか。

「姿を表したぞっ！ 今じゃランス!!」

瞬時にカオスの切っ先がジルの喉元に当てられる。ジルは堪えるように首元に当てられたカオスを睨みつけていたが、段々とその目に恐れがありありと浮かび、微かに身体も震えだしたではないか。

けっ、魔王がこんな只の女にしか見えない奴だったとはな…。なんかこのまま殺して

もすつきりしないな…。

「ランスさん！ 油断せず直に封印致しましょう！」

そこにセル・カーチゴルフが駆け寄る。どうやら怪我は大丈夫なようだ。

「おお、セルさん。全員もう大丈夫なのか？」

「ふんっ、私のマリスにかかれば回復なんてちよちよいのちよいよ！」

「恐縮です。」

全員が立ち上がり、ジルを囲むように並ぶ。もう彼女に逃げ場ない。

「…ま、待つて。」

「なんだ？ 命乞いか？」

ランスはあくまでもカオスを話さずにジルへと視線だけを送る。ううむ、やはりいい女だ。ここで殺すのは勿体無い。出来ればエツチの一回ぐらいしたいものだ。

「ランス！ 早くしなさいよ!!」

ジルの言葉に耳を傾けるランスに周囲は焦らざるをえない。相手はあの魔王なのだというのに此奴は何を仲良くしているのかと。

「私は…もうカオスから逃げることは出来ないでしょう。ですが、私も魔王の前に一

人の女。カオスを持つ男よ：封印をする前に私に女を教えて欲しい の…。」

これはなんとも願ったり叶ったり。相手の方からエッチを求めてくるとは。これで完全和姦達成である。ランスがやらないわけがない。

「ランス様っ！ これは罠です!!」

うきうきとし出すランスにシルが警告する。これまでの道中で、ランスは確かに様々な困難を乗り越え、悪魔とまでエッチをした男だが、魔王とエッチだなんていくらランスでも危険過ぎる。相手は歴代最悪と呼ばれ魔性の女だというのに。

「だーっ！ うるさい！ 女の願いの一つや二つ、聞き入れられなくてどうするんだっ!! これは男の使命なんだぞっ!!」

いやはやそれはどうなのだろうか…。しかしこうでもなったらランスはテコでも動かない。セル以外の面子はそのことをよく知っている。

「私も一緒じゃなきやヤダー!!」

何故リアはそうなるのか…。淫乱と称したカオスの気持ちもわからなくはないかもしれない。

「ヤキモチ焼くんじやない！ さあ行くぞジル！」

結局、ランスの行動を止めることは出来ず、ランスはジルを連れて奥の寝室へと入って行ってしまった。

「だいぶ時間が経ったけどランスは大丈夫なの？」

志津香としてはランスの命なんて本当にどうでもいいことだが、魔王の生死を左右するとあつては心配の一つや二つしてしまう。

「心配あるまい、ここからでも奴の力は殆ど儂が抑えておる。少なくともあのランスが寝首をかかれることはないだろう。」

「ふーん。便利なものね。」

伝説の魔剣もそう言っているし、何よりランスが死ぬわけがないと他のメンバーは安心した様子である。だが、シイルの胸騒ぎだけは止まらなかった。相手は魔王。問題がない筈がない。

どうかランス様……ご無事で……。

「ランス、貴方は素晴らしい男ね……。素晴らしい時間だったわ……。」

天蓋が軽く揺れ動き、添い寝をするランスとジルが見える。どうやら一発かました後のようだ。しかし、どうしてジルはランスと寝るなんて事をしたのだろうか。カオスを

持つランスをガイと重ねて慰めにでもしているのだろうか。

「俺様は世界一カツコイイ男だからな。当然だ。」

ランスも積極的なジルにご満悦のようである。

「私は……カオスに封印されたくはないわ……。奴に封印されるくらいなら……。」

そんなランスに枝垂れかかるように被さり、ジルは胸中を打ち明ける。ランスとしてもこんないい女を封印なんてのは勿体無いなあと思案していると、突如としてジルの周りの空気がざわめく。

「ん？　なんだ!？」

「貴方と共に永久の眠りにつくわ!!」

ジルの叫びと共に金縛りがランスを襲う。一体全体どうしたというのだ。ジルの力はカオスが封印しているのではなかったのか。

「なにい!?　カオスの奴めっ！　力が残ってるじゃないか!？」

ジルはランスに馬乗りになったまま、呪文を長々と唱え続けている。この呪文はよくないと警鐘ががなりたてる。

「ヤバイぞヤバイぞヤバイぞ。おい誰か助けに来てっ!!」

「アハハハハハハハハハハハハハハ……。」

遂に呪文が発動した。ジルとランスの間に不可思議な黒点が現れたかと思うと、ぐ

わつと広がり、ランスとジルを包むように呑み込んだのだ…。

「ランス様っ!!」

ランスの叫びにシイルが一目散に駆けつけた。だが既にそこにランスの姿はなく、ぼつかり空間が切り取られたかのような穴が空いているだけだった。恐らくランスはあれに飲み込まれたのだろう。

「これは…、ジルの奴め！ 時空の狭間に逃げおつたか!!」

「シイルちゃんダメよ!! もう無理だわ!!」

「ランス様ああ!! いやああああああああああああ!! 離してえええええっ!!」

ランスを追って穴に飛び込もうとするシイルを志津香が抑えこむ。魔王の魔法に捉えられたのだ。ランスの命は既にないものと考えた方がいい。シイルを無駄死にさせるわけにはいかない。

「おい何しとるんじゃ。はよ行かんと閉まってまうぞ。」

と、唐突にベツトの下から謎の物体が飛び出してきた。この見覚えのある怪奇物体はカスタムにいたククル!? 何故か知らないが顔が真っ赤である。そもそも何故ここに

いるのだ。

「えっ!?! あんた生首!! どうしてここにっ!?! あっ、シイルちゃん!!」

ククルに驚く志津香の隙をついて、シイルは拘束を無理やり解くと、躊躇なく穴に飛び込んでいった。シイルがランスをどれだけ思っているかが伺える行動である。

「そんなじゃわしもつと。皆の衆、またなのじゃっ!」

シイルに続いて、意気揚々とククルは穴に飛び込んでいった。次第に穴は小さくなり、完全に掻き消える。

かくして、英雄と魔王が行方不明になるという結末を持って、リーザスを襲った未曾有の大事件は幕を閉じた。

「サテラサマ ドウシマシタ?」

ここは魔人領が魔王城。サテラがホーネットの元に戻り、日がな土いじりを再開して数ヶ月が経とうとしていた。

「ん? いや、サテラが暫く前に感じた魔王の気配はなんだったんだろうと思って。

気配は微かだったけど、リトルプリンセスが覚醒したわけじゃなかった。」

「こねこねと手を休めずにサテラは続ける。工房にはサテラが用いるための多種多様な土がこんもりと盛られた樽が乱立し、シーザーは身動きが取れないほどである。」

「ヤハリ キナリマスカ。」

「サテラとしてはどうでもいいけどホーネット様が心配してる。ノスも連絡取れなくなつたし何かあつたのかもな…。」

「ジルの覚醒は、全く魔人達には知られていなかった。覚醒した魔王の血はたった5%。どうにも得体のしれない何かが起こつただけが魔人領でわかっていることだつた。」

「? シーザー今何かしたか?」

「ナンノ コトデシヨウ?」

「あれ、気のせいかな。でもなんかビリビリするぞ…? 魔王…にしてもちよつと変だぞ?」

「クツクツクツク………。アーツハツハツハツハツハツハツハゲホツゲホツ……。」

「ちよつとは落ち着きなさい……。」

「はあ………よし！ わし、完全復活なのじゃあああああああああああああ
!!!!!!」

第三十話

リーザス奪還編 幕裏

一寸先も見えぬ闇の中に、魔王ジルは蹲っていた。ここは時空の狭間と呼ばれる場所。一度踏み入ってしまえば二度と去ることが許されない悠久の地獄。本来のジルであれば、空間魔法を使って逃げ出すことも可能だったかもしれないが、今のジルは力を失い、限られていた力もカオスによつて更に削られたしまった現状ではどうしようもないだろう。

結局こうなってしまった。もう既にガイは逝去し、次代の魔王がいる。半端な魔王である私は魔人からもその力を奪わんと狙われ、魔王からも忌み疎まれるだろう。カオスからも追われ、ましてや平穏など享受出来る筈もない。それにもういいのだ。現世に未練などもうない。何も無いのだから…。

「むあああああああああああああぎゃふんっ!!」

と、絶望したジルの足元に何かが叫びながら落ちてきた。ころころと転がり、ジルに

もたれかかるように止まったその姿はククル、何故ここに。落ちた衝撃で目を回しているようだ。

その時ククルの身体が光りに包まれた。余りの眩さに目も開けていられない程だ。これは一体…。

「ほにゃ…？　いてて、思ったより高かったのー。うん？　ん？　おおおおおおお おおおおお！　なんか戻ったのじゃあああああああああああ！！！！」

「お前は…ククルなのですか…？」

光が晴れた先には、ジルよりも少し幼い少女が立っているではないか。そしてククルの姿がない。これこそがククルの姿なのだろうか。

「むっ、なんだか敬意が亡くなったような気がするがいいじゃろう。そう、これこそわしの今の姿。まさしくナイスボディーじゃ！」

ククルはひとしきり身体を隈無く見通すと、決めポーズを取ってジルの間に答えた。なんとも言えないそのポーズは身体が無いときには出来なかつた鬱憤を晴らしたいがためだろうか。

「そう、それで…こんなところまで何の用……。こんな私を憐れみに来たの…？」

この時空の狭間は抜け出すことの許されない蟻地獄。一体何を思っただここに来たというのだろうか。このジルの姿を見に来たというのなら相当な悪趣味だ。ジルは顔を

再び伏せ、ぼそぼそと呟くように語る。

「なんじや覇氣の無い。御主、魔王の力を失う方法を知りたかつたんじゃないのか？」
「…どうせ、無いんでしよう。そんな方法など…。お前も私の味方ではないのですね…。」

これは痛いところを突かれてしまった。確かにそんな方法はククルの知るところではない。ククルが魔王の力を失ったのは純粹に死んだからであって、自らそうなるよう計ったものではないのだ。

「あー、まあわしはそんな方法が有るなんて言っていないの。それに関しては御主が勝手に推察しただけじゃ。」

「……………そうね。」

視線をそらし顔を指で掻きながら、ククルは微妙な言い逃れを抜け抜けと言い放つ。傍から見てもククルに負がないとは言えないだろうにジルはそれに憤慨することも憎々しげに睨みつけることもしなかった。

「湿気た顔しおってからに。わしがここに来たのは御主を救うためじゃぞ。」

「助ける？ どうやって助けるというのです。それに…今更現世に未練などありません。唯一の臣下であったノスも…。」

ジルの発言を遮るようにククルがポンと右手で拳を作り左手を叩いた。

ああノスのことか。そういえばジルには言っておらんかったのお。言っても良かったんじやが、どちらにせよ出来ればジルには最後まで追い詰められて欲しかったから仕方あるまいて。

「ノスか？ 奴は死んではおらんよ。逃げ果せおつた。ま、わしが生き延びるよう命じたのじやがな。」

これでジルも多少なりとも生氣を取り戻すじやろうと、ドヤ顔ポーズで閉じていた目を開けちらりとジルを一瞥してみるが。

「それではノスも私を裏切り、貴方についたということ…ですか。」

「あーもうなんじや愚痴愚痴と暗いやつめ！ 誰もそんな事言つとらんじやろーが！」

さつきから阿呆みたいにネガティブになりおつて！ と怒気を感じずにはいられない。せつかくこちらでもジルの氣力をなんとか漲らせようと慣れないことをやってるというに。

「今更なんと言うのです！ 全てはもう終わった事、終わった事なのよ!!」

「おおう…?」

ジルはここに来て荒々しく吠えた。なんじやなんじや、やれば出来るではないか。氣持ちが沈んだ相手では碌に話しも進まんからの。ここからジルには生きるという望み

を持つてもらわねば。

「そうじゃな。終わつた事じゃ。だからこそ、今再び始めるのじゃ。何者にも縛られぬ新しい旅路を……な。」

「さあここからが賭けよ。わしはジルが絶望に染まりきらず、希望を見出すと賭けた。いざ、禍転じてみせようぞ。」

「もしや……本当に魔王を辞める方法が……!？」

「ジルは、はつとしたようにククルを見つめ問い詰める。よい食いつきじゃ。やはりまだ諦めきれていないとみえる。」

「それは、ない。」

「残念ながらその方法はない。それはどうしようもない事実だ。」

「じゃが……それに近い方法ならある。」

「しかし、確かに完全に人間になる方法はない。だが、薄める方法ならある。魔王の血という物理的にも、同じ存在が居るといふ精神的にも……。」

「それは一体……。」

「ククルとジルの目が交差する。」

「ジルよ、思いだせ。御主は魔王だった。今となつてはその魔王としての力も殆ど失い、見る影はないかもしれん。じゃがそれによつて理性を得た。そうなつた原因はなん

じやった？」

今のジルは魔王と呼べるかどうかもわからぬ曖昧な存在だ。残された魔王の血は5%、カオスによって肉体的にも人間と相違ないほど更に弱体化しているのが現状だ。とは言え魔王の血が薄まったことによって魔王の血が持つデメリットも最小限までに押さえられているというのも事実。

「それはお前も知っているでしょう。私はカオスによって一度殺され、それによってガイに血が継承されて……!! まさか……」

答えに気がついたジルに、悪くどいような慈悲に満ちたようななんとも言えぬ笑顔をニンマリとククルは浮かべた。

「そうじゃその通りじゃ。正式継承は半端者故に出来んじやろうがな。まあ出来ても御主が魔王の力を完全に失って死んでしまうかもしれないがの。何はともあれそれには素質を持ったものが必要じゃが…目の前にいるわしをどなたと心得るかの？ 元魔王ククルククルじゃぞ!!」

ジルの中で全ての合点がいった。そのためにククルはここまで来たのだ。それ故にランスとの戦いでは微塵も協力しようとしなかったのだ。それ故にジル解放に力を貸していたのだ。

「成る程ね…そういうこと。結局はお前も力が欲しかったのだけなのね。」

「まあそれも半分本当じゃ。だが助けに来たというのも嘘ではないぞ。」

これはククルの真正銘本心であった。手っ取り早く力がほしいというのもあったが、ジル復活に手を貸した理由はそれだけではない。最も恐ろしく、最も悲壮な最後を遂げた悲しき魔王に、同じ魔王として同情を禁じ得なかつたのだ。

「でも私にはもう生きる意味がないの……。無意味だつたようね……。」

ジルは否定し続けているが、先程からチラチラと後ろ髪が引かれたさそうにしている。全く素直じゃない。

「それはどうじゃろうか？ 先のノスについてじゃがな。あのままではノスは確実に御主と生死を共にするつもりじゃつた。じゃからわしは頃合いを見て逃げろと、それが御主の敬愛する者のためになると話したのじゃよ。決して裏切つてなどおらぬ。おる筈が無いじゃろう。あやつはそれこそ己の命よりも御主を敬愛しているのじゃからな。果報者とはこのことよ。さあノスが待つているのじゃ。共に帰ろうぞ。」

右手をついとジルに差し出す。

「私は魔王ジル。この生に敵あれど味方なんてまるでいないのよ……。戻つた所で今回の二の舞い……。」

だがジルはまだゴネる。ジルの目線が動き、虚空を見つめる。その視線が探るものは、同様にここに来たであろうランスか。どうしもなくカオスが、それを扱う人間が恐

いのだ。

あーもう仕方ない。もう一声必要か。こうなったら腕飯振舞じゃ。

「御主には敵が多い。それは間違いじゃないじゃろう。じゃが、わしがいる。同じ魔王だったものとして、御主には並々ならぬものを感じておる。故にわしはここに、裏切った魔人ではなく、魔王ククルククルとして御主と命運を共にすることを誓おうぞ。御主の危機にはわしが、魔王であるわしが必ずや助けるのじゃ。」

今度は悪い顔ではない。真に慈愛を込めた微笑みをかける。さりげなくガイが二重人格であったことは伝えず、自分をアピールである。後もうちよつとじゃ！

「それにな、人生とは愛情だけではあるまいて。他人も自分すらも視界に入れず、ガイだけを見ていた御主にはわからなかつたのかもしれんが、もっと周りを見てやるのじゃ。案外近くに大切なモノはあるもんじゃ。友情慕情、他にも色々あるわい。わしなんて一度も恋愛したこと無いぞ！……おつ、おろ？　なんか胸が痛いのじゃ……」
焦燥に駆られ、墓穴を掘ったククルであった。愛に身を滅ぼした魔王というのと、六千年以上未経験というのはどちらが哀れなのだろうか……。

「兎に角ジルよ。たつた千年でこの世に絶望するとはまだまだ早すぎるわー！」

一般的な視点から見れば、千年でさえも相当なものだがどうなのだろう。とはいえ流石のククルから言われてしまえば反論できない。

「ククル…貴方は再び力を手に入れて、それで何をするつもりなの。それだけは教えて…。」

「わしは楽しく過ごせればそれで良い。そのためにも力は必要じゃ。じゃが敢えて言うならば、創造神ルドラサウムの支配から脱却するためじゃよ…。」

ジルはククルの答えに満足したのかしなかったのか。すつくと立ち上がり、ゆつくり深呼吸。そして真つ直ぐククルと視線を合わせ、彼女の手をとった。

「そう…わかったわ。」

ジルは、死ぬ覚悟と、生きる覚悟を決めた。

そしてここに三人目が誕生する。

「ここでもなら面倒な神々に察知されることはないじやろ。ささつとやってしまおうぞ。」

「ねえ、私が意地でも魔王の力を与えなかった場合はどうするつもりだったの…?」

「んー、まあその時はその時でなんとかしたのじや。多分なんとかなったのじや。」

「ふ、でも貴方らしい。」

「うっ……。はあ、無事終わったのね。具合はどう？ 魔法は使えそう？」

「わしを誰だと思っておる！ 最強の魔王ククルククルじゃぞ!! こんな空間さつさと時空を歪めて抜けだしてやるのじゃ。ん？ あれ？ 開かない？ ふんぎぎぎぎぎ。」

「青は藍より出でて藍より青しとも言おうよ。……………本当に大丈夫なの？」

「うぎぎぎぎぎぎぎぎ……。うっ、口から墨が。」

「あっ?! 先にランス達もなんとかせねば！ ちよつと行ってくるかいの。」

「彼らも助けるのね……。行っつてらっしやい」

「直に戻ってくるからの！」

「……………遅い。」

「おわっ!? なんだどつから現れやがった!？」

「きゃあ!? あれっ? もしかして…。」

「なななななななな御主らこんなところで何を破廉恥な!? えーい適当に送つてやるわ! 宙に浮いている都市で人が住んでいる街がある場所…ここじゃ! どーん!!」

「のわーっ!!」

「ら、ランス様—!!」

時を遡る。ランスとシイルが消えたリーザス城。彼らの消滅に戸惑いを隠せないリーザスであったが、支配者としての責務を果たさなければと次第に元の姿を取り戻しつつあった。しかしそんなリーザスにある噂が広がっていた。夜遅く、誰もいない廊下でどこからか人を呪うような泣き声が聞こえてくるのだという。どこか男のようでそれでいて女のような不可思議なその泣き声の噂はリーザス中に広がり、リーザス怪談ブームを巻き起こしていた。

「シクシクシクシクシクシクシク。ここの地下通路で待つてろつて言ったのに…ハルマンには帰れないシククルちゃん一体いつになったら帰ってくるのよおおおおお

お
お
!!!!
「

第三十一話

ククルさん

in

魔人領

その1

ククルとジルは、時空の狭間から遂に脱出した。体感では三時間程であったが、その実ククル達が帰るまでに約一年が過ぎようとしていた。時空の狭間における時間の流れは通常とは異なるのだ。

「さてと、どれ程時間が経ったのかもわからぬし、まずはノスに吉報を伝えねばな。」
ノス、という響きにジルはちよっぴり顔を綻ばせる。やはり彼女にとって今最も心の支えとなっているのは忠臣ノスなのだろう。

「本当にノスは生きているのね…。」

しかしながら、ジルが時空の狭間を開いてからかれこれ一年も経ったのだ。ノスがこの一年でどうなったのかは知る由もない。ノスが他の魔人に殺されたという可能性も無くはないのだ。直ぐにでも連絡をとらなくては。だがククルにはこの事態に対し、ある秘策があった！

……ふっふっふ。このククルを甘く見ては困るのじゃ。既にわしは情報魔法の一つである通信という魔法をノスから会得していたのじゃ。

「とういかこの魔法いらなかったんじやないかの…。」

ククル達は葉の無い枯れ木のような風貌の植物が鬱蒼と繁茂する樹海を歩いてきた。ここは魔人領がケッセルリンク城の近くの森である。生物の気配すらしないこの森はまさしく魔界の森に相応しいものである。ククルを先頭に、ジル、ノスと続く。堂々と我が物顔で跋扈するククルに対し、ジルはキョロキョロと周辺を見回し終始二人の影に入り込むようにしている。やはり覚悟したとはいえないきなり魔人領に入るのは厳しいものだったか。そんなジルの不安を避けるためにも、ノスはこれまでかとはばかりに殺気を周囲に飛ばし、彼女らに接触してくる魔物は今のところ皆無であった。

「本当にあのケイブリスのどこに行くの？」

おどおどとジルがククルに尋ねる。魔人ケイブリス、現最強の魔人である。ついでに言えば、人間を虫けら・玩具くらいにしか思っておらず、人間としての当たり前の感情を取り戻したジルには出来れば避けたい相手である。

「うむ。あやつはそれこそ今はあんな感じじゃが昔はそりやあ可愛いやつじゃった。わしならば奴を制御できよう。力を求めてお前さんを襲うようなことにはなるまい。」
ケイブリスが人間にとって驚異的な魔人の一人であることはククルも既知ではあつ

た。しかしククルの中でのリスのイメージは、やはりククルが初代魔王であった頃の記憶。何をするにもびよびよこと後ろをつけて回り、生き残ろうと必死に藻掻く可愛い子分であった姿である。ケイブリスに何があつたかは分からないが、今のアヤツの姿は虚勢を張る仮のものであると勘ぐっていたのだ。

「ククルよ。そもそも魔王の絶対命令権でなんとかならんのか？」

不安がるジルを見かねてノスが口を挟む。魔王に備わる絶対命令権があるのだからそもそも魔人であるケイブリスに何が出来ようかと。

「んー。むしろは正確には魔王ではないからのお。敢えて言えば魔王モドキ・2・5%果汁ジュースじゃ。それ故命令権もかなり弱体化しておる。少なくとも魔人全員の意のままに操ることなど不可能じゃろうて。」

この解答にノスは眉を潜める。詰まる所、魔人に殺される可能性があるのではないか。

「ならば何故…。」

「阿呆。もし魔人が敵対した時。そうなった時こそわしとお前の出番じゃ。」

…そう言われてしまつては何も反論できない。チラチラと不安げにこちらへ視線を送るジル様をお守りするためにも、奮起せねば…！

全くジルの事となると、途端単純になるノスであつた。

ククル達が進む森の中、ノスの殺気渦巻く魔界の森に、その雰囲気には決して合わないのほほんとした者が一人いた。ピコピコと猫のような大きな獣耳を動かし、くんくん鼻を鳴らすその人物はケイブニヤン。魔人ケイブリスの使徒である。現在魔人カミーラの元へ手紙を送る勅命の真つ最中である。腕と足を同時に出して歩くケイブニヤン。そのケイブニヤンの視界に、妙な三人組が写り込んできた。

ん？ なんにやあいつら。見たこと無い奴にやん。

「ちよつと待つにやん！ 怪しい奴らにや。」

魔人の頭領でもあるケイブリスの使徒たるケイブニヤンに怖いものなど無い。相手をよく見ることも様子を探ることもせず、愚直に声をかけ近寄るケイブニヤン。いや、そもそもまじめに恐怖などと言った感情を覚えるかも分からないが。

「おお！ お前はリスの使徒のケイブニヤンじゃな!?」

そのキテレツな風貌にはククルも見覚え、というより知識に覚えがある。使徒であるケイブニヤンならばケイブリスの場所も知っていよう。

「そうにやん！ ニヤンはリス様の使徒様にやん！ それでお前ら何者にやん？ もし悪いやつならけりつくけりつくししないと怒らりちやうにやん。」

単なる魔物にも人間にも見えないククル達をケイブニヤンはじいと見つめる。しかしながらこれは可笑しな話だ。何故ノスとジルの姿を見ても何も感じないのだろうか。

「俺とジル様は此奴と会った覚えがあるんだが…。」

「忘れてるのね。馬鹿だし。」

ククルがフォローする間もなくぼつさりとしてジルが言い捨て去る。しかしどうもこのケイブニヤン。ジルの言う通り、主に似て馬鹿かはともかく記憶力に難があるようだ。魔人最強だというのに哀れケイブリス。

「あゝ……。なんかケイブニヤンちゃんがちらない人に絡まれてるゝのねえ。やつかいなことになりそうなのねえ。」

そこに呑気でのっぺりとした甘い声が響く。ケイブニヤンの後からふらふらとした足取りで、同じく獣耳の少女が現れたではないか。今度は犬である。

「あー！ けーぶワン！ 今までどこ言ってたにやん！ ぴゅーにやーん!」

遅れて現れた彼女はケイブワン。ケイブニヤンと同じく魔人ケイブリスの使徒である。審議はわからぬがしっかりと任務を全うしようとしていたケイブニヤンは遅れたケイブワンにご立腹のようだ。何となく毛も逆立ち、フーっと言った声を上げるその姿は紛れも無く猫である。ちよつぴり可愛いとジルは思った。

「どうどう。落ち着くのじゃ。わしはククル、リスとは旧知の仲じゃ。もしお前達が

わしをリスの元に案内すればきつと褒められるのじゃ。もんぶちも貰えるじやろう。」

「ほんとにやん!? リス様がいるのはこつちにやん! しゃつしゃとついでくるにやん!」

ケイブニヤンはサが上手く発音できないのか、妙な発音で元気に悠々ククル達を誘導する。そういえば、カミーラへ届ける手紙は良いのだろうか。

「とぼとぼ…。絶対変なくのねえ。怒られてもわたち知らないのくねえ。」

第三十二話

ククルさん

in

魔人領

その2

とある居城の中に、人間ではない巨大な生物があたふたと右往左往していた。彼の者の名はケイブリス。最強の魔人にして最古の魔人と呼称される存在である。

「あゝ……。どうすりゃいいんだ……。勢いでカ、カカカ、カミーラさんを無理やり……。だ
があんだけ俺様が気持ち伝え続けたってのに!!! ……はあ。」

しかし、その独り言からはとても人類の敵である魔人だとは思えない。まるでまだ経験の浅い青年のようではないか。

事の始まりは、ケイブリスはかれこれ数千年に渡り同じく魔人であるカミーラに対し所謂恋を抱いていた事に起因する。ケイブリスは彼なりに、紳士的にカミーラへその思いを伝え続けていたのだが、長きにわたって無視されていた鬱憤が遂に爆発してしまつたのだ。

煮え切らない態度を取り続ける（とケイブリスは思っていた。その実完膚なきままに拒絶されていたが）カミーラに、ケイブリスは力づくでの隷属を決行。地力で勝るケイブリスは魔人最強としての力を存分に発揮し、カミーラを即時再生不可能なレベルまで

追い込んだ。しかしあくまでもケイブリスは純粹にカミーラを愛していた故に、傷ついたカミーラを見て立ち止まってしまったのであった。

「リス様リス様〜。」

そんなケイブリスの足元にちよこちよここと猫耳を生やした人物と犬耳を生やした人物が顔を出す。二人のその顔はどこまでも上機嫌であり、ケイブニヤン、ケイブワンが主人であるケイブリスを慕っていることがよくわかる。

「…おうケイブニヤン、カカ、カミーラさんは返事をくれただろうな?」

あ、すっかり忘れてたニヤン。と自らに課せられた命令を思い出したケイブニヤンであつたが、一瞬足りともその表情を曇らせること無く、むしろケイブリスに疑われたことに憤慨するかのように眉をひそめた。流星、場馴れしている。

「ちゃんと渡したニヤン! でもカミーラの奴返事くれなかつたニヤン! 酷いやつだニヤン!」

ケイブワンとケイブニヤンの十八番。カミーラが返事をくれなかつた、である。実際問題カミーラがケイブリスなんぞの手紙なんかに返事を書くことは天地がひっくり返つてもあり得ないのだが。

「また返事をくれなかつただとおおおおお!! クソう…俺様の堪忍袋もそろそろ限界だぞ…。」

今回の手紙はカミィラの傷をいたわるためにも渾身込めて書いた力作だったそうだな。書き手としては、読んで貰えなかつたかもしれないというのが一番苦しいものだ。痛い程、よくわかる。

「リス様、お客さんなのね。」

ケイブニヤンに続いて、同じくケイブリスの使徒であるケイブワンがケイブリスの間の扉を指さす。一体全体、こんな時期に誰だ全く。

「何い？ メデイウサの奴か？」

ケイブリスはケイブリス派という大層な一大勢力を築く頭領であるが、基本的に嫌われもの。どちらかと言えば、ホーネット派が嫌だからケイブリス派に属しているのが大半であろう。そのため好き好んで彼の居城に訪れるのは唯一友人とも呼べるメデイウサとその使徒アレフガルドくらいなものであった。

ところが今日は勝手が違った。ゆっくり開き、溢れんばかりの後光と共に踏み入ってきたのは全く見覚えのないボロ布を来た少女と、どこかで見た気がする女と、ホーネット派の魔人ノスであった。

「おおおおおお！ 随分立派になったのぉ!! あの頃とは大違いじゃ。」

戦闘好きなノスが殴りこみでも来たかと思えば、真っ先にケイブリスの元へと駆け足で寄って来たのは見覚えのない少女であった。膠着した空間にぺたぺたと石床を駆け

る音と、無駄にやかましい少女の声だけが響く。

「なんだてめえは？ 人間…じえねえよな。使徒か？」

もしやこいつはノスの使徒だろうか。しかし殴りこみだとしたらわからない。ノスは強いがケイブリスの強さは伊達ではない。ましてや、ケイブリス派の魔物が跋扈する領内で勝算など無いに等しい。何を思ってここに来たのであろうか。

故に、焦ること無くケイブリスはその少女をじつと見つめる。ケイブリスは感覚的な察知は苦手だが、血独特の色香が漂うその少女は少なくとも只の人間では無さそうだ。

「まあ今はこんな姿だからのお。わからんでも無理ないわい。」

ケイブリスの質問に対し、少女はやれやれと首を振る。その態度は一介の使徒が最強の魔人であるケイブリスに振る舞うものではなく、まるで旧友と話しているかのようである。これにはカミーラの件で落ち込んでいたケイブリスもカチンと来てしまった。

「…俺様を馬鹿にしてるのか!? おお!」

ケイブリスはその巨体に見合った巨腕を振りかぶり、直ぐにでも少女を押しつぶせる体勢へと動く。その動きはケイブリスにしてみれば緩慢なものであったが、只の魔物から見れば正に刹那。それほどまでにケイブリスとは格の違う存在なのだ。

こうなってしまうえばもうこいつの命はもらったも同然。ノスのやろうが何を考えていようが関係ねえ。俺様の機嫌を損ねたことを後悔させてやる!

「なんじゃカツカしおつてからに。そんな態度をとられるなんて、わし悲しい。あれだけ高い高いしてあげたというにのぉ……。」

ところが、そんな状態にも関わらず少女は膝を抱えて蹲り、右人差し指で地面をなんだか知らないがなぞり出したではないか。しかもわけもわからない事を呟いている。

こいつは一体何だ？ 俺様の気迫に何も感じていねえのか？ しかも待て、今なんか……。

「高い高い……？ …………っ!? てめえなんで知つてやがる!? こ、殺してやる!!」

高い高いという言葉にケイブリスは反応し、カミールに対する思いとは違うベクトルで赤面。それは偏に恥辱であろうか。高い高いとはズバリ子供に対し大人が行う遊びの一環のあれである。

ケイブリスにも当然子供のような時代があった。両親はいなかったが、親代わりの存在ならば彼にもいた。その人物は異様に巨大な体躯を持っていたために、ケイブリスは良くその人物に高い高いをねだったものだ。

「リス様、お顔真つ赤なくのね。」

「ほへ、リス様風邪引いたニヤン？ ニヤンが看病してもんぶちいっぱい貰うニヤン！」

常に使徒達にはかっこいい姿を見せてつけようとしているケイブリスである。不意に

普段は見せない主のあられもない姿を見てしまった使徒二人が、ケイブリスの気持ちなどまるで考えずに声に出して指摘してしまったのも無理もない。使徒達になんとも無様な姿を見られてしまったではないか。主にその使徒達のせいであるような気もするが。

ブンブンと赤面した顔を追い払う。兎も角、コレ以上の会話は無意味である。振りかぶった右腕を振り下ろそうと力を込め、そして標的に狙いを定めるため少女を睨めつける。が、少女はケイブリスに行動を察知すると、逃げるかと思いきや真っ直ぐにケイブリスの目を見返して待ったをかけた。

「STOPじゃSTOP！ もうちよつと思慮深くなるのじゃ。そのことを知っている人物で、わしに当てはまりそうな奴はおらんか？ ほれ、あの強くて大きくてカッコいい…それでいて美しさも兼ね備えた最強の存在を……。」

見知らぬ相手と真っ直ぐ見つめ合ったのは何年振りであろうか。未経験どころか数だけはやたらとこなしてはいるが、未だ初恋は抱えるケイブリスはその視線に思わずドキリと固まってしまった。さらに言えばケイブリス自身この少女が何を知っているのかも段々と気になってきたのであろう。

「ああ…?! てめえ何を言ってるやがんだあ？」

ケイブリスにとってカツコイイ存在とは自分自身において他にない。が、自身を除い

て考えるとすれば……。それはやはりケイブリスが焦がれ続けたあの最強の魔王以外にあるまい。それこそがケイブリスの成長の原点なのだから。

だとしてもこいつがあの方なわけがねえ。いくらなんでも姿が違いすぎるし、どう見てもこいつの見た目は人間だ。

「それにわしが言った通り、努力を続ければ強く慣れたじやろ？ 今ではリスが最強の存在と聞いたのじゃ。わしとしても喜ばしい。よく頑張ったのじゃ。」

頑張ったのじゃ。そんな言葉をかけられたのは何年ぶりだろうか……。ケイブリスは努力を重ねて強くなった。最弱と言われたあの頃から、自分を支えてくれたあの人を信じてひたすらに生き延びて強くなったのだ。

「……いや。そんなわけねえ……。あれから何千年経ったと思つてやがる。ありえねえ……。ほんとに、ほんとに……。ククル姐さんなのか？」

「おうとも。久しぶりなのじゃ。」

「それにしても姐さんがまた魔王になるなんて……。流石姐さん！」

ケイブリスは上機嫌であった。最初こそ疑っていたが確認してみればどうやら本人

に間違いはなかったようだ。それに魔王の力も健在とのこと。かなり小さくなってしまったが、そもそもリスは変態を重ねる種族である。見た目なんぞ大した問題ではない。

「ふほほほ、まあわしは最強じゃからの。と言つても2・5%だけじゃからなんとも言えんがな。あんれま、立場が逆転してしまったな。」

ケイブリスとの久しい再開にククルもご満悦。ケイブリスの肩車に乗り、現在ケイブリス城周辺を観光中である。と言つても見栄えのない城壁と岩肌が見えるだけなのが。

「それじゃ今度は僕が今度はリトルプリンセスの奴を殺して一緒に魔王になるんだ！」

ケイブリスにとってククルは、奇怪な姿から虐められていた自身を地獄から救い出してくれた誠の英雄にして親代わりである。あまりの喜びように普段の舐められないようにと身につけた喋り方も忘れて幼児退行。全く最強の魔人には見えないが、これもケイブリスの一面であった。

「あー、魔王についてはいろいろとリスに言わなきやならん事があるんだが。それは置いといて話し方は今の自然体でええぞ。なんというか見た目とあってないしの。」

それはあなたにも言えそうですがね、ククルさん。

「ぼ…、俺…でいいの？ 姐さんと話すとかやっぱり昔の思い出しちやって…。」

えへへと笑い頬を掻くケイブリス。ああ、なんとも可愛らしいものだ、と絶賛クルは悶え中である。これもギャップ萌えだろう。いや違うか？

「リスよ。御主には今回ジルの事も含めてだいたい世話になってしまったな。すまなかつた。」

ククルはケイブリスの首もとをなぞるように優しく触る。以前の巨軀では出来なかつた事だ。人間の身体もやはり、悪くない。

「姐さんのためだからね！ なんならホーネットの屑も姐さんのために殺してくるよ！」

ケイブリスはちよつとした興奮状態故に可愛い言葉遣いをしてはいるが、中身はそのままである。なんとも恐ろしい発言をサラツとしてくれるものだ。

「なんというか物騒な性格になったのお。ところで真面目な話じゃが、わしには目的が有るのじゃ。殆ど誰にも話しておらんがリスにはそれを知ってもらいたい。」

特段魔人界の統一なんぞを望んでいないククルとしては傍迷惑な話だ。それにククルとしては魔王の娘なんて興味深いものを一度は拝んでみたいのである。

第一ホーネットが死ねば、ランスに纏わる歴史が大きく動いてしまうではないか。やはりケイブリスには知ってもらわねばならんな…。

「こ、光栄だよ！ 一体どんな目的なの？」

ククルから信頼されているという事実 Кейブリスは目をらんらんと輝かせる。彼の者幸福ここに極まつたり。

が、その高揚も長くは続かなかつた。ククルは注意深く周囲を見渡し、誰もいないことを確認すると、身体を低くし耳打ちした。

創造主ルドラサウムの支配を終わらせることじゃよ、と。

「ルドラサウム？」

「神々の頂点に君臨するこの世界を創造した最高神じゃな。」

ケイブリスにとっては聞いたこともない名であつた。それも当然、ルドラサウムは歴史上一度たりとも現界したことのない神なのだ。本の一握りしか知る由もない。

「じよ…冗談だよな？ 姐さん。」

ククルの言葉にケイブリスは今までの高揚を忘れ、ピタリとその歩みが止まる。

「わしは至つて本気じゃ。この手でこの世界の理、変えてみせようぞ。」

だがケイブリスの祈りも虚しく、ククルはニヤリと笑つて答えた。彼女は本気なのだ。

「そ…、それはだめだよ姐さん…。それだけは駄目だ…。お、俺は反対だ!!!」

ケイブリスはそう怒鳴り散らすと、身体を大きく揺すりククルを振り払う。先ほどま

での親愛はどうしたというのだろうか。それほどまでに神に逆らうのが怖いというのだろうか。

「何故じやリス。力を求めてたのではなかったのか？ どれほど強くなろうと神がいるこの世では、力など無意味じゃ！」

「た、たとえ姐さんでも！ 神に牙を向くって言うなら俺は従えねえ!!!」

「良いのですかジル様。さしものククルもケイブリスとやり合えば只では済みませんぞ?」

ククルとケイブリスの対峙をひっそりと見守るものが二人。魔王ジルと魔人ノスである。

「…私はククルを信じているわ。私を救った彼女ですもの…なんとかなるわ…よね？ 大丈夫よね?」

「ああ！ この不肖ノスの迂闊な言葉をどうかお許し下され!!!」
未だに心配性が抜けないジルと、相変わらずのノスである。

第三十三話

ククルさん

in

魔人領

その3

月明かりが荒野に立つ二人を照らす。荒野の風が吹きつけ、ケイブリス城がゴーつ、と静かに鳴く音が響いていた。

「リスよ。どうしてもか？ このわしの言うことでも信用できんか？」

丸い者の王、ククル。普段の陽気な表情は消え、ただケイブリスを見つめていた。

「姐さんは知らねんだ…。姐さんが死んだ後、何が起こったかを…。」

相対するケイブリスはゆつくりと下を向き、震える声でぽつりぽつりと言葉を紡ぐ。己が経験したあの事実を。神とはどれほど恐ろしいのかということ。

「姐さんが死んでアベルの糞野郎が死んで、散り散りになった俺たち丸いものはドラゴンを恐れ隠れ潜んでいた。そんな時だ。空が落ちてきやがったんだ…。突然空の色が変わりやがった。それが、全部神々だった。魔人だった俺は奴らには見向きもされなかったが、あのドラゴン達が次々と胸元を一突きにされて、魔法で吹き飛ばされて、訳の分からない力でバラバラにされて…。あれが地獄の一丁目って奴よ。気付いた時に

はもう大陸にはダーレもいなくなりやがった。戦いにもならねえ。あんなのに敵うわけがねえんだ！」

この世界で嘗て唯一、世界統一を果たしたドラゴン。魔王ククルククルを討ち倒した至高の種族。悲劇を繰り返す現実を変えるために、平和な世を目指した者達の末路は、実にあっけないものだった。闘争を求める神々にとつて、平和を求めたドラゴン達は最早不要な存在となった。神が創り出したシステムの一つである魔人であつたケイブリスは神々の対象とはならず、ドラゴンを恐れて逃げ出したこの世の果ての果てでその光景を目撃したのだ。

「それが魔王になりたい理由か？」

魔王は神の創り出した絶対者。故に魔王となれば神の庇護を得たものと同じ。少なくとも神が魔王を襲うということはずあり得ない。それはあの和睦の魔王ガイが証明したと言つても良いだろう。

「神つてのは次元が違うんだ……。勝てる勝てないとかじゃねえんだよ！ 従わなけりや馬鹿を見るだけだ。空一面の敵が全員俺たちと同じ：いやそれ以上かもしれないねえ！ そんな連中なんだよ！」

ケイブリスは悔しいのか恐れを振り払おうとしたのか、拳を握りしめ大地に叩きつけた。打ち付けられた拳は乾いた地面をえぐり、パラパラと土埃が風に乗る。

「…一理ある。しかしわしらに与えられた魂の容量では今の魔王の力を手に入れば千年と生きてはられんぞ。」

ククルは微動だにせずに、淡々とケイブリスに残酷な現実を告げる。お前の求めるものは、お前が想像する程の価値はないのだぞ、と。

「それでも千年もの間最高の自由が手に入る！ 姐さんの頃はなかったが今は無敵結界もある。しかも敵は下等な人間ときた。魔王になればこの世界は思いのままだ！ もう何も恐れるものはねえんだ！」

魔王を否定しようとするククルに反発し、ケイブリスは苦虫を噛み潰すような顔を上げ、キツと睨みつけた。ケイブリスにとつて魔王とは特別な存在なのだ。非無き最高の存在、誰も逆らうことの出来ない力、そして嘗て夢見た理想の姿…。まさかその理想に否定されようとは。

深呼吸。ククルは埃だらけの空気を避けるためか、両手を腰に当て空を見上げた。

「…リスよ。わしは嘗て魔王と成り、丸い者の領土をドラゴンから守るためにも、丸いものを再び表舞台にあげるためにも日々激しく辛い闘いの中に身を置いた。くしくもそれは神々の求める闘争そのものであったが、それでもわしは大切なもののために立ち上がり続け、こうしてリスを救うことも出来た。わしはそれを後悔などしてはいないし誇りにすら思っておる。」

震えるケイブリスにククルは先ほどまでの鉄仮面を脱ぎ、己が綴った道標をゆつくりと語る。

「それが神と戦うことにどう関係するっていうんだ！」

「今は人間がこの世界を跋扈しておる。じゃがそれも長くは続かんじやろう。いずれ再びリスの体験した神による淘汰が行われ、また新しい存在がこの世界を歩き出すだろう。」

神々の頂点に君臨するルドラサウム。彼が飽きれば全ては終わる。神々による掃討には出会ったことはないが、丸いものがメインプレイヤーの席を降ろされ、ドラゴンが突如地上に溢れかえったことをククルはよく覚えていた。

「わしは一度死に、何も無い無垢な状態で丸い者もドラゴンも殆どが滅びたこの地に再び生を受け、第三者となった時ふと思ったのじゃ。丸い者も、ドラゴンも、ましてや人間も、外面が違う以外そこに差異はないのでは、と。∴そして実際にこの目で人間を見て確信したのじゃ。我々は神の遊戯のために、只闘争をわかりやすくするために区別されただけの同質の存在であるとな…。」

ケイブリスは驚愕した。魔王になるのを否定したかと思いきや、まさかあの人間共と自分達丸い者が同じ存在だと∴仲間だと言うとは微かも想定していなかったのだ。

「あんなちんけな人間どもと一緒にだあ？ 姐さんは人間がどれだけ俺たちの前じゃ

ちつぽけなゴミ共だつてわかんねえのか!？」

再び、深呼吸の後、ククルは顔を下ろす。その視線にはどこか憐憫を含んでいるかのよう思えて、ケイブリスは目を合わせられなかった。

「それは神がそうなるよう創り出したからじゃよ。わしはこの世界の歪さが気に食わぬ。正に盤上の児戯、つまらん、つまらん。故に、わしは再び同じように立ち上がろうと思つたのじゃよ。この世界に翻弄される悲しき全ての存在を守るためにも、わしの自己満足のためにもう。」

ケイブリスにはその考えはとてでもないが理解できない。何故殺しあう相手同族などということが出来るのだろうか。まして、丸い者の王であるククルが、他種族の事を守るだなんて…。

「それが、姐さんの戦う理由…。」

なんで丸い者の事だけを考えないのだとか、なんで危険を犯してまで利益もなく神々と戦おうとするのかとか、そもそも勝算はあるのかだとか、言いたい事がケイブリスには山ほどあつた。だが、ククルの視線と交差するたびに言葉が詰まり、結局出てきたのは意味のない確認だけであつた。

「そうさな。他にも幾らかあるにはある。単に面白そうだからとも言えるし、有る男の行く末を見たいというのものもある。まあ理由なんぞ大した意味はない。自分自身が何

をしたいか、じゃ。」

ケイブリスは、ククルは変わったと思った。あの頃の王の姿とは違うのだと。自分を守ってくれた絶対強者ではないのだと。

「リス、御主はどうじゃ？ 何がしたい？」

「…僕は安心して暮らせればそれでいい。でもそのためにも力は必要なんだ！ だからやっぱり魔王にはなりたいし神には逆らえないよ…。」

ククルは、ケイブリスはあの頃のままでなと思った。凶体もその力も比べ物にならないほどでかくなつたが、本質は全く同じ。物事の姿を捉えられず、只強いものを恐れ、そして誰かから認めてもらうために明確な称号を求めている。

やはり、無理か。ケイブリスが自分を慕つたのは、自分が強かつたからなのだろうか。それだけだったのだろうか…。

「済まなかつたな、リス。御主の考えは至極真つ当じゃ。わしは考えを押し付けようはない。先の話は忘れてくれ。わしは自由気ままに生きるしリスも御主の好きなように生きる。じゃろ？ さあわしももう満足じゃ。そろそろ帰ろうぞ。」

くるりとケイブリスに背を向けて、ケイブリス城へとククルは荒野を歩き出す。

「…だが一つ覚えておくといひのじゃ。魔王になつた時、リスはリスではいられないかもしれない。嘗て魔王ジルがそうだったようにな。」

なんだか景色が行きと随分変わったな、とだけククルは考えた。

「ふむ…。一先ず激突は避ける事が出来たか…。しかしこれからどうなることやら。ジル様を守るため、今一度己自身に喝を入れねば。」

なんとかククルとケイブリスの対決は避ける事が出来たようだ。しかしその雰囲気はとても好ましいものではない。ククルとケイブリスの関係は嘗ての俺とジル様と同じようだったのでは思ったが…やはりククルも魔王であった頃とかなり違うのだろうか。何にせよこのままケイブリス城に居ることはもしやすくと難しくなるかもしれない。

詳しく観察するためにジルの元から離れていたノスは、ククル達の会話が終わったことを確認すると城壁から飛び降りる。今のジルには危険が付き纏っている。できるだけ早く戻らねばならない。ノスは魔人の持つ強力な脚力を持って、即座にジルがいるであろう一室にたどり着いた。が、どうやら部屋から話し声が聞こえてくる。まさか魔人がジルを見つけ出してしまったかと扉に走り寄った時、やたらとやかましい甲高い声が耳に突き刺さった。

「それでそれでニヤンはびゅーでにゃーんニヤン！ その絵本は今でも宝物にやんだニヤン！」

「そう。いい友達を持ったのね。」

「でもケイブニヤンちゃんその後大変だったのねえ。」

「…どうやらケイブニヤンとケイブワンのようだ。ノスがちらと中を覗き見ると、何やら彼らはジルに一所懸命なにか話しているようである。少なくとも危険は無さそうだ。」

「…お前達は使徒だというのに、まるで悪意が無いし狂気もない。強いのね。」

「ニヤンはリス様の使徒ニヤン！ 強くて当然ニヤン！」

ケイブニヤンとケイブワンを優しい微笑みで見つめるジルは、やはり過去の魔王ジルとは似ても似つかない。

嘗ては大陸を支配し、そのカリスマで全てを従えたジル様。今のジル様にそのカリスマは見られない。故に俺はジル様はお変わりになられたと考えた。だが、あの主人にか懐くことのあまりない使徒達があんなにも慕っているではないか…。何か周りを惹きつけるその在り方は変わられてはいない。そして俺も惹かれた一人…。

「ジル様。只今戻りました。どうやら最悪の状況は避けたようです。」

ガチャリと扉を開け、当時と同じように一礼をしつつ、静かにゆつくりと部屋に入る。

「…ノスつ。少し遅かったようですね。何かあったのかと心配…しました。」

さつと立ち上がりノスへと歩みを進めるが、昔の距離感を思い出し途中で立ち止まってしまふジル。その行為はジルがどれ程ノスを頼っているのかを表しているようだった。

ジル様がここまで信頼を置いてくれる。ならばもう何も必要あるまい。

「ご心配をお掛けしました。このノス、生ある限り必ずやジル様のお傍に。」

さて此度のような無用な心配を起ささないためにも、まずは直ぐに脚力でも鍛え直すか。

第三十四話

ククルさん

in

魔人領

その4

「おかえりなさい。首尾は…あまりよろしくなかったみたいね。」

ケイブニヤンとケイブワンが去ってから暫くして、ククルはその失意を隠さずに帰ってきた。それだけ彼女にとってケイブリスがついて来なかった事がショックだったのであろう。未だケイブリスが力に怯えていることはよくわかっているつもりであった。だが所詮それはつまり程度。結局のところククルはこの自分自身であれば必ずやケイブリスを導くことが出来ると過信していたのだ。

「ふん。取り敢えずはここでの安全は確保できたのじゃ。ひとまずそれで十分じゃろう。」

ケイブリスがククルの提案に対してとった選択肢は不干渉であった。ケイブリスとしては恩のあるククルと敵対はしたくはない。だが神々と戦うなんてのはもつての外。本心を言えば、ケイブリスはククルと共にこの世界に君臨したいと思っていたであろう。だがククルがケイブリスを良く知り信頼していたように、ケイブリスはククルが己の考えをテコでも曲げない性分であることはわかっている。故にケイブリスはそれ以

外に選ぶ道はなかったのだろう。

「俺としてはここに留まりたくはないのだが……どこかに宛があるわけでは無いからな。」

ううむとノスは首を撚る。一見魔人最強であるケイブリスに黙認してもらえたことで安全を確保できたようにも思える。しかし不干渉を約束したとしてもケイブリスがジルやノスにとって好ましいとは決して呼べない存在なのは変わらない。出来ることならばより安全な地を得たいものだが、如何せんノスには味方が少ない。ジル復活に向けて全てを切り捨ててきたのが仇となった。ノスに協力的な魔人などお人好しのアイゼルとサテラぐらいなものだったのだ。ジルに至っては这个世界、まさに四面楚歌である。

「リスの奴は信頼できる。共闘しようとはせんかったが現状ここを動かないほうがいいじやろう。」

「だがケイブリスが信用できようと他の魔人はわからん。いや、危険だと分かりきっている。特にメデイウサは危険な魔人だ。嘗てはジル様に忠誠を誓っていたが今はどう動くか分からぬぞ。」

魔人メデイウサ。ジルが魔王であった当時、ジルによって魔人となった存在である。その性格はジルの影響を強く受けたのか残酷にして残忍、人間を殺すことそのものを目

的として殺戮を楽しむ凶悪な魔人となった。さらに言えばメデイウサはケイブリスを慕っている。メデイウサならば魔王の血をケイブリスに献上するためにジルを殺すなんて事をやりかねない。

「それにケイブリスが目をつむっていようとメデイウサ達魔人と敵対してまで私達を匿うなんてことはしないでしょう。別の場所を探すべきね。」

「そうじゃな……。リスの奴が共に来てくれれば面倒もなかったんじゃがな……。」

がくりと脱力し、ククルは机に突つ伏す。唐突な行動に対面に座っていたジルは小さく悲鳴をあげた。

「ちよつとくつ……………」

粗暴なククルの行動に非難しようと声あげようとする、が……。項垂れたククルの表情は魔王のそれとは思えない憂いに満ちたものだった。

「ククル……。」

「あの大馬鹿者め……。」

ククルもこんな表情をするのね……。そうジルは思わざるを得なかった。初めてあった時からどこか傲慢で、自信家で、姿に似合わない智謀で何者にも縛られない存在。小さなことかもしれないが、そんなククルの挫折を初めて見たかもしれない。ケイブリス城までの道中、腹が減ったと言って元魔王であったというのにそこらに生えていたキノ

コを食べ腹を下す。そんな自由奔放なククルが…。

「ケイブリスは力あるものには逆らえない。そういう男です。神々と戦うなど彼には到底不可能だったのでしょう…。」

ククルの失敗はなるべくしてなったもの。それはククル以外の視点で見れば当然と言つて差し支えない程。…だというのに全く何を落ち込んでいるのか。これで少しは元気をだして貰えるといいけど、と淡い期待を乗せジルはククルを励まそうと試みた。

「のう。ジル、それにノス。御主達も本心では神々と戦うなど愚かなことだと、烏澁がましいことだと思つておるか？」

互いの思いがすれ違つてしまったかのように、数秒間の沈黙が流れた。

「…ふ、ふはっはっはっは！ いやこれは失礼した。なんとも似合わない台詞だな、ふ。散々俺に信用しろと言つておいてなんだな。」

しかしてその沈黙はノスとジルの笑い声に掻き消された。ノスは口元をニンマリと曲げククルの背を叩き、ジルは右手で口元を抑えクスクスと笑う。思わぬ反応にククルはポカンとまぬけな顔を上げた。

「…あなたらしくないわね。リスに断られたくらいで自信をなくしたの？」

「くらいとはなんじゃくらいとは！ わしは全然気にしてないからの！ あーもう神だろうが悪魔だろうがわしにかかればチョコチョコイのチョコイじゃ!!」

ジルの挑発を孕んだ発言にカーッと顔を赤らめると、ククルは勢い良く机を叩き立ち上がった。

「ふふっ、そのくらいの方があなたらしいわ。」

「ぐっ、わしは情報を集めに行ってくる！　ここでしばし待つとれい!!」

恐らく実際は行わない言い訳であろうそんな言葉を残して、ククルは今までにない全速力で部屋を抜け出した。いつもかき回される側であったノスとジルとしては痛快この上ない。ノスとジルはお互いの表情をちらと一瞥すると、暫く再び腹を抱えて笑い続けた。

「しかしあのククルが日和るとは、なかなか珍しいものが見れましたな。」

お互い笑い尽きるとノスはポツリと眩き、そして先程のククルの赤らんだ顔を思い出し再びクツクツクと笑う。しかしそんなノスとは対照的にジルはひとしきり笑った後は、終始ククルの去った扉を眺め続けていた。

「彼女も私達と同じなのよ。もしかしたら、私達の想像以上に苦しんでいるかもしれないわ。私と違って、彼女には誰も慕ってくれるひとがないのだから…。」

「ジル様…。」

…やはりジル様は俺よりも深く物事を捉えてなされる。俺もジル様と同じ視点に立ちたいものだ。しかしこれは自分がジル様の御心を支える存在たり得ていると認めて

くださっているのだろうか…。俺も遂にジル様にとってそこまでの存在となれたのだろうか…!

残念ながらノスはジルが自分を認めてくれるということが気がかりとなり、ククルの感情云々までは頭がまわらないようであった。まだまだジルと同じ視点へは遠いようである。

「だから…私達がククルを支えられる存在にならないと…ね。」

ノスの無意味な思考はくるりと振り向いたジルの笑顔に断ち切られた。嘗てジル様は驚くべき程新しい世界をこの俺に魅せつけてくれた。しかしそれでもまだ新しい境地をこの俺に教えてくれるとは…。

「ふむ。ではそこに私も加わらせていただきましょう。」

突如として、いつの間にか扉の前に第三者が現れていた。本来であればこのような状況はノスがなんとしてでも回避するはずであったが、ジルに心奪われ無意識になっていたのが仇となったか。

「お、お前はっ!?!」

ジルにはその姿に見覚えがあった。どこか魔物らしからぬ礼儀正しきで周囲から少々孤立していた魔人。やたら黄色い身体が目によしくない妙な魔物。だがその生真面目さから信頼の厚い良き忠臣であった男。

「いやはや、またあなたに仕えることが出来ようとは冥利に付きるといふもの。このジーク、時は移れど主変わらず。どうか私めをお使いくださいます。」